

京都府埋蔵文化財情報

第 62 号

墓に土器を供えるという行為について(下)-----	深澤 芳樹-----	1
シミズ谷城跡の発掘調査-----	柴 暁彦-----	8
篠・マル山1号窯跡の発掘調査-----	野々口陽子-----	14
田辺城跡の発掘調査-----	石尾 政信-----	20
木津町瀬後谷瓦窯の操業に関する一考察一軒瓦の分析から-----	奥村 茂輝-----	28
共同研究 改築された横穴式石室—京都府中丹地域例を中心に—-----	松井 忠春 小池 寛-----	40
—平成8年度発掘調査略報—-----		52
5. 松ヶ崎遺跡	8. 盛林寺裏山古墳	
6. 桑原口遺跡第3次	9. 興戸古墳	
7. 今福北城跡		
随想 十九年目の西安再見の記-----	川上 貢-----	59
府内遺跡紹介 74. 奉安塚古墳-----		66
75. 梶塚古墳-----		69
長岡京跡調査だより・59-----		71
センターの動向-----		74
府内報告書等刊行状況一覧-----		76
受贈図書一覧-----		81

1996年12月

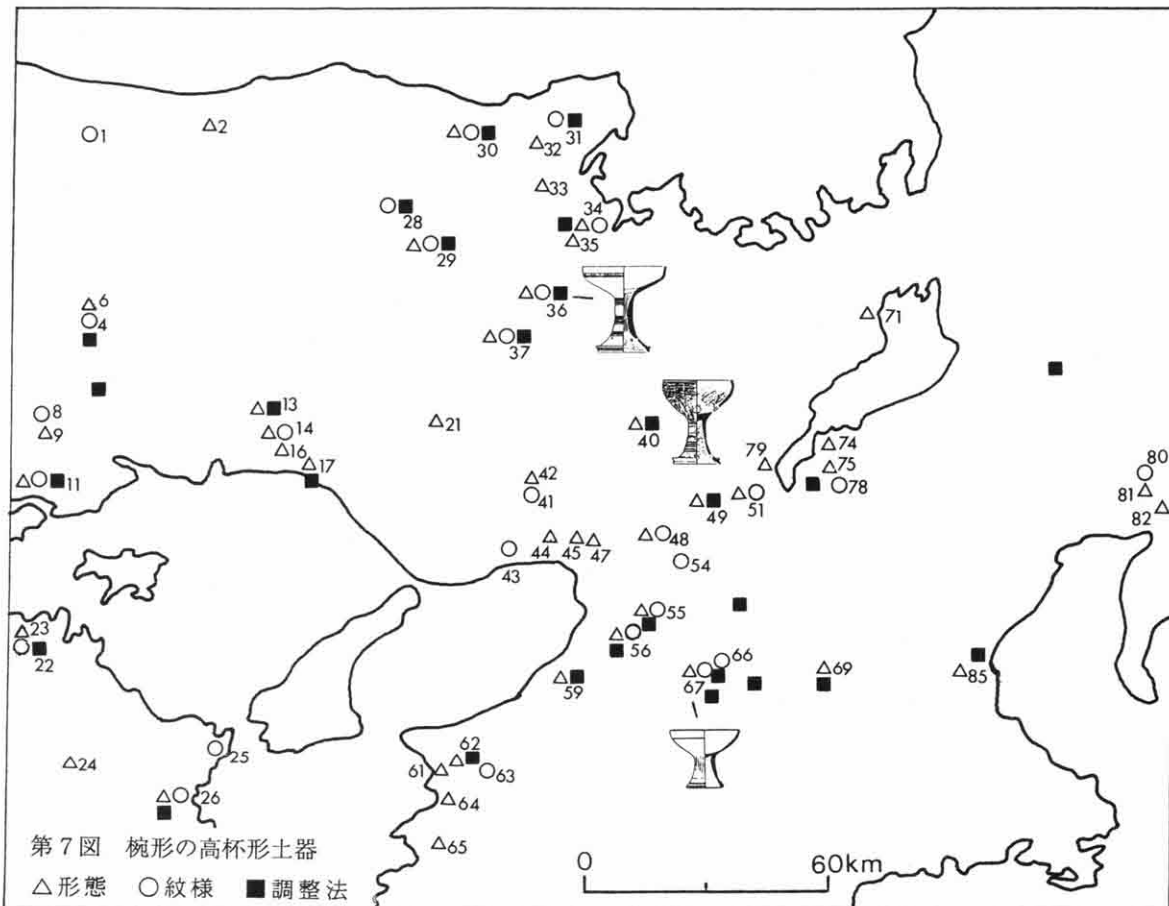
財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

墓に土器を供えるという行為について(下)

深澤芳樹

脚台付土器の分析 最後に脚台のついた土器を検討しよう。

6は、内彎する杯部をもつ高杯形土器である。この形態は、近畿地方およびその周辺部においてごく一般である(第7図△)。脚部には紋様がある。断面の丸い篋状工具によって描いた凹線紋と、丸い小さな透し孔とで、凹線紋と丸い透し孔の組み合わせも近畿地方および周辺部に広く分布する(第7図○)。調整法は脚部の外面が縦ミガキ、内面が横ケズリで仕上げ、杯部は外面が縦ケズリ→縦ミガキ、内面がハケメである。これと同じ手法は、近江より西の地域におもに分布する(第7図■)。以上のように6のもつ形態・紋様・調整法の各要素は、近江より西の広い地域で重なってしまうので、6の出身地を絞り込むことができない。なお円板充填法によっているが、これは近畿・東海地方や中国・四国地方にあまねく広まった手法なので、これも地域を限定する手がかりにはならない。



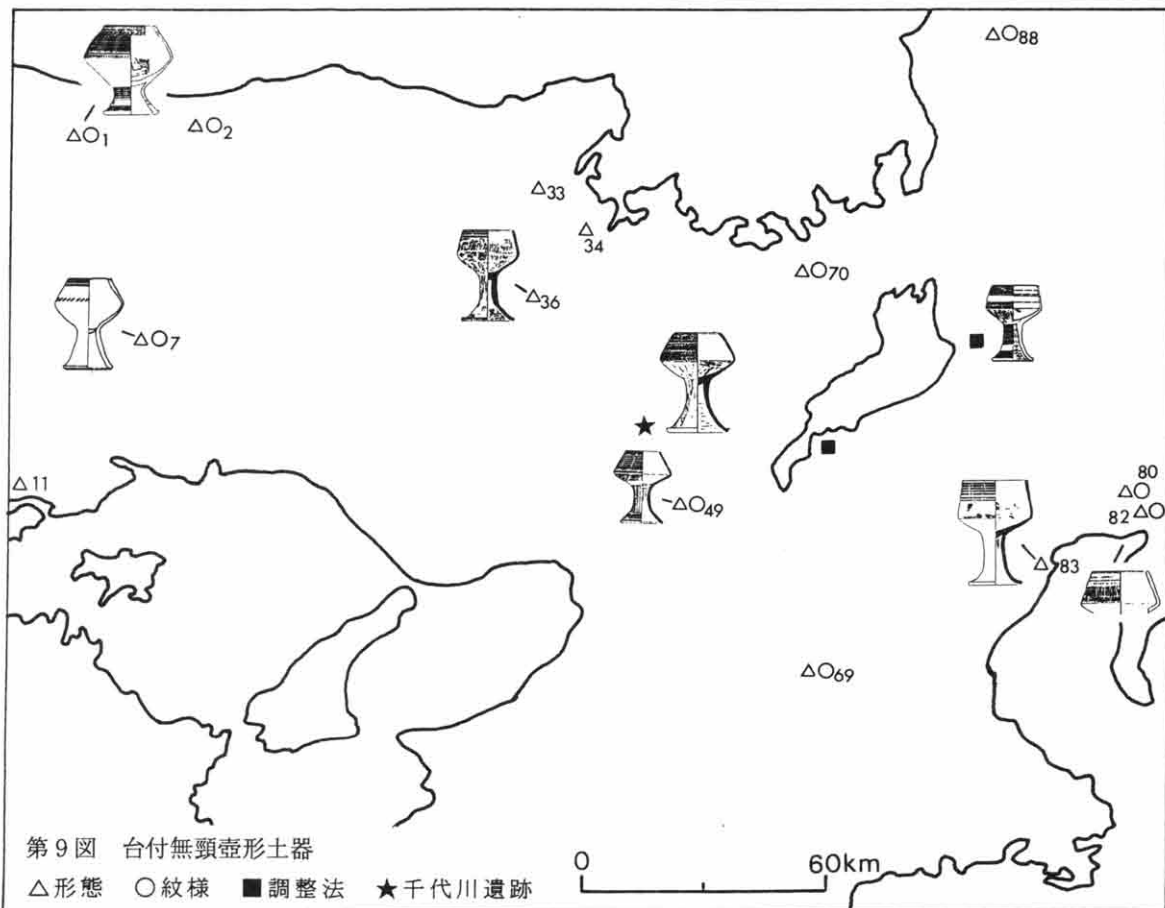
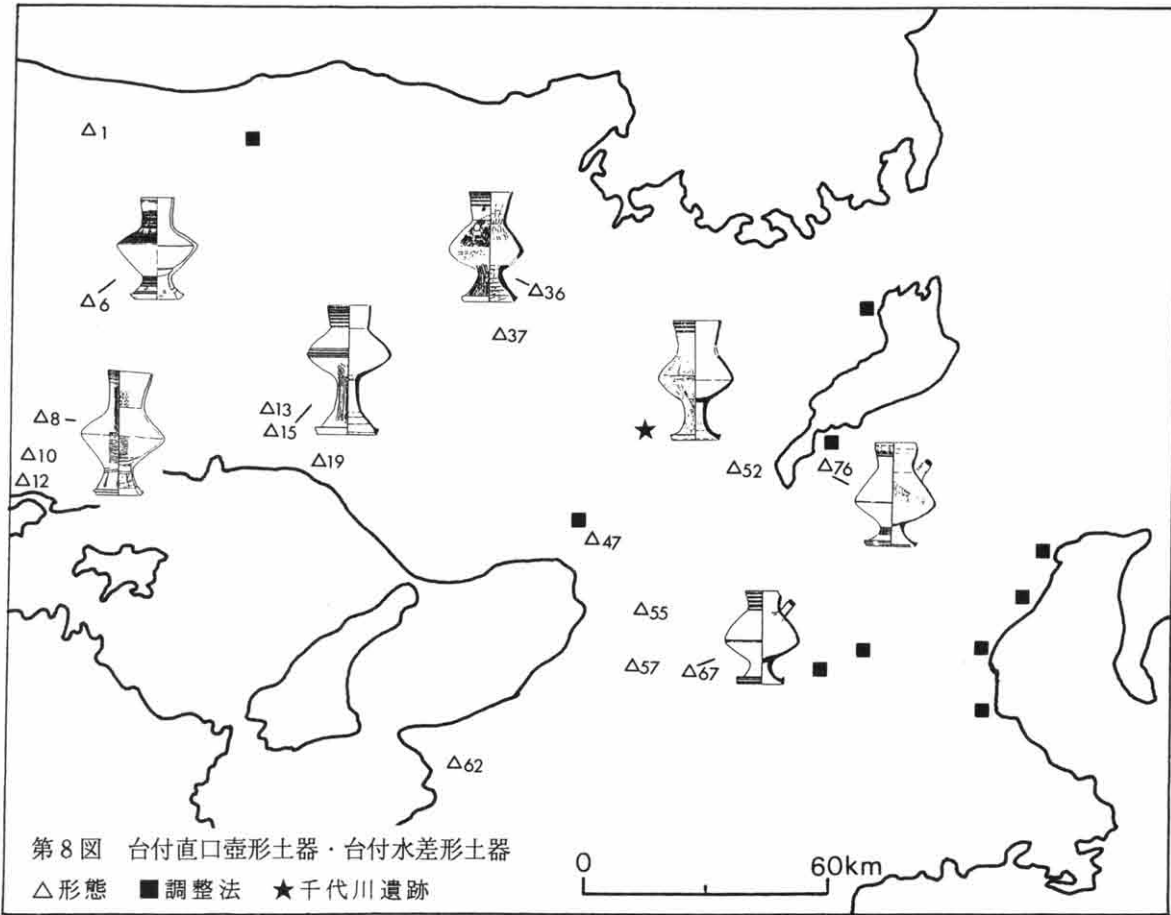
15には、体部上半部から口縁部にかけて欠けた部分があって、把手や半月状の抉りの有無を確認できない。だから15が、台付直口壺形土器なのか台付水差形土器なのかわからない。いずれにせよ両者の基本形は酷似している。その分布は近江以西の近畿地方および中国地方である(第8図△)。なお口縁部には凹線紋が3条めぐるが、これらの土器の口縁部上半部外面に凹線紋があるのも、これらの器形に一般的である。調整法は、外面が脚部から体部下半部にかけて上方向のケズリ→縦ミガキ→上端の横ミガキ、内面は脚部・体部ともにナデである。この調整法は伊勢で一般である(第8図■)。もし仮に脚部内面にケズリを加えておれば、まさしく近畿地方以西に広く分布する手法に一致する。だから15はあるいは近江以西に点々と分布する脚部内面のケズリの省略型とみなすべきなのかもしれない。が、今は、あくまで脚部内面に関して非ケズリ調整法域と形態・紋様域が空間的に重複しない点を重視して、その出身地の特定を控えよう。

16は、体部が鋭く曲折し、直口の口縁部をもつ台付無頸壺形土器である。この形態は中国地方から近畿地方北部をへて東海地方に分布している(第9図△、なお第9図に滋賀県近江町法勝寺遺跡方形周溝墓出土土器を参考にいった)。紋様は口縁部上半部に凹線紋を5条めぐらし、その下に列点紋を綾杉状に飾る。口縁部上半部の凹線紋はごく普通で、列点紋も大抵ある(第9図○)。調整法は、外面は体部から脚部にかけて縦方向ケズリ→縦ハケメ、内面は体部がハケメ、脚部が横ケズリ、である。体部外面がケズリ→ハケメ、脚部内面がケズリで、この組み合わせは、近江にある手法である(第9図■)。そこで各要素が重複する近江を、16の出身地と推定する。

形態・紋様・調整法 ところでこのように、土器を土器が所有する属性で一旦解体し、それぞれの属性をみると、分布域などに違いのあるものが多かった。一つ一つの属性の背景は必ずしも単一の系譜にあったわけではなかったのである。土器は分解した要素で構成されているわけだから、一個の土器といえども、たとえていえばその背景は多色多彩である。

組み合わせる主体は、作り手とその属する集団である。本稿において、特定の器形を地域によって違った調整法で作り、様々に加飾するという、弥生社会のやり方を垣間みた。たとえば広口壺形土器しかり、太頸の壺形土器しかり、壺形土器Gしかり、・・・である。この事実は、形態と紋様と調整法とが、決して同じグレードの属性でないことを示している。紋様と調整法についてはもう繰り返さないが、形態という属性はこの2つに劣らない、場合によってはさらに伝播力の強い属性であったといい換えることもできる。それは形態が、紋様や調整法に比べて秘匿性の少ない点に起因するのかもしれないし、それゆえに形態は倣ったか拒んだかがはっきりするので、新しい形態の模倣には彼らの価値観にかなったというもっと積極的な理由があるのかもしれない。

土器は多彩な来歴をもつ要素で構成されており、各要素の取り込みにはグレードの違いがあった。この事実は、各要素がある程度自律的であること、つまり他の要素に干渉されずに変化しうることを示している。そして形態・紋様・調整法などの属性は、さらに多くのさらに細かな属性からなっている。各属性についても、以上と同様な見方を適用することができる。また現実には土器を作る作者がある要素にめぐりあう機会と、各種の要素を一連の工程に組み込む「土器作りの場」でその取り込みを許す社会的状況、の2つが揃ってはじめて要素の取り込みが実現する。



内的か外的かを問わずあらゆる変化が起こる素地は、ここにある。この環境下、組み合わせとしての土器型式は推移した、と私はみる。

供献土器の故地 ともあれ出身地をある程度絞り込めたものを掲げれば、方形周溝墓①には亀岡盆地あたり、京都盆地あたり、由良川あたり、方形周溝墓②には亀岡盆地あたり、篠山盆地あたり、由良川あたり、方形周溝墓③には亀岡盆地あたり、近江南端部あたり、近江あたり、と推定できる供献土器があった。

供献土器を群としてみた場合その組み合わせこそ、各地の土器編年の併行関係を確かめうる絶好の基礎資料を提供する。というのは他の遺構に比べて、紛れ込んだ夾雑土器を除きやすいのと遠く離れた地域の土器同士が伴出することが多いからだ。

現に亀岡市千代川遺跡でみつかった方形周溝墓の供献土器には、直線距離でざっと30kmも離れた地域の土器が混ざっていた。ところでそれは形態・紋様・調整法の各レベルにおいて、亀岡盆地での土器作りの約束事を守らない土器群であった。これはどうしたことか。

周溝墓の祀り 大庭重信氏は、河内において日常生活域出土の土器より方形周溝墓出土の供献土器の方が、煮沸痕跡のつく頻度が高いことを具体的に数量比で示した。しかも壺形土器においても日頃煮沸に用いることの多い器種を積極的に選択しているという。そして大庭氏は葬送儀礼に煮沸を行なう場面があって、そこでこれらの供献土器が使われた、という重要な指摘をしたのである。^(注49)

千代川遺跡の方形周溝墓から出土した供献土器をみると、たとえば平底の壺形土器13点のうち9点までにススがついていて、その出現率は高頻度であった。これは河内における状況に合致するのでここ千代川遺跡においても、大庭氏が河内で明らかにしたのと同様な煮沸行為を伴う葬送儀礼が行なわれていたと推定できよう。とすれば千代川遺跡の方形周溝墓の周溝でみつかった供献土器の多くは、葬送儀礼で煮沸するために、意図的に集めた土器群とみて大過なからう。

ところで底部に穿孔した土器を含んでいたが、穿孔してしまえば煮沸できなくなる。しかも穿孔は高杯形土器にもおよんでいたのである。だからもし煮沸や穿孔がさみだれ式になされるのではなく、それぞれが一度に行なわれ、しかも盛付・煮沸・穿孔の順序が厳守されていたのなら、煮沸行為→盛付行為→穿孔行為の順序で土器は使われたはずである。この逆はありえないのだから、儀式はこの順番にしたがって進行したとみななければなるまい。とすれば、穿孔する段には、飲食物は既に煮沸すなわち調理ばかりか、消費もが終っていたはずだ。ところで、宗教学者柳川啓一氏によれば、儀礼には2つの役割があるという。「一つは、聖と俗をつなぐ媒介となっていくこと」、もう一つは「単に心の中で思い浮かべるというのではなく、外に向かって表現することにより、身体を含めた人間の全存在が開かれること」である^(注50)という。確かに神人共食などはきわめて普遍的にみられる人間の行為である^(注51)。しかもフランスの社会学者M. モース氏によれば、「神話は儀礼に意味を与え、儀礼は神話に現実性を付与している^(注52)」という。この側面が儀礼に内在するのなら、必ずや関係者らは儀礼に参加したろう。そしてその終る頃に土器が穿孔される場面に居合わせたことだろう。土器に残った痕跡から、執行者は先端の尖った道具で土器本体を壊

さないように注意しながら、コツコツと何回も加撃して直径1～2cmくらいの穴をあけたようだ。ここでこの打ち欠き穿孔が、すべての土器には徹底されていないという事実にあらためて注意しなければならない。この不徹底さこそ、その仕種をまねるだけで実行したことにするという、身振りを視覚的な象徴的所作として機能させていた証拠ととらえることができるからだ。

つまり飲食物やその材料の入った土器を運ぶ→火を焚いて調理する→参会者が飲食する→土器を打ち欠いて穿孔するあるいはその仕種をする→墓上か周溝内に使った土器を置く、と進行する葬送儀礼を土器自身に残った痕跡や出土状況から推定できるのである。しかも3つの方形周溝墓の供献土器のあり方から、同様な葬送儀礼が少なくとも3回は繰り返されたとみて、まず間違いなさそうである。この多回起性こそ儀礼を考える上で、きわめて重要である。

交渉のレベルの重層性 ではこの儀礼に用いた土器の来歴はどうだろう。千代川遺跡の墓に彼の地から直接運んできたのか、別の目的ですでに千代川遺跡に運んでいた土器をたまたま使ったか、それとも千代川遺跡において彼の地のやり方で土器を作り用いたか、大きくこの3つの場面を想定できよう。これについては、どこの土器か肉眼観察でわかるきわめて特徴的な胎土・色調の土器があった。由良川あたりとした土器がそれだが、千代川遺跡においてもその特徴に合致した土器がみついている。つまり持ち運ばれてきたことのわかる土器が確かにあるのである。さらに千代川遺跡の方形周溝墓3基に供献された19点の土器のうち、その故地を推定できるのは14点、このうち在地型は6点で、外来型が8点と、外来型が異常に多かった。これは、およそムラ内の生活遺構ではみられない事態である。しかも煮沸するのにふさわしい器種をかなり積極的に選択していた。いずれ胎土分析によってその当否を判定してもらわねばならないが、以上の3点は、墓の祀りにあたって各地の土器を葬送儀礼に用いるために、葬送儀礼のたびに直接千代川遺跡に運んでいた蓋然性が高いことを示している。つまり本稿では、製作者の移動の可能性を考慮してあえて出身地と聞き慣れぬ言葉を用いてきたが、これらの土器は本稿で推定した出身地でこそ製作されていた公算が非常に高いのである。

ところで千代川遺跡の方形周溝墓には、残念ながら主体部が残っていなかった。1基だけだったかそれとも数基あったかによって、各周溝墓の周溝内出土の供献土器が、一人の死者のためなのか数人分のを合計してみているのか変わってくる。それによって葬送儀礼の風景に関する理解が大きく左右されるはずである。ともあれ、葬送儀礼にまつわる情報が各地のムラに伝えられて、そこから土器が直接千代川遺跡まで運ばれてきた蓋然性が高いのは動かない。与え・受け・返すという贈与の基本原則(注53)にしたがって、そのムラの人が飲食を含む儀式に参加したとみるのは、これまたごく自然なことである。あえてこれを認めなくても、ここまできれば、突発的におとずれたヒトの生物的死、さらにそれを社会的死(注54)に変換するために執り行なう葬送儀礼に対して、土器の地域色の形成により深く関与したネットワークとは別の、丹波に所在する弥生時代中期後葉のムラと幾つものムラを飛び越えたムラとを結ぶ、直線距離で30km以上におよぶいかなれば頭越し(注55)のネットワークが実在し、それが葬儀のたびに情報の受信地を変えながら現実に機能し・対応していたという結論もまた必然的に導き出されるはずである。

本稿をなすにあつて、赤澤徳明氏、網伸也氏、岩永省三氏、大塚達朗氏、金関恕氏、岸岡貴英氏、岸本道昭氏、桐生直彦氏、篠宮正氏、高橋徹氏、高橋護氏、田代弘氏、塚田良道氏、土橋誠氏、中澤勝氏、伴野幸一氏、樋口隆久氏、松井忠春氏、水谷壽克氏、森下章司氏、吉識雅仁氏、若林邦彦氏に御教示、御援助たまわつた。以上の方々に、この場をかりて、私は深く感謝する。

(1996年5月5日)

(ふかさわ・よしき=奈良国立文化財研究所)

注49 大庭重信「弥生時代の葬送儀礼と土器」『待兼山論叢』第26号史学編 1992 89～113頁。

注50 柳川啓一『宗教学とは何か』1992 25・26頁。

注51 柳川啓一『祭りと儀礼の宗教学』1987 79～87頁。

金関恕氏に教えてもらった、

J. E. ハリソン (佐々木理訳)『古代芸術と祭式』1975 69～85頁。

注52 M. モース (小関藤一郎訳)「マクトネル『ヴェーダ神話学』」『供犠』1983 264・265頁。

注53 伊藤幹治『贈与交換の人類学』1995。

注54 岩永省三氏に教えてもらった、

R. エルツ、M. モース (内藤莞爾訳)『《死》の民族学』1972。

注55 今井賢一・金子郁容『ネットワーク組織論』1990 251～266頁。

図版出典一覧

千代川遺跡

亀岡市教育委員会『千代川遺跡第11次発掘調査概報』(亀岡市文化財調査報告書 第15集)1987 第8図113・114・117、第9図119、第10図121、第11図123。

京都府埋蔵文化財調査研究センター「千代川遺跡第6・7次」『京都府遺跡調査概報』第14冊 1985 第23図1～3、第24図7、第26図17～19、第27図25・26、第28図28。

丸山遺跡

花園大学考古学研究室・三朝町教育委員会『丸山遺跡発掘調査報告書』1984 第84図10。

押入西遺跡

岡山県文化財保護協会『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査1』(岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(3)) 1974 第35図14。

高本遺跡

岡山県教育委員会『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査5』(岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(8)) 1975 第7図3。

用木山遺跡

山陽町教育委員会『用木山遺跡他』(岡山県営山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報) 1977 第96図11。

今谷遺跡

建設省岡山河川工事事務所・岡山県教育委員会『百間川今谷遺跡I』(岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(51)) 1982 第358図1477。

尾崎遺跡

龍野市教育委員会『尾崎遺跡 II—市道北山長尾線新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一』（龍野市文化財調査報告14）1995 第24図22。

六角遺跡

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所『姫路市六角遺跡—山陽自動車道関係埋蔵文化財調査報告 X—』（兵庫県文化財報告 第134冊）1994 図版57—310。

米里遺跡

八鹿町教育委員会『米里遺跡』（八鹿町文化財調査報告 III）1979 第46図3。

興・観音寺遺跡

京都府埋蔵文化財調査研究センター「興遺跡」『京都府遺跡調査報告書 第17冊』1992 第45図11、第56図126、第60図7。

福知山市教育委員会『興・観音寺遺跡』（福知山市文化財調査報告書 第29集）1995 第27図3。

上里遺跡

長岡京市教育委員会「長岡京右京第48次調査概要」『長岡京市文化財調査報告書 第19冊』1987 第19図2。

瓜生堂遺跡

大阪府教育委員会・大阪文化財センター『瓜生堂 近畿自動車道天理～吹田建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』1980 第289図1423。

唐古・鍵遺跡

小林行雄他『大和唐古弥生式遺跡の研究』（京都帝国大学文学部考古学研究報告 第16冊）1943 第29図303、第34図423、第35図447、第36図470。

服部遺跡

滋賀県教育委員会・守山市教育委員会・滋賀県文化財保護協会『服部遺跡発掘調査報告書Ⅲ—滋賀県服部町所在—』1987 図版206—D509。

播磨田東遺跡

守山市教育委員会『播磨田東遺跡発掘調査報告書』（守山市文化財報告書 第13冊）1984 図版24—41。

法勝寺遺跡

滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会『一般国道8号線(長浜バイパス)関連遺跡発掘調査報告書V—狐塚遺跡・法勝寺遺跡—』1988 第422図10。

瑞穂遺跡

名古屋市教育委員会『瑞穂遺跡 第4次調査の概要』1987 第18図65。

上野遺跡

四日市遺跡調査会『上野遺跡』（四日市市遺跡調査会文化財調査報告書VI）1991 図34—39。

シミズ谷城跡の発掘調査

柴 暁彦

1. はじめに

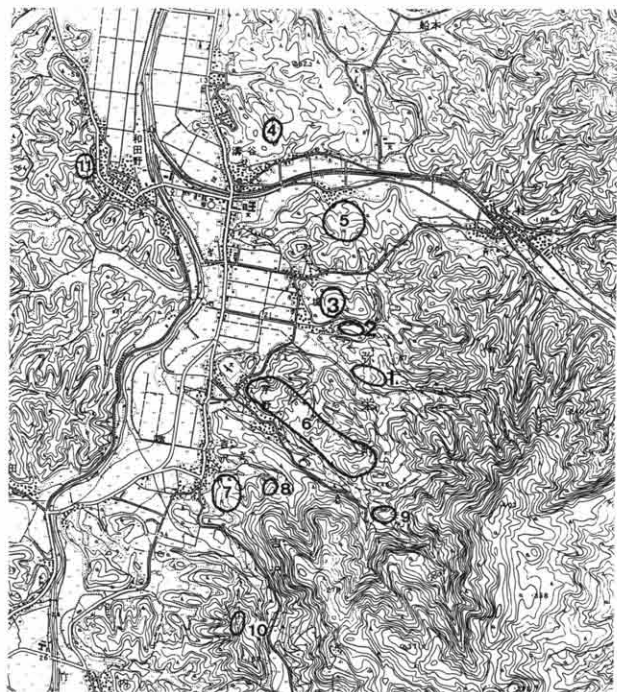
今回の調査は、丹後東部地区国営農地開発事業に伴い、農林水産省近畿農政局の依頼を受けて実施した。調査対象地は、竹野郡弥栄町堤小字平野・シミズ・山の神の3か所(A・B・B'地区と仮称)である。竹野川東岸の丘陵上には、この調査地のほかにも室町時代後期頃の山城が多数点在している(第1図)。発掘調査は、A地区が平成8年5月7日から5月10日、B地区は5月13日から9月6日、B'地区は7月16日から8月8日まで実施した。3地区合わせての調査面積は約1,700㎡である。なお、今回は紙数が限られているため、主にB地区の山城について述べる。

2. 調査の概要

A地区は、本来のシミズ谷城が隣接した地区で、曲輪状の平坦面を重機により試掘調査を行ったが、遺構・遺物とも出土しなかった。

B地区(遺跡地図では小屋ヶ谷城跡)は、A地区の北300mの所にある。独立丘陵のすべてが山城として認識され、開発対象内にある主郭部分の調査を行った。東西約300mの独立丘陵の中央部分(主郭の西側)では堀切が認められる。この堀の底から東側の曲輪部分までの比高差は約6mを測る。堀切のさらに西側には階段状の曲輪が5段続く。調査を行った主郭部分は4つの曲輪と地元の伝承による「馬繫ぎ」と呼ばれる2段の曲輪からなる。調査の結果、主郭部分では2時期の遺構が確認された。

B'地区は、B地区の北側の丘陵裾の平坦面に位置する。検出した遺構には、



第1図 調査地位置図及び周辺の遺跡分布図(1/25,000)

1. シミズ谷城跡(A地区)
2. シミズ谷城跡B地区(小屋ヶ谷城跡)
3. シミズ谷城跡C地区(堤城跡)
4. 溝谷城跡
5. 立山城跡
6. 芋野城跡
7. 吉沢城跡
8. 菩提城跡
9. オテ坂城跡
10. 高山城跡
11. 和田野城跡

多数のピットや2間×3間の掘立柱建物跡1棟・柵列・井戸跡1基などがある。これらの遺構の帰属時期は、出土遺物が少量なため不明確であるが、およそ古墳時代後期頃のものと思われる。それでは以下にB地区の上層遺構・下層遺構について説明する。

①上層遺構

登り道・集石(虎口部分)・石列・土坑・溝・炉跡などがある。

登り道(第2図参照) 斜面北側にある。花崗岩の岩盤を「L」状にカットしている。幅は約1.3mを測る。壁際には浅い素掘り溝が付されていた。道の一部には人頭大の礫の集石が見られた。特に石段として利用されたものではなく、集石の近辺に直径0.25mの円形ピットが存在したことから、門状の施設があり、上部の曲輪から石を落とし、柱の周囲にまとまったものと考えられる。集石には被熱礫も認められた。また、登り道の2か所に一辺約0.7mの方形の土坑状の掘り込みが見られた。用途は不明であるが、防御に関連したものであろうか。

虎口(第2・3図参照) 虎口部分は、一部列状をなす20数個の石と上面が扁平になった踏み石状の礫からなる。集石に利用された礫は被熱赤変したものと、人頭大の花崗岩で直径約5cmの円形の浅い窪みをもつものが認められた。登り道と虎口の関係は、道が虎口下部で消滅する。

石列8(第2・3図参照) 曲輪1の東側部分で検出した。東西方向に人頭大の礫12石が南側に面を揃えて並び、北側に鉤状に屈折していた。一部2段に積まれた部分も見られた。使用された礫には被熱礫も認められた。石列の北側は南側より一段高くなっていたと考えられることから、ここに建物があり、石列は建物の縁石と思われる。

土坑10 短辺2.2m・長辺3.2mの平面長方形の土坑である。深さは約1.2mを測る。出土遺物には瀬戸・美濃灰釉皿、土師器皿、茶臼片と小柄と思われる鉄製品などがある。

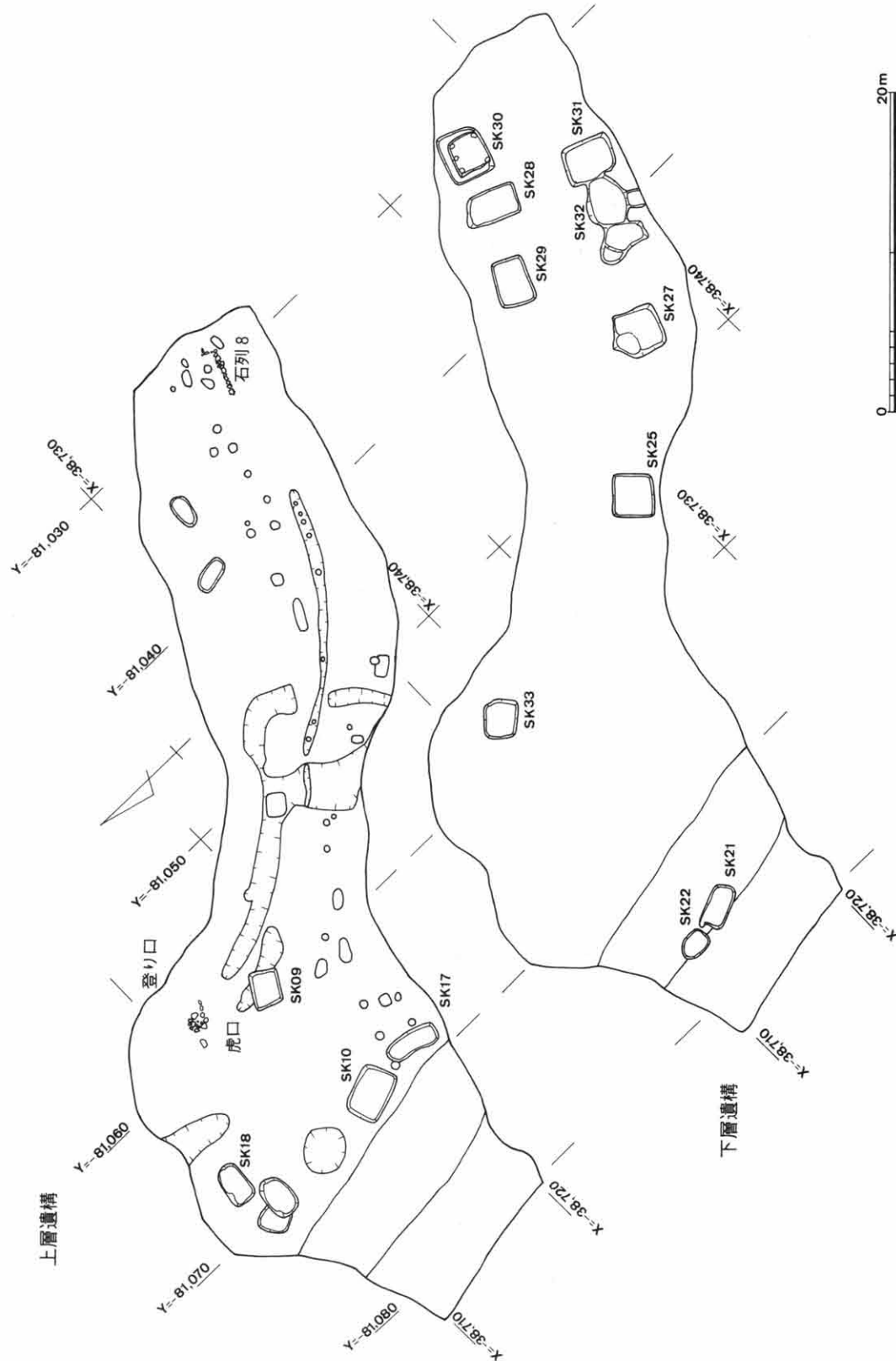
炉跡18 曲輪3部分の北端で検出した。短辺約1.4m・長辺約2.7mの長方形を成し、深さは最大で0.5mを測る。基本的には地山を掘り窪めたものであるが、一部床面や壁面に粘土を貼り付けていた。床面及び壁面4か所は被熱のため赤変していた。床面直上には直径約9cm・長さ約20cmの轆の羽口1点と小児頭大の扁平な礫2つが残存していた。これらも被熱して赤変していた。埋土中からは、被熱礫に混じって鉄釉の小壺、染め付け皿、茶臼上臼片などが出土した。大鍛冶炉と思われる。

土坑17 短辺1.2m・長辺3.2m・深さ0.6mを測る長方形の土坑である。曲輪2の南西隅で検出した。出土遺物に土師器皿片・瓦質すり鉢・瀬戸美濃碗片・柄に銅板を巻き付けた小柄状鉄製品・銅製の棹ばかりのおもりが1点ある。特に棹ばかりのおもりは六角形の塔形で、表面に文様の認められる精巧なつくりである。高さ4cm・径2.5cm・重さ85.3gある。上部には釣り下げるための孔のあいた突出部を持ち、環が残る。同様な形態のものは、福井県福井市の朝倉氏遺跡、大阪府大阪市の大坂城跡、同堺市の堺環濠都市遺跡などで出土しており、全国で6例目となる。

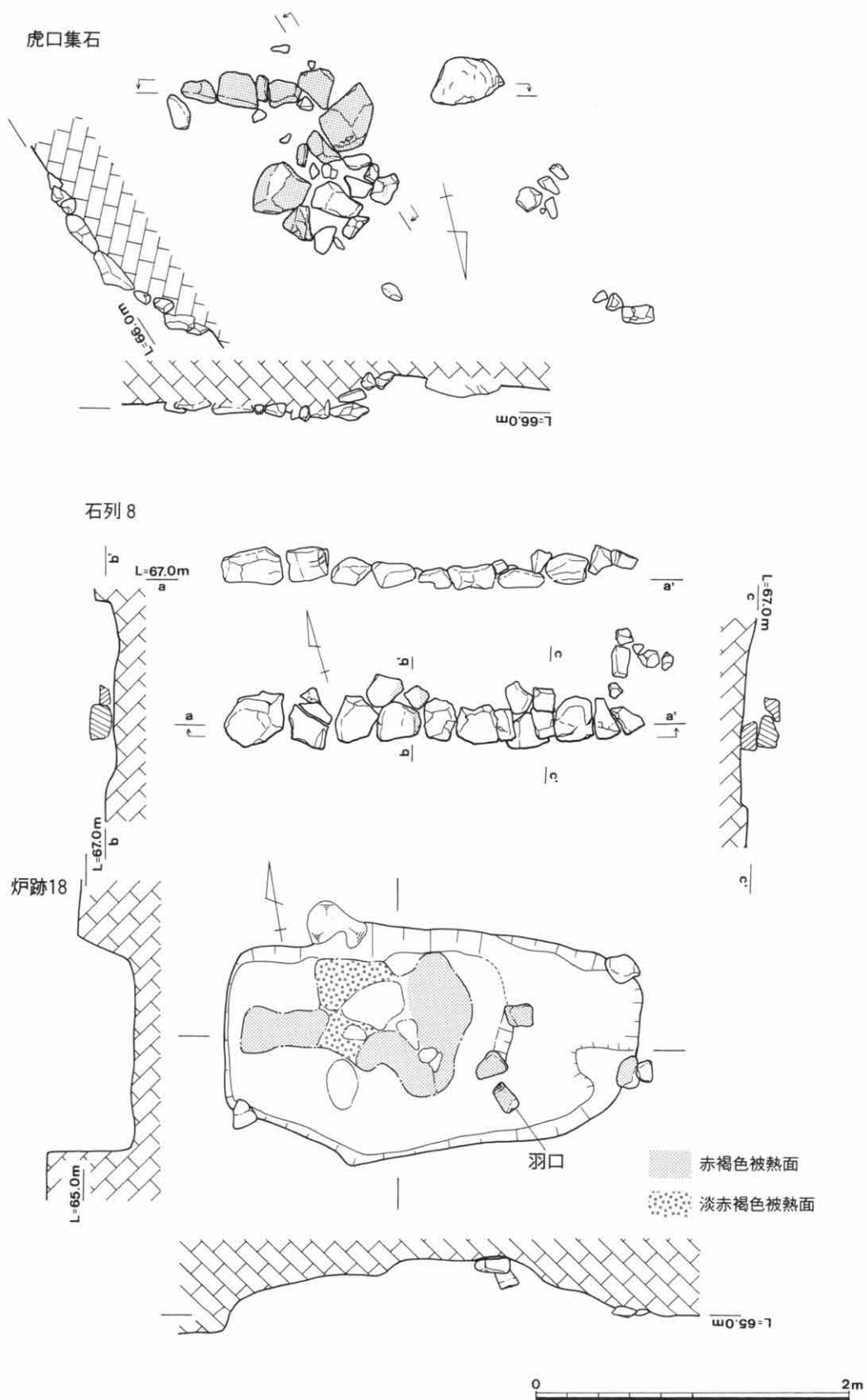
②下層遺構

下層遺構は規模・深さとも、1.5mを越える土坑群がある。土坑は計8基ある。その選地は曲輪の縁辺に集中する。

土坑25(鍛冶炉) 短辺2.2m・長辺2.8m・深さ1.4mを測る。平面形は長方形を呈している。地山面をほぼ垂直に掘り下げている。埋土中には一抱えほどあるものから人頭大の礫50数個が見られた。礫の大半は被熱により赤変していた。多数の礫の下部は径0.6mの範囲に粘土が盛られ、

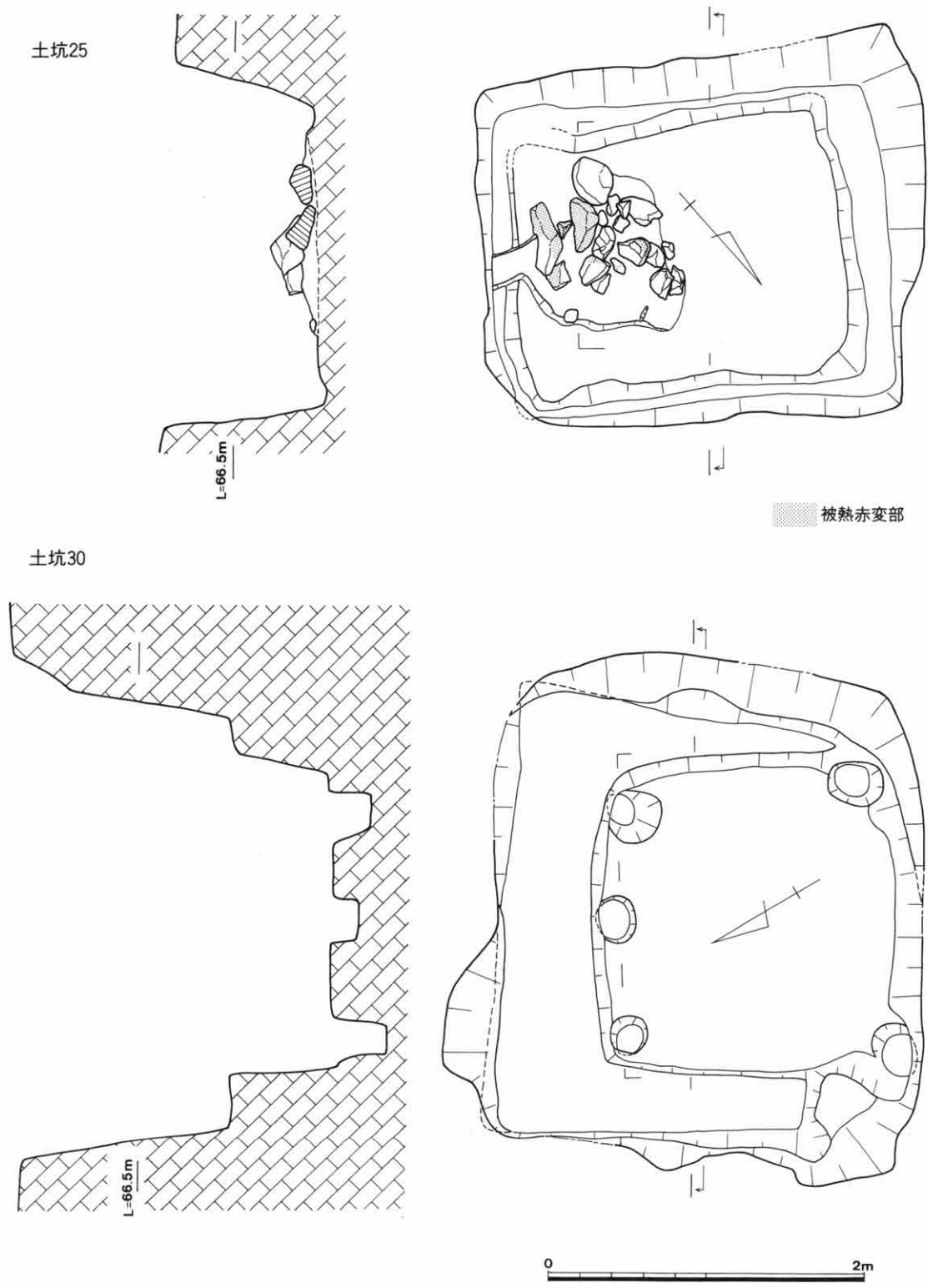


第2図 検出遺構平面図



第3図 遺構実測図

その上に礫が並べられていた。床面には厚さ約10cmの灰層が見られたことから、礫は土坑に投棄されたものではなく、土坑内で使用されたものと思われる。壁面は焼けていない。この土坑は、鍛冶炉として使用されたものと思われる。埋土中から鍛造鉄塊・砥石・刀子状鉄製品・炭化米が出土した。

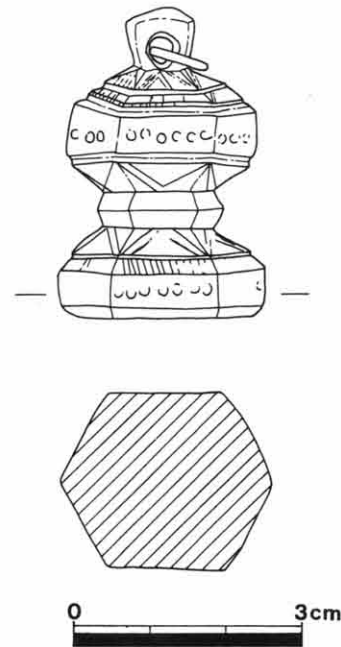


第4図 遺構実測図

土坑27 短辺2.8m・長辺2.9m・深さ1.7mを測る。埋土中に人頭大の被熱礫を数個含んでいた。出土遺物に土師器皿・青磁碗・鉄釘・鉄鍋片などの鉄製品がある。

土坑30 短辺2.7m・長辺3.1m・深さ1.9mを測る。平面形は長方形を呈している。南側を除く三方を幅0.6mほど掘り残し、段を造り出している。南西隅は昇降に利用したと思われる掘り残しがある。床面には北側に3つ、南側に2つピットがある。上屋構造を持つ地下室と思われる。出土遺物には土師器皿・北宋銭・鋤・釣り針・庖丁などの鉄製品がある。

土坑31 4基の土坑が切り合った土坑である。出土遺物に土師器皿・青磁皿・見込み部分に吉祥句と思われる「上吉」の墨書の見られる白磁皿・湯口・鉄釘などの鉄製品・刀の鞘に付くと思われる銅製金具などがある。



第5図 土坑17出土おもり実測図

3. 出土遺物

出土遺物には土師器皿、瀬戸・美濃焼、染め付け、青磁碗、瓦質・越前焼すり鉢、北宋銭などの銭貨、棹ばかりのおもり、茶臼片などがある。中でもすり鉢12点、茶臼6点は他の遺物の点数を上回っている。また、下層遺構に伴う遺物には土師器皿、青磁碗、銭貨、小柄状の鉄製品、刀の銅製飾り金具、銅製装飾品、鉄釘・鉄鍋・鋤などの鉄製品がある。この中で鉄製品は30数点出土している。

4. まとめ

遺物の中心は16世紀前半であり、青磁碗などは15世紀にさかのぼるものも見られる。築造時期もそのころに比定できるとされる。なお、16世紀末～17世紀前後の資料もある。

上層の出土遺物は、すり鉢・茶臼が目立つ。また、何かの調査に必要なおもりが出土したことで、山城での火薬製造の可能性もある。この点については、すり鉢・茶臼の目に詰まった土の成分分析を行い明確にしたい。

上層遺構で確認された虎口の集石、石列8の礫など、全体に被熱礫が多数見られたことは下層遺構の段階で大鍛冶を行うために大量に必要となった礫の再利用のためと思われる。

下層遺構の出土遺物に鉄製品が多数見られるのは破損した製品を集め、溶解・脱炭して鍛造鉄塊を得ていたと考えられる。これらが山城を築くための鋤・鍬などの農具となったのか、武器となったのかは、不明であるが、武器としたとすればこれは戦国末期の緊迫した状況を物語っていると思われる。

(しば・あきひこ＝当センター調査第2課調査第1係調査員)

篠・マル山1号窯跡の発掘調査

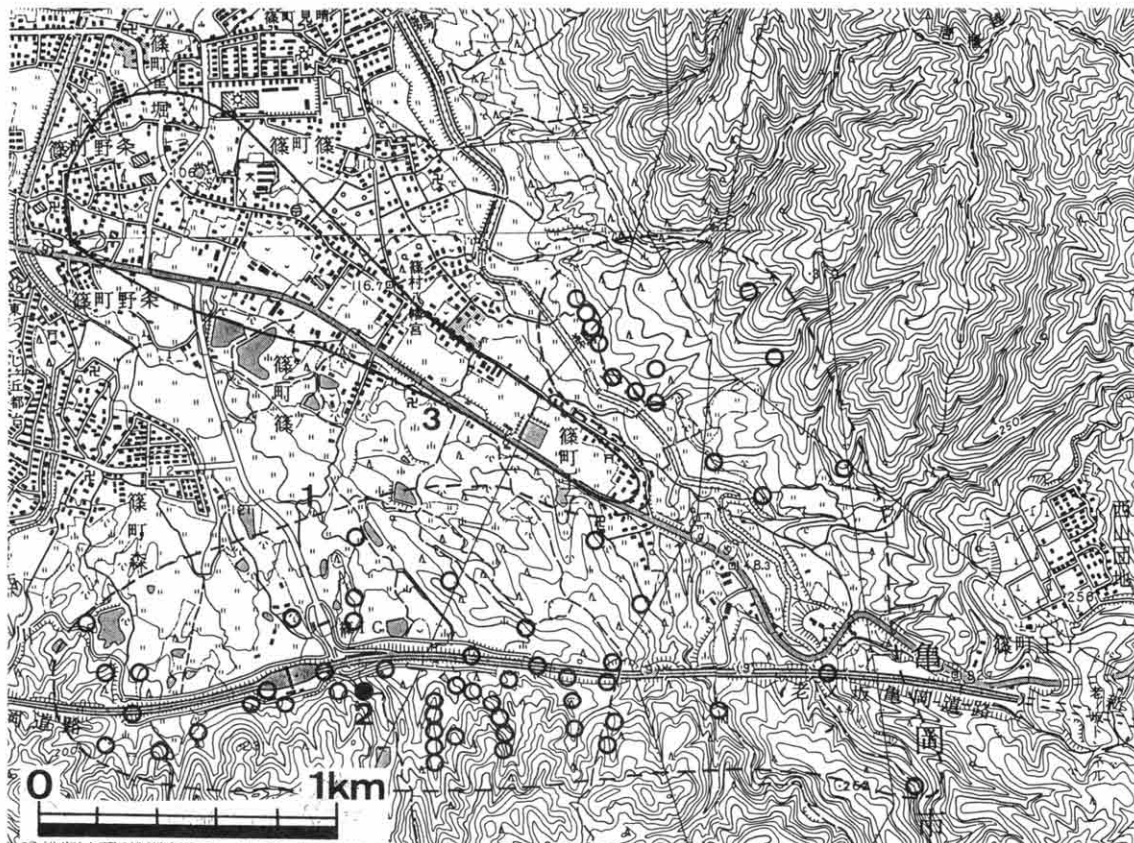
野々口陽子

1. はじめに

篠・マル山1号窯の発掘調査は、日本道路公団大阪建設局の依頼を受けて、京都縦貫自動車道(京都丹波道路)篠インターチェンジ増設工事に伴って実施した。

マル山1号窯は、昭和47年度の京都府教育委員会による「国道9号バイパスに関連する分布調査」の際に灰原が確認されていたものである。当初、2基の窯跡となる可能性が指摘されていたが、今回の調査により、窯跡は1基のみであることが判明した。遺構の残存状況は良好であり、半地下式の窖窯の天井部が一部遺存していた。また灰原については、整地層を挟んで明確に2層の広がり把握することができた。

調査は、平成8年1月23日から同年2月28日までの第1次調査において窯体を検出し、灰原の範囲確認とともに一部の掘削を行い、平成8年6月5日から7月26日での第2次調査において、



第1図 調査地位置図(1/25,000)

1. 篠窯跡群 2. マル山1号窯跡 3. 篠遺跡



第2図 調査地位置図



第3図 窯体検出状況

窯体内の調査と灰原の全面掘削を行った。調査面積は約250㎡を対象とし、第1次調査は調査第2課課長補佐兼調査第2係長奥村清一郎、同調査員野々口陽子、同竹下士郎、第2次調査は調査第2課調査第2係長辻本和美、同主任調査員石井清司、同調査員野々口陽子が担当した。

2. 調査の概要

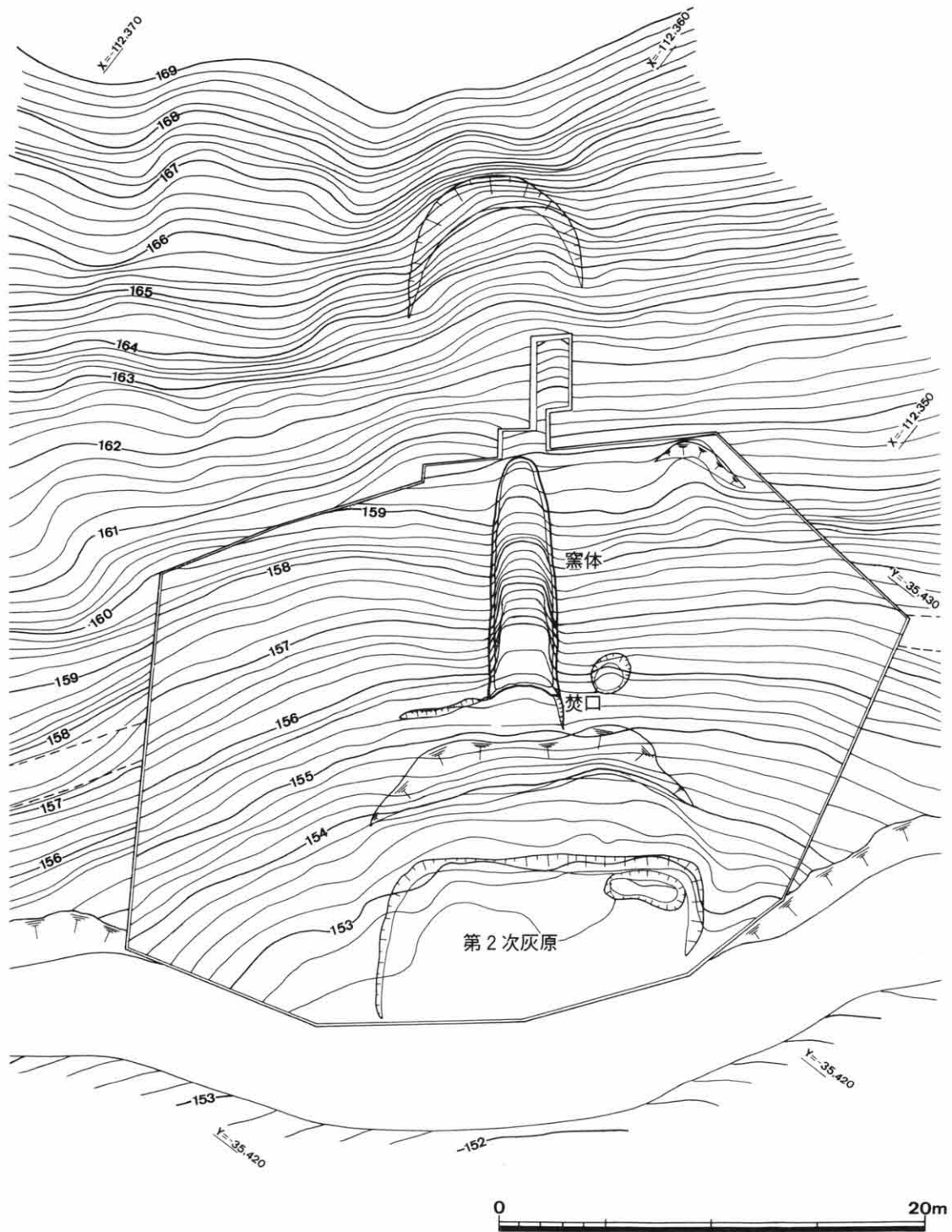
篠窯跡群は、亀岡盆地の南東部の低丘陵を中心に、東西約5km・南北約3kmにわたって分布する総数約百数十基からなる窯跡群である。操業期間は、8世紀中頃から10世紀末頃までのおおよそ250年間にわたって須恵器を生産し、最終段階において瓦窯に移行している。地方官衙盛行期に操業を開始し、都の周辺地域に立地することとなった平安時代には官窯的性格を帯び、規模を拡大して緑釉陶器などの生産を行い、大きく発展した。

今回調査したマル山1号窯は、篠窯跡群の中央部やや西側に位置するもので、丘陵急斜面に、焚口を東に向け構築されたものである。

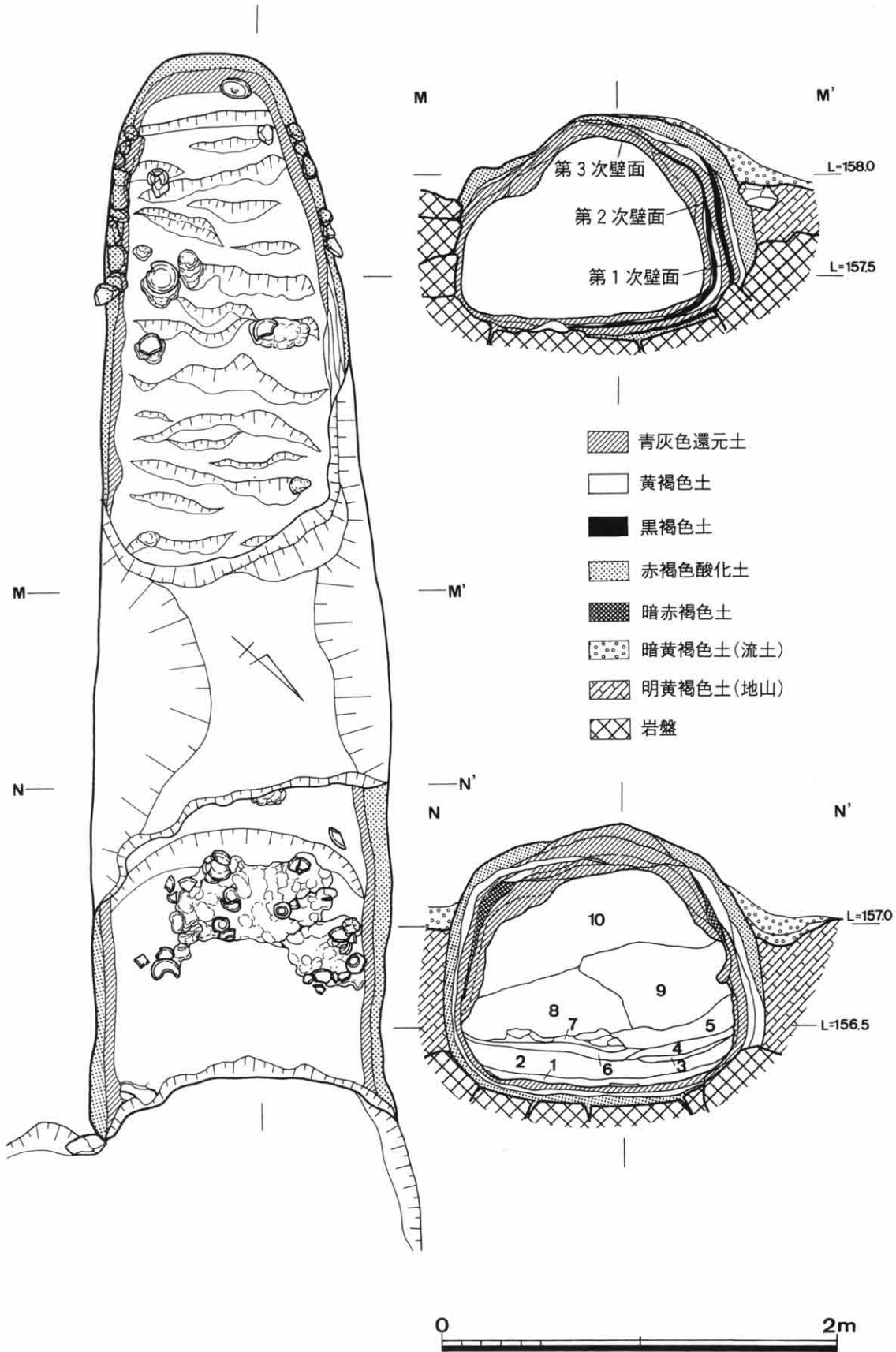
窯体は半地下式構造の窖窯であり、検出全長は奥壁から燃烧部先端まで約8.0m・最大幅1.4m、窯体中軸方位N-53°-Eを測る。焚口周辺は壁体の一部が欠失しており、前庭部は急峻な傾斜上にあるため流失していた。灰原は、燃烧部先端から水平距離にして約3.6m離れたところからはじまり、幅約6.5m・長さ約3.8mにわたって検出した。燃烧部に続く煙道、排水溝等は検出していない。

窯体は、傾斜角の変化点では、焼成部と燃烧部に区分でき、燃烧部は平均傾斜角18°、焼成部は平均傾斜角43°を測る。焼成部中央付近において、長さ約1.2mにわたって天井部が当初のまま遺存し、焼成部本来の構造をよく残していた。床面から天井部までの高さは平均約1mを測る。

窯体床面は、岩盤のレベルまで掘削した後、直上に粘土を張り、構築している。床面は岩盤の剝離面に床土を貼るため、細かな凹凸が著しいが、これとは別に深さ2～5cmの弧状の窪みが多数みとめられる。これらは焼成の際の土器の安定を図るため、人工的に床面を削り出したものであろう。また焼成部上位は、傾斜角を45°と大きくし、奥壁の約10cm手前に粘土塊によって高さ約7cmの火立てを造り出し、効率よく排気を行っていたとみられる。焼成部壁面は、断ち割り調査



第4図 遺構平面図 林道部(第1次灰原)拡張以前

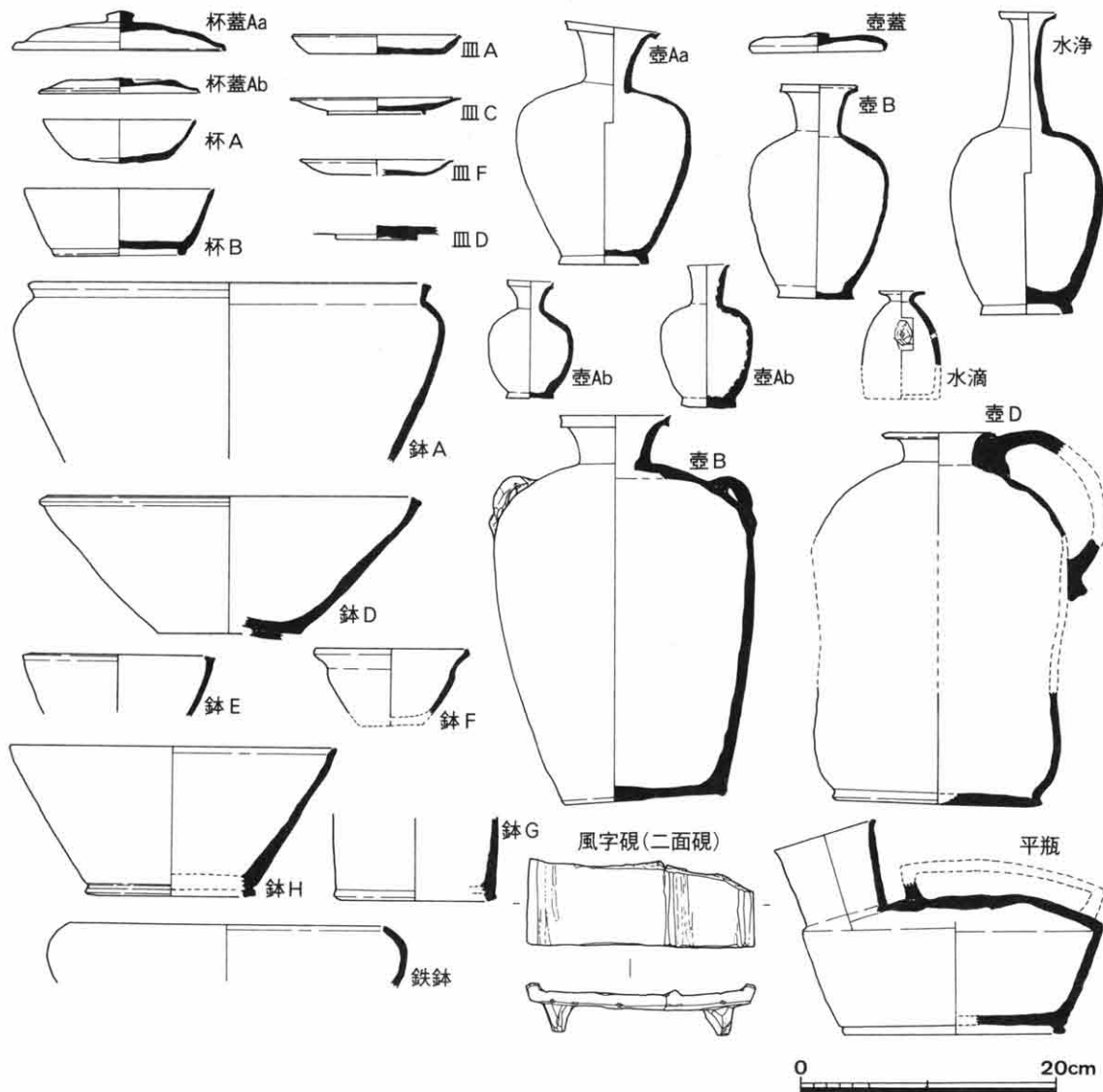


第5図 窯体実測図

の結果、断面M—M' (第5図)において、第1次壁面、第2次壁面、第3次壁面が確認され、床面の断ち割りでも第1次床面と第2次床面が確認されている。後述するが、灰原も整地層を挟んで大きく2層みられることから、第1次操業後、大きく修復および改変したのち、第2次操業を行い、さらに部分的な修復をした後、第3次操業が行われており、合計3回の操業が推定される。また、焼部床面から、舟形土坑やピット等は検出されていない。

焚口部周辺は窯体床面を欠失しているが、焼部の端部前面に長さ約3.5m・幅約1mの東南にむかってのびる平坦部があり、これが焚口部に取り付く作業用通路となっていた可能性が高い。焚口部北西には、径約0.7mの円形の浅い土坑が認められた。

第1次灰原(下層)は、林道部面での長さ3m・幅約5m・中央部の厚さ約0.4m、第2次灰原(上層)は長さ3.8m・幅約6mを測る。この2層の間には、流土および整地層があるため、両者は明確に分別され、それぞれ第1次貼壁面、第2次貼壁面および第3次壁剝離面に対応するものとみられる。



第6図 器種分類図

3. 出土遺物

マル山1号窯では、窯体・灰原および整地層内からコンテナ約60箱以上の須恵器が出土している。遺物の大半は、第2次灰原(上層)と整地層からの出土である。

出土遺物は、各器種を第6図にあげたが、これは『概説 中世の土器・陶磁器』^(注1)における器種分類を基準とし、既刊の篠窯跡群の報告書「篠窯跡群Ⅰ」^(注2)、「篠窯跡群Ⅱ」^(注3)の分類基準を援用して、共に調査を担当した石井清司が分類した。

出土した器種は、杯A・B、皿A・C・F、杯蓋A、壺Aa・Ab・B・G、水瓶、水滴、鉢A・D・E・F・G・H、平瓶、鉄鉢、風字硯(第6図)の中、小形品であり、甕などの大形品はみられない。

各器種の個体数比は、器種の判定できるすべての破片を対象にした結果(総資料数4225点)、杯では高台の無い杯A996点、高台付きの杯B1486点で、それぞれ約24%、35%である。比較的多く出土したものは、杯Aとセットになる杯蓋Aが672点(約16%)、皿A486点(約12%)、壺A184点(約4%)、鉢A137点(約3%)、鉢B167点(約4%)などである。他の器種の出土は、壺B36点、平瓶13個体、皿C9個体、水瓶6個体、風字硯5個体、鉄鉢、鉢F、水滴各1個体であり、各器種とも1%に満たない量である。

4. まとめ

マル山1号窯の調査により、篠窯跡群における当センターの窯跡の調査は総数23基を数えることになる。これらの窯跡の編年的な位置付けは、既刊報告書でおおよそなされてきたが、近年、再整理が行われている^(注4)。これによれば、マル山1号窯出土の須恵器は、宝珠つまみの無い杯蓋Bが含まれないこと、小形品は底部が回転糸切りによるが、中・大形品には依然として高台が付くこと、皿Cの初現的形態のものが認められることなどから、芦原1・3号窯から小柳1号窯への流れにあるものとして、ほぼ9世紀第2四半期前後の時期に比定される。

今回の調査では、焼成部天井の一部が、良好な状態で遺存したまま検出され、窯体構造を复原する上での貴重な基礎資料が得られた。また出土須恵器では、水滴、壺Ab、壺Dなど篠窯跡群に従来みられなかった新出器種を含んでいることや、皿C・Dにヘラミガキが施されていることなどが注目される。特に、後者は緑釉陶器の製作技術に通じるものがあり、今後、技術系譜についての検討が必要となろう。

(ののぐち・ようこ＝当センター調査第2課調査第2係調査員)

注1 石井清司「篠窯須恵器」(『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社) 1995

注2 石井清司他「篠窯跡群Ⅰ」(『京都府遺跡調査報告書』第2冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1984

注3 水谷壽克・岡崎研一他「篠窯跡群Ⅱ」(『京都府遺跡調査報告書』第11冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1989

注4 注1に同じ。

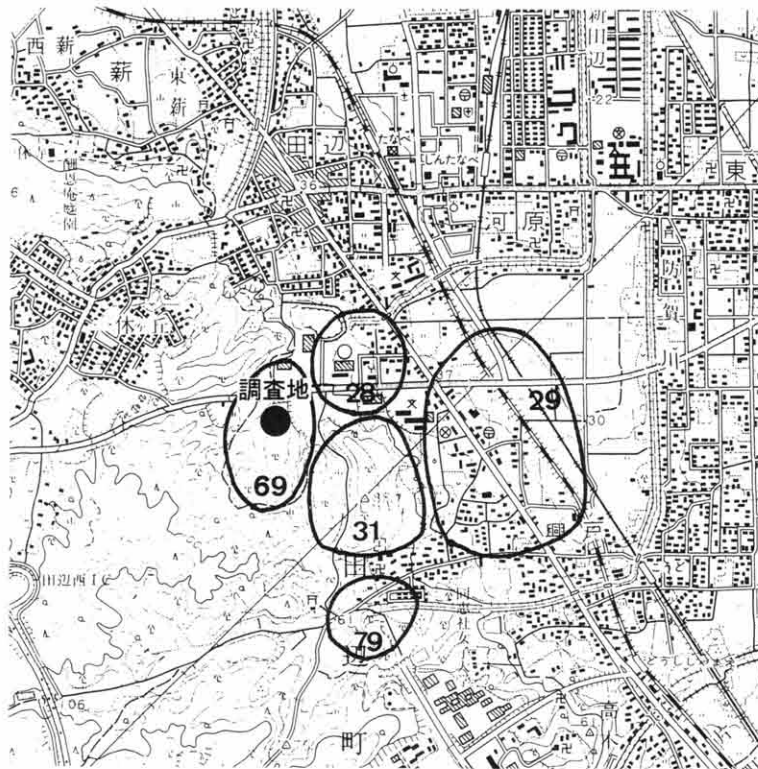
田辺城跡の発掘調査

石尾 政信

1. はじめに

この調査は、府道八幡木津バイパス(通称山手幹線道路)の建設工事に伴い、京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。昨年度の試掘調査で、城跡に関連する可能性が高い石列が検出され、また、陶磁器や瓦類に混じり埴輪が出土し、古墳の存在も推定されたため、今年度の本調査を行うことになった。今年度の田辺町内の調査対象地は、周知の遺跡である田辺城跡と興戸古墳群(10号墳)とであった。

田辺城跡は、『田辺町遺跡分布調査概報』によれば、綴喜郡田辺町大字田辺小字奥ノ城と同丸山にまたがる、南西から北東方向に延びる丘陵上に位置する。南北約300m・東西40~140mの範囲に3ヶ所の平坦地を造り曲輪を設けている。丘陵上からは田辺町中心地から木津川沿いの南山城地域の北半部が見渡せる。



第1図 調査地位置図(1/25,000)

28. 田辺遺跡 29. 興戸遺跡 31. 興戸古墳群
39. 田辺城跡 79. 宮ノ前遺跡

この丘陵北側の先端部にも曲輪と推定されるものが認められた。この曲輪推定地は、1984年に田辺町教育委員会によって調査され、上下2ヶ所の曲輪で建物跡や土坑などが検出された。この部分は公共施設や国道307号線で現在は失われている。

今回の調査対象地は、3ヶ所の曲輪のうち一番北に位置するものである。ここには南北約60m・東西約40mの平坦地と、北東側の一段低い場所に約15m四方の平坦地がみられた。広い平坦地の南西部には周囲より約1m高くなった土塁跡と推定される高まりが

残存している。工事計画では広い平坦地の東側の半分以上と一段低い平坦地全体を削土する予定である。

今年度は、昨年度の調査区を拡張し、石列が検出された東斜面および堀切等が予想される北方の尾根筋斜面地の調査を併せて実施した。

調査は、京都府埋蔵文化財調査研究センター調査第2課課長補佐兼調査第3係長奥村清一郎、同主任調査員引原茂治、同主査調査員石尾政信が担当した。現地調査は1996年5月1日に開始し、8月末日をもって終了したが、後日、検出された石垣(石壁)や石段等の移転(将来は移築展示をする計画)を田辺町教育委員会が行ったときに立会調査を併せて実施し、その際に新たな発見もあった。調査面積は約1,670㎡である。

2. 調査概要

調査は、表土を重機掘削した後を人力で掘り進んだ。広い平坦地では、表土直下から平坦部の区画溝と推定される東西溝3条と、北部で耕作にかかわる南北に平行する溝群が検出された。その下層では、中央部で東西溝とこれに切られた南北溝・土坑・柱穴が、北部で遺物包含層の掘削中に原位置をとどめた埴輪が見つかり、北端では溝が検出された。また、古墳の周濠や円形住居跡も検出された。北東部の一段低い平坦地では溝・柱穴・方形周溝墓が検出された。石列の北方の東斜面では、石段・石垣(石壁)が検出された。北斜面では堀切と推定される落ち込みから平瓦片等が出土したので、重機による部分掘削を含め、掘り下げを行った。

①弥生時代の遺構

方形周溝墓 北東部の東端で検出した。2.0m×0.8mの主体部とそれを囲む溝がわずかに残っていた。主体部の西端で弥生時代中期の土器が出土した。

甕棺墓 方形周溝墓の西側で弥生時代中期の土器(甕)が出土し、墓と推定した。

竪穴式住居跡1 北部で検出した直径約10.5mを測る、大型の円形竪穴式住居跡である。中央に炭などで埋まった土坑があり、ここから西に向かって排水溝が延びている。中央土坑の周辺には、数ヶ所の焼土面がある。周壁溝の内側に同様な溝がめぐり、住居の拡張があったことがわかる。弥生時代中期の土器が出土した。

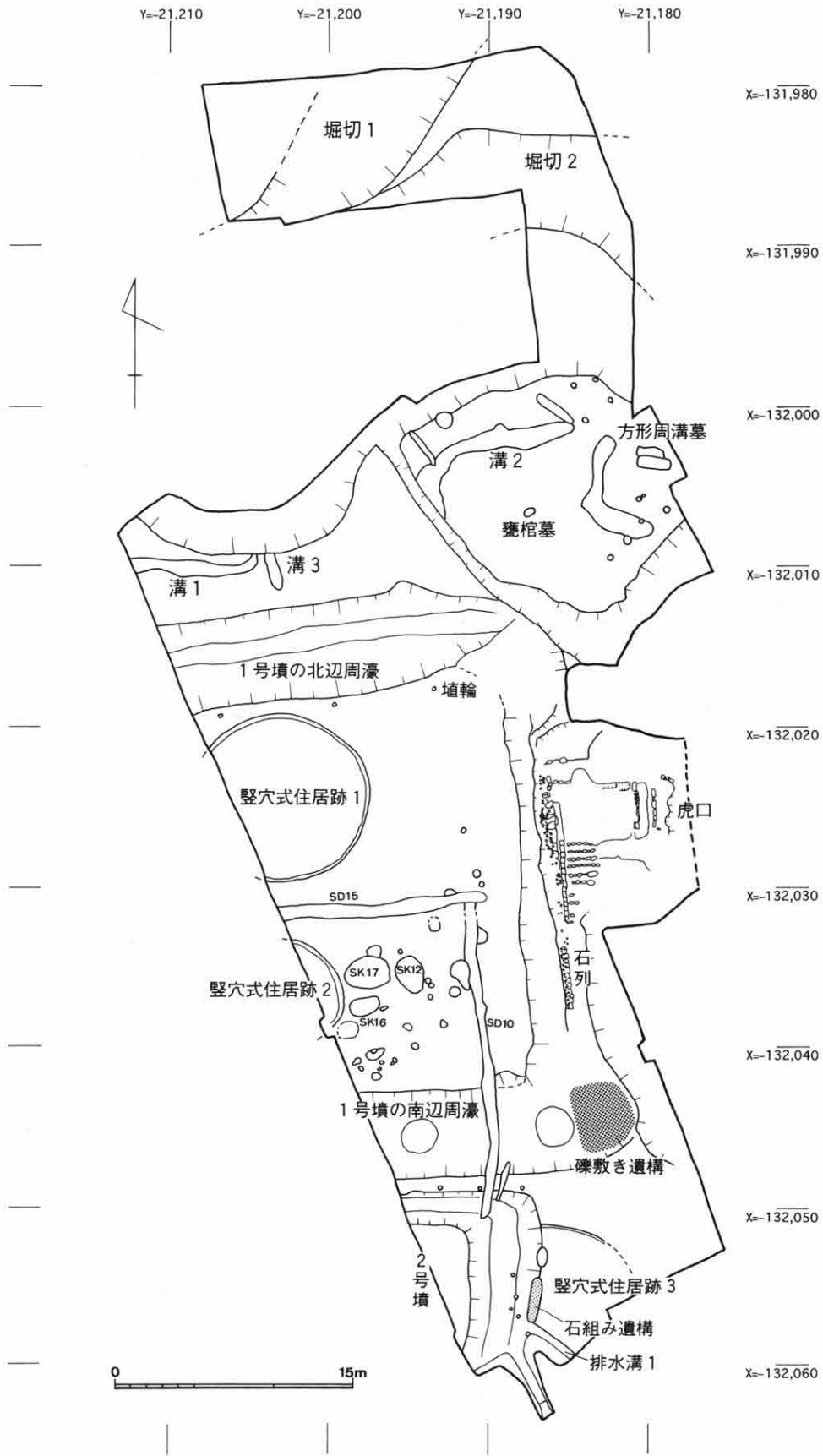
竪穴式住居跡2 住居跡1の南で検出した円形竪穴式住居跡の一部である。残存状況は良くない。

竪穴式住居跡3 南部で周壁溝の一部を検出した円形竪穴式住居跡である。直径10m前後と推定される。ここでも、中央土坑があり排水溝が南東に延びている。

また、竪穴式住居跡3の排水溝を切る直角に折れる溝(周壁溝)が検出されたので弥生時代後期の住居跡が推定される。これら以外に、中央部で弥生土器が出土する小土坑も検出している。

②古墳時代の遺構

田辺奥ノ城1号墳 住居跡1の北方で幅約5m・深さ1.5m前後の周濠を東西約20mにわたって検出し、それより25m南で幅約5m・深さ約1.2mの周濠を東西約15mにわたって検出した。これを北辺と南辺とすれば、一辺36m前後の方墳と推定される。東辺は中世の造作で削られたた



第2図 遺構平面図

め明瞭でない。これを田辺奥ノ城1号墳と仮称する。南周濠の底面に直径2mの土坑が検出された。この土坑は、埋土の状況からすれば当初から存在した可能性が高い。主体部は後世に削平された様子である。周濠から多量の埴輪や須恵器が出土した。

田辺奥ノ城2号墳 1号墳に接して造られた方墳で、北辺および東辺周濠を検出した。北辺周濠は1号墳に規制され幅約2mと狭く、東辺は幅約4.5m・深さ約80cmを測る。東辺周濠から多くの埴輪(形象埴輪を含む)が出土した。周濠は中世には「堀」として残っていたことが埋土から判明した。

③中世の遺構

堀切1 北拡張部で検出した。直交した掘削でないため上部幅は明らかでないが、深さ約4.5m・底部幅0.5m以下で、いわゆる葉研堀の断面形状である。底部付近で土師器細片、上層で平瓦片が出土した。堀切1は尾根筋を切って曲り、北西に延びている。

堀切2 堀切1の東で検出した。西方で堀切1に接続すると見られる。

溝1 北端で検出した幅約80cm前後・深さ約10cmの東西方向の素掘り溝で、東端が北に曲がる。溝内に拳大の礫が敷かれた様な状況で検出された。土師器細片が出土した。

溝2 北東部で検出した幅1m前後・深さ約20cmの東西方向の素掘り溝で、西端が南に曲がる。溝内に径20cm前後の石や礫が落ち込んでいた。西方では土師器皿や土師器羽釜、平瓦片が出土した。溝1・2は建物に伴う雨落ち溝と考えられるが、対応する建物跡は明らかでない。

溝3 溝1の東で検出した幅80cm前後・深さ約20cmの南北方向の素掘り溝である。溝内から土師器皿や土師器羽釜、平瓦片に混じって炭が出土した。

土坑SK12・17・18 中央部で検出した円形を呈する浅い土坑である。土坑内から石や瓦片・瓦質すり鉢などが出土した。

溝SD10 中央部で検出した幅50～80cmの南北方向の素掘り溝である。この溝から約3mで一段下がる地形となり、その間に築地等を想定できるが、明確な遺構(盛土層など)は見られない。

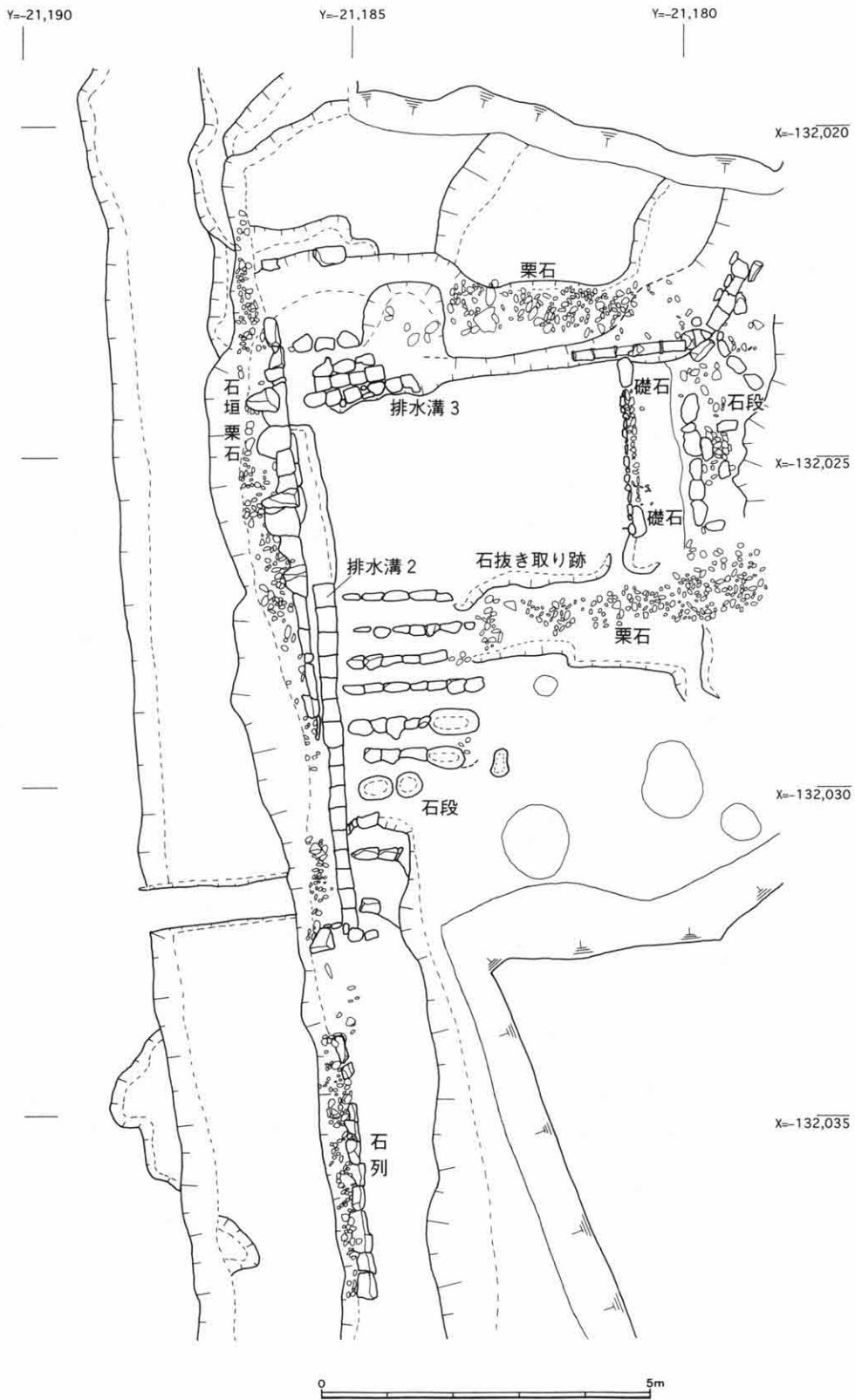
礫敷き遺構 1号墳の南周濠が、ある程度埋まった後に、拳大の礫を敷いた様子で検出した。約4m四方の範囲で検出したが、本来はもう少し西に延びていたと推測される。通路として造られた可能性が高い。

石組遺構 2号墳の周濠の東端で南北約3m・幅約50cmの範囲に据え付けられた石組である。西側の石面をそろえ2段に積まれ、排水溝1の北で止まっている。石組西側、周濠底面に柱穴が検出されているので、この場所に橋が架かっていた可能性がある。

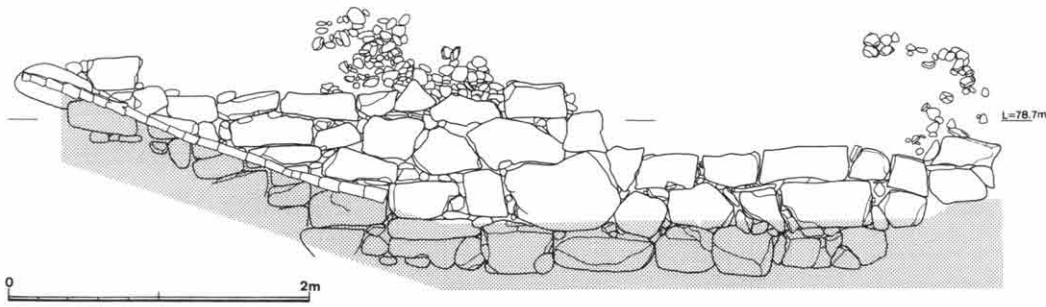
排水溝1 石組遺構に接し、2号墳から南東方向に延びる排水溝で、瓦質土管が据え置かれていた。土管は9本分を確認し、さらに延びている。溝は幅約60cm・深さ30cm前後に掘削し、土管を並べている。敷かれた土管以外に、径の小さいものが周濠から出土した。

石列 中央部の東で最初に検出した、南北方向の石組みである。石列は1段のみ残存している。裏込めに栗石が使われている。

虎口 石列の北方で検出した、石垣(石壁)と石段を含めた全体の構造から虎口と推定される遺



第3図 推定虎口平面図



第4図 石垣(石壁)実測図

構である。東斜面を削り取り石垣を築き、裏込めに栗石を入れている。石垣は反りがほとんど無く、東側の石面をそろえてほぼ垂直に丁寧に積まれている。2～3段分が残存していたが、栗石の残存状況から判断すれば、本来は1.5m以上の高さがあったと推測される。面をそろえた石垣の下には埋もれて見えないが、不ぞろいの根石を据え置く。石垣の石材には、割った花崗岩と自然石が用いられ、花崗岩には矢穴が見られるものがある。石垣の南半では、南から北へ下降する石段がある。石段の最も残りが良い場所で幅約2.1mを測り、自然石が7石据えられている。石垣と石段の間には、平瓦を敷き、割った瓦で側面を押さえた排水溝2が、南から北へ下降する。排水溝は石段の最下段でとぎれ、石垣の東には抜き取り跡の様な窪みが見られた。抜き取り跡をふくめた石垣北半の東側は、東西約5m・南北約3.5mの範囲が砂に粘土を混ぜた土で堅く突き固められた平場となっている。この平場の北西隅には、石垣に直交した石列が3石残っていた。平場の南北両側では栗石が散乱し、石材の抜き取り跡が見られたので、両側にも石垣があったと推測される。また、平場の東端に小石を並べ、小石の両端では平石を据付けた礎石がみられるので、城門が推定できる。後日、石材移転に伴う立会調査で、平場の北西隅の石列に接するように、平瓦を敷き、自然石で護岸した排水溝3が検出された。溝は途中で壊されていたが、門の礎石に接した部分には瓦質土管が埋設されていた。その東では再び瓦と自然石の排水溝となり、下降しながら緩やかに北に曲がる。城門礎石の東側の石段も排水溝に沿って北に曲がっているのが確認できた。ここでは石段が3段分残るが、それより東は急激に落ち込んでおり、残存の可能性は低い。排水溝2が途中でとぎれていたのは、排水溝3の一部を壊し、その後に砂と粘土を突き固めて平場を改修したことによるものであることが判明した。

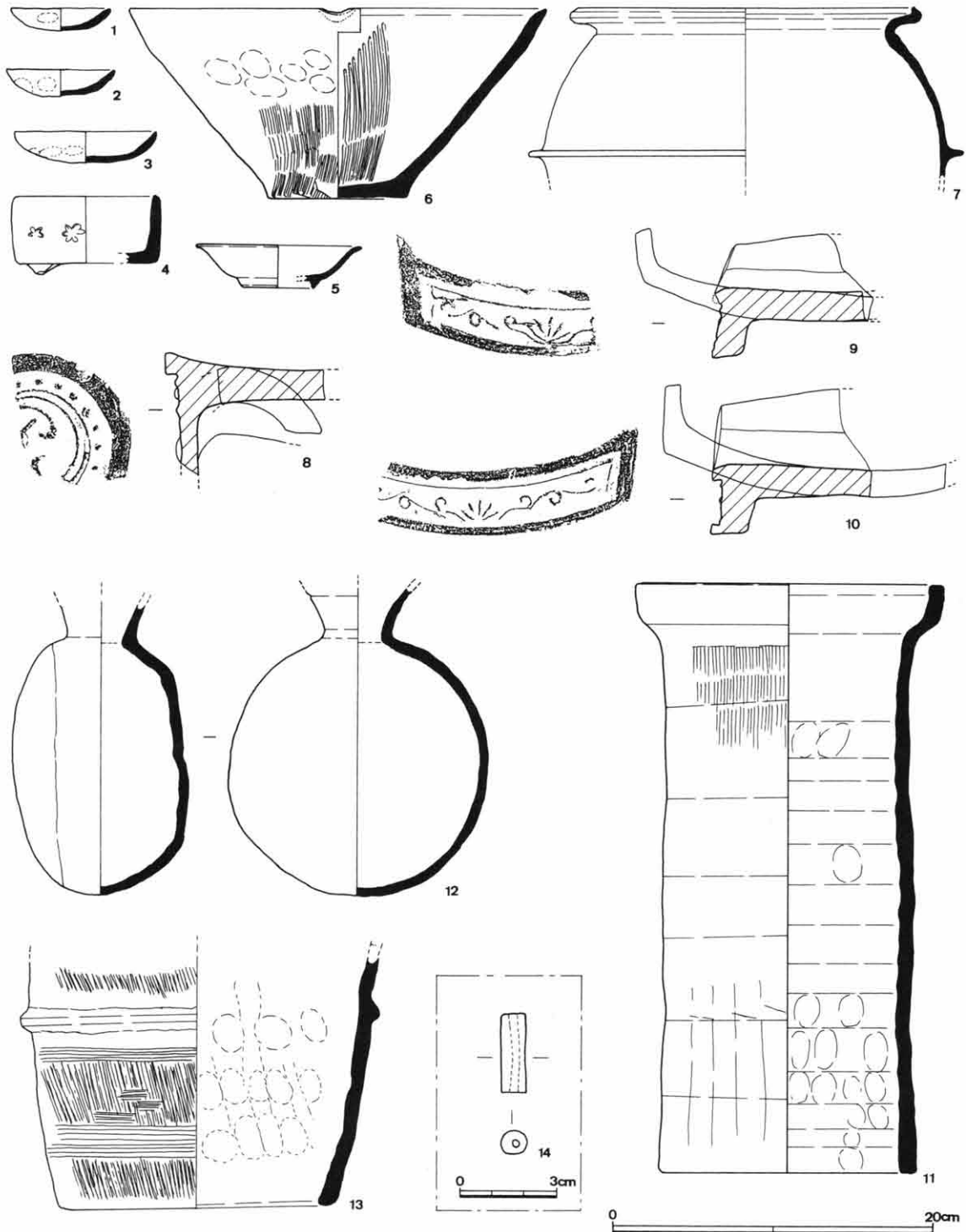
この一連の遺構は一時期に埋まった様子で、埋土には瓦類(軒瓦を含む)と埴輪が多く、土器類はほとんど見られない。瓦には焼けたものがあり、排水溝の瓦にも焼けて変色したものが見られる。埋土や堆積土には見られない。また、広い平坦地でも溝等に炭が混じるが焼土層は認められない。

④出土遺物

今回の調査で、弥生時代から近世までの各時期の遺物が出土し、整理箱にして約50箱ある。そのなかでは、埴輪と瓦類が多い。

図面上の遺物は、土師器皿(1～3)が溝3から、土師器羽釜(7)が溝2から、瓦質すり鉢(6)

が1号墳北辺周濠の上層埋土から、白磁皿(5)が平坦部の遺物包含層から、土師質香炉(4)と軒丸瓦(8)・軒平瓦(9・10)が虎口の埋土から出土した。羽釜・すり鉢の形態から16世紀の所産であろう。軒瓦は小振りで、築地等に用いられるもので、軒平瓦の区画線が残り中心飾りも明瞭なため、15世紀の所産であろう。瓦質土管(11)は排水溝1から出土したもので、奈良市古市城跡出土の瓦質土製管に法量・技法が酷似する。須恵器提瓶(12)は1号墳南周濠下層から出土し、埴輪



第5図 出土遺物実測図・拓影

(13)は北周濠の南側の平坦面に据え置かれたものである。埴輪のタガの形状、外面の調整からみて埴輪分類(川西編年)のⅣ期(新)に含まれるであろう。管玉(14)は、遺物包含層から出土した。

3. まとめ

この調査で、弥生時代中期の住居跡が検出され、高地性集落が営まれていたこと、古墳時代中～後期には田辺奥ノ城1号墳・2号墳と今回名付けた古墳が造営されるなど、古代からの複合遺跡であることがわかった。このように、弥生時代には高地性集落が、古墳時代には比較的大型の古墳が営まれていたことから、当遺跡がこの地域で重要な位置を占めていたことが知られる。

15世紀には1号墳北周濠から北方に0.6～1mの盛土を行い、より広い平坦地を確保すると同時に急な斜面(切岸)を造ることで防御性を高め、城としたと考えられる。1号墳南周濠は完全に埋めないで一部を通路として利用し、1号墳南周濠と2号墳周濠の土手を立ち切って周濠に溜まりすぎた水を排水溝1から流した様子で、巧みな土地利用が行われていたことがうかがえる。平坦面では溝・土坑・柱穴が検出されたが、建物跡に復原できなかった。後世に削られたのであろう。

東斜面で検出した虎口と推定される遺構は、出土した瓦の文様にまとまりが認められることから、瓦の示す時期(15世紀)に築造されたと考えられる。排水溝に使用された瓦や埋土の瓦の中に焼けて変色したものがある。『経覚私要鈔』文明二年(1470)七月二十六日には「山城事者、田那部(辺)ハ悉焼了、(以下略)」とあり、焼けた瓦との関係が注目されるが、平坦部に焼土層はなく石垣等も焼けた形跡は認められない。

平坦地では16世紀第3四半期の遺物が出土しているの、城はこのころ廃絶したと思われる。

(いしお・まさのぶ=当センター調査第2課調査第3係主査調査員)



田辺城跡虎口全景(北東から)

木津町瀬後谷瓦窯の操業に関する一考察

— 軒瓦の分析から —

奥村 茂輝

1. はじめに

710年、藤原の地から遷都し造営された平城京は大量の瓦を必要とした。その際、大量の瓦を生産するために選ばれたのが奈良山丘陵の地であり、丘陵にはいくつもの瓦窯が築かれ、営まれた。京都府相楽郡木津町に位置する瀬後谷瓦窯もそのうちの一つであり、昭和62年度から平成3年度まで5次にわたって京都府埋蔵文化財調査研究センターが調査を行った^(注1)。当瓦窯では8世紀初頭の平城遷都時に生産されたとみられる瓦類(粘土紐桶巻き作り平瓦を含む)や須恵器が多数出土しているほか、4・5号窯灰原と推定される遺構では土製塔(瓦塔)片が100点以上出土しており、粘土紐桶巻き作りの系譜や土製塔の製作年代を考える上で、考古学的のみならず、古代史の上でも重要な意味合いを持つ遺跡である。本論では、この瀬後谷瓦窯出土瓦の中で軒丸・軒平瓦の観察により、瓦窯の操業(順序)とその供給先について若干の考察を加えたいと思う。

2. 出土軒瓦の検討

瀬後谷瓦窯では前述のとおり平城宮造営開始時、奈良国立文化財研究所(以下奈文研)の編年による第Ⅰ期を上限とする軒瓦群が出土している。以下、この章では出土点数の多い軒瓦を型式ごとに検討していくことにする。なお、後章で述べるように、瀬後谷瓦窯出土の軒瓦が平城宮(京)出土軒瓦と同範関係にあることから、軒瓦については平城宮軒瓦型式名をそのまま使用する^(注3)。

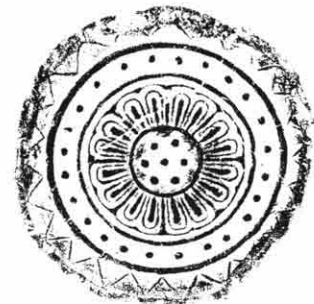
(1) 軒丸瓦6284 E a型式(複弁八弁蓮華文軒丸瓦、第Ⅰ図)^(注4)

6284 E a型式(以下、型式を省く)は外縁には22単位の線鋸歯文を施し、外区には24個の珠文を配する。内区には8弁の複弁蓮華文を施す。内区は平面的で蓮華文の部分に盛り上がりは見られない。圏線で囲まれた中房内には1+6の蓮子を配する。瓦当直径は16cmである。瀬後谷瓦窯出土の軒丸瓦のなかでは最も大きな割合を占め、46点出土している。

① 範傷

今回、瓦当文様の観察から内区内に範傷を確認することができた。範傷は、蓮弁の界線中央から蓮弁の中央部分にかけて長さ0.5cmの一条の盛り上がり(範傷Ⅰ)とそれから進行したものの(範傷Ⅱ)の二つにおおまかに分けることができる(第2図)。

なお、瀬後谷瓦窯出土6284 E a軒丸瓦は、確認した限り全て同範品であり、範傷Ⅰ・Ⅱのいずれかが確認できる。



第1図 6284 E a

②瓦当部分の製作手法

瓦当部分の粘土の詰め込み方法には以下のよう
に二通りの方法がある(第3図)。

【A手法】 范型に平坦に粘土を詰め込む方法。瓦当断面の観察によると、粘土は二層にな
っており、詰め込みは二度行われている。出土
点数は20点。

【B手法】 まず、范型の外縁部分のみ粘土
の詰め込みを行い、その後二回に分けて平坦に
粘土の詰め込みを行うもの。出土点数は5点。

B手法では丸瓦部の瓦当に近い部分に粘土の
重なりが認められ、瓦当の外縁内側に粘土接合
面の割れが見受けられることからB手法とA手
法の区別は容易である。なお外縁の内側の割れ
は、軒瓦を范型から抜き取る際に范の表面に油
分などが付着している状態で粘土を范から抜く
と生じるということが、よくある原因として考
えられる^(註5)。しかし、瀬後谷瓦窯における6284 E

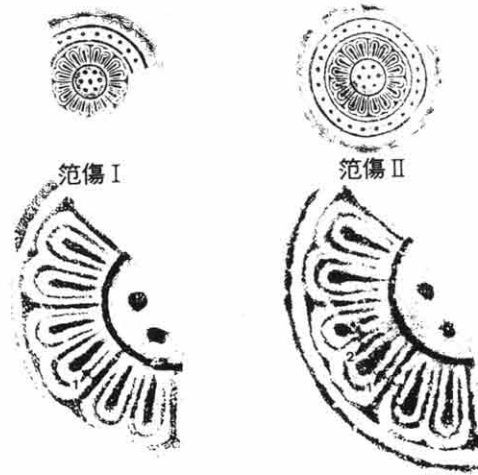
aには前述のとおり丸瓦の瓦当に近い部分で粘土の重なりがみられる。これは范から粘土を抜き
取る際に生じたものではなく、粘土の詰め込み方法の違いを示すものである。またB手法は外縁
の割れが著しいものが多いため、外縁の全部または一部が欠損した状態のものが大半を占める。

③范傷からみた瓦当部分の製作手法の先後関係

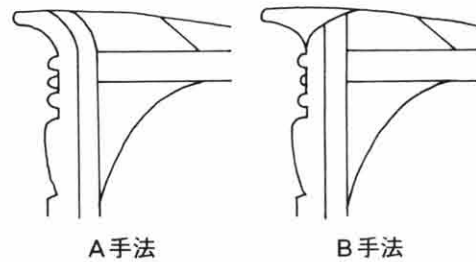
6284 E aの范傷の進行と瓦当部分の製作手法を照らし合わせた結果、付表のような結果が得ら
れた。すなわち、初期の范傷 I 段階では瓦当部分はA手法のみの製作であるが、次の范傷 II 段階
になるとA手法とともにB手法が採用され始める。出土点数から判断するに、主たる製作手法で
あるA手法が全段階を通じて行われている最中に、少数派であるB手法が採用されたと考えるこ
とができる。したがって、瓦当范は同じであるのに二つの手法が確認できることから、范傷 II 段
階において6284 E aの製作には複数の工人が関わっていた可能性が考えられる。

(2) 軒平瓦6664 I (均整唐草文軒平瓦、第4図)

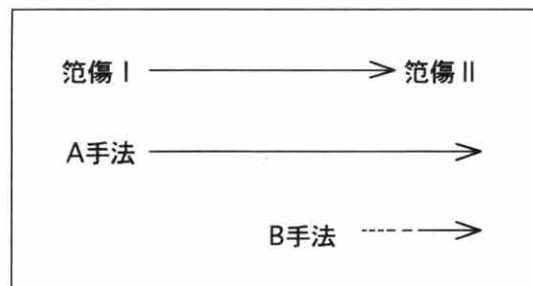
6664 I は中心飾りの花頭が左右に開き、上端
は界線に接している。唐草は三回転半で上・
下・脇区全てに珠文をめぐらせている。平城宮
では6284と組み合う^(註6)。瀬後谷瓦窯では20点出土
しており、軒平瓦の中では最も多い。出土した
もの全てに范割れが見られ、粘土の押し込み具



第2図 6284 E aにみられる范傷(1/4)



第3図 6284 E a瓦当部分の製作手法

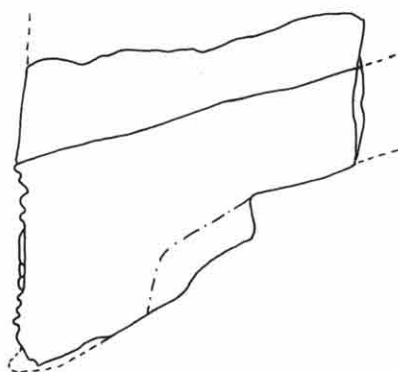


范傷による技法の先後関係

合が弱いためか、文様も不鮮明なものが殆どである。また焼成も軟質のものが多い。したがって、範傷の有無の確認はできなかった。成形方法は粘土紐桶巻き作りで杵板痕、粘土紐の接合痕が観察できる。顎部形態は奈文研の分類による段顎ⅠLに相当し、顎部の調整は縄たたきの後、横方向のけずりでたたき痕を消すものと、一部たたき痕を残すものの二つに分けることができる。一部たたき痕を残すものには顎部に明瞭な接合痕を確認することができる(第5図)。この顎部調整の違いは、製作技法の一連の流れの中での細かな差異であろう。



第4図 6664 I



第5図 6664 I 断面図



6668 A1



6668 A2



6668 A3

第6図 6668 A1・6668 A2・6668 A3

(3) 軒平瓦6668 A (均整唐草文軒平瓦)

6668 Aの中心飾りは左右に開く花頭を尖らせたもので、唐草は三回転半、上・下・脇区に全て珠文をめぐらせている。瀬後谷瓦窯では7点出土している。成形方法は粘土紐桶巻き作りである。石井清司氏は、瀬後谷瓦窯出土の6668 Aを範割れの段階でA1~A3の三つに分けている(第6図)。A1は範割れの無い古段階のもので、平瓦部凸面の顎寄りの部分に斜交する縄たたき痕がある。この縄たたき痕に関しては平城宮出土の6668 Aにも同じものが見られるがこれに関しては後章で述べる。A1の顎部の段部は、けずり込んだ後になで調整を施している。A2は瓦当の中心より左側に縦方向の範割れが生じたものである。平瓦部凸面には縦位の縄たたき痕が見られ、A1の斜交縄たたき痕とは異なっている。A2の顎部の段部はけずり込みのみで、なでの調整はない。A2は平城京三条二坊七坪(長屋王邸)で同じ範割れのものが数点出土しており、成形方法も同じ粘土紐桶巻き作りであることから、瀬後谷瓦窯産とみられている(注9)。A3はA2の範に中心より右側に縦方向の範割れが加わったものである。顎部及び平瓦部凸面の調整はA2と同じである。

(4) 軒平瓦6700 A (均整唐草文軒平瓦、第7図)

ㄨ字形の中心飾りを持ち、唐草は三回転半で上・下・脇区すべてに珠文をめぐらせる。瀬後谷瓦窯では3点出土している。この軒平瓦は、京内では出土しているが宮内での出土をみない。京内では6668 A2と同様に、同範のものが左京三条二

坊で数点出土しており、成形方法も酷似することから瀬後谷瓦窯産とみられている^(注10)。

なお、山崎信二氏は瀬後谷瓦窯出土の6664 I、6668 Aについて「粘土円筒外側の下位に頸部を作りだし、製作行程の最終段階では凸



第7図 6700 A

型台の上で成形」する粘土紐桶巻き作りであると指摘している^(注11)。

3. 主たる軒瓦の出土位置に関する検討

ここでは上記に述べた軒瓦について、範傷の進行が確認できる6284 E aと6668 A、そしてその他の複数点出土している軒瓦(6664 I、6700 A、6640、6671 I)を対象として、出土位置を見てゆくこととする。そこから、各々の窯がどのような順序で操業されたのか、また軒瓦の生産の相対順序を検討することにする。瓦窯の操業順序についてはすでに灰原の堆積状況によりあきらかになっている^(注13)。それによると、まず最初に2号窯で操業が始まり、その後3号窯、以下5号窯、4号窯と続く。ただ、1号窯の操業時期に関しては、灰原の層位の重なりが認められないため、操業順序を判断することはできない。しかし2～5号窯における平瓦・丸瓦が粘土紐桶巻き作りであるのに対し、1号窯の平瓦・丸瓦が、糸引き痕を残す凸型台成形法であることや、2号窯との窯の構造上の違いから、操業時期はこれらのなかで最も遅れると思われる。ただここでは、軒瓦の検討を主題としているため、平瓦・丸瓦の観察から、1号窯の操業時期を論じるのは別の機会に譲ることとする。以下、軒瓦ごとにみてゆく。

(1) 6284 E aの出土位置

a. 範傷ごとの出土位置の検討

6284 E aの範傷の進行については前項で既に述べた。それらのうち、出土位置の確かなものを図示したのが第8図である。図からわかるように、範傷Ⅰ段階の軒瓦は、全て2号窯灰原で出土している。それに対して、範傷Ⅱ段階の瓦は2号窯灰原では2点のみの出土であるが、残り全てについては3・5号窯灰原で出土している。

b. 瓦当範の製作手法ごとの出土位置の検討

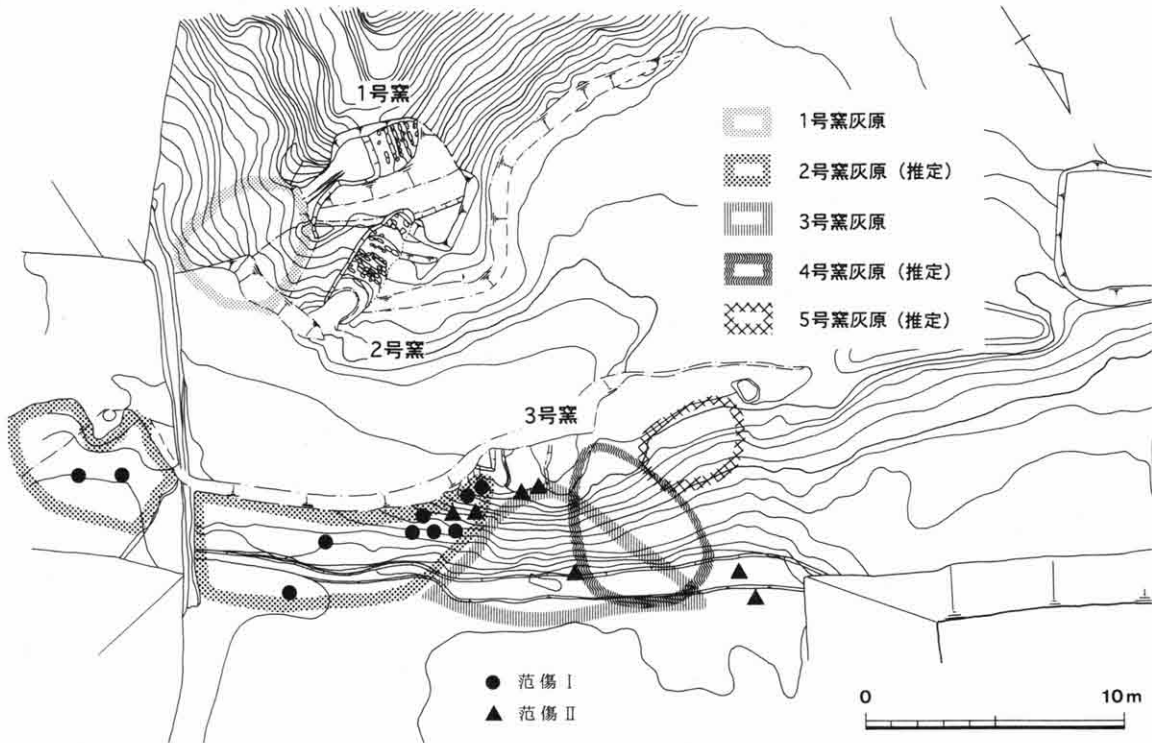
範傷同様、既述の瓦当部分の製作手法の異なる軒瓦の出土位置の検討を加えることにする。第9図が瓦当部分の製作手法ごとの出土位置である。これに関しても、A手法の軒瓦が全て2号窯灰原で出土しているのに対して、B手法の軒瓦は2号窯灰原では1点のみで、残りの全ては3号窯灰原からの出土である。このことは6284 E aの範傷Ⅱ段階にあたる3号窯の操業時期には瓦当部分の製作に複数の工人が携わった可能性を示している。

以上のことから、2号窯と3号窯についての操業順序を軒瓦から見た結果と灰原の堆積状況から見た結果とが矛盾無く合致することがわかった。範傷段階ごとの出土位置から、まず最初に、6284 E aは2号窯において範傷Ⅰ段階から範傷Ⅱ段階のある時期まで生産されていた。その後、ある時期を境に6284 E aの生産は3号窯に移る。灰原の堆積状況から考えて2号窯で操業を終了

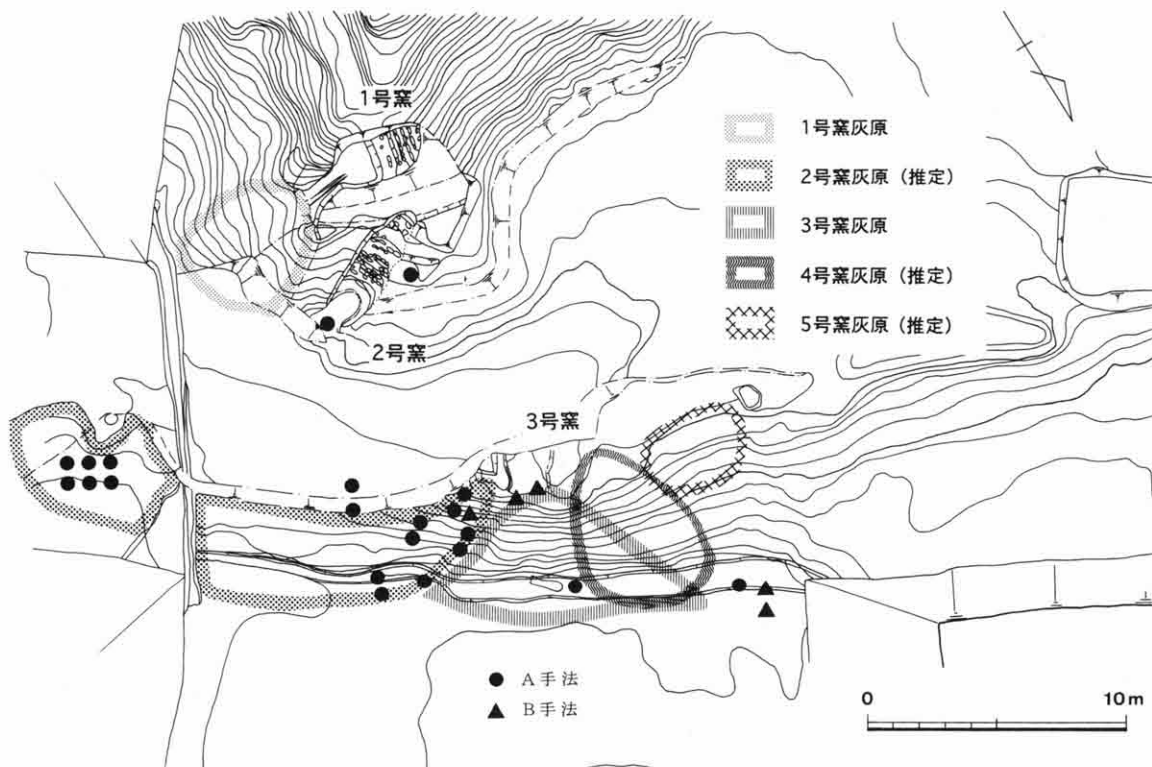
してから3号窯の作業を開始したと考えられる。

(2)6668Aの出土位置

6668Aの範割れについても既述しているので、ここで範割れごとの出土位置に関して検討を加

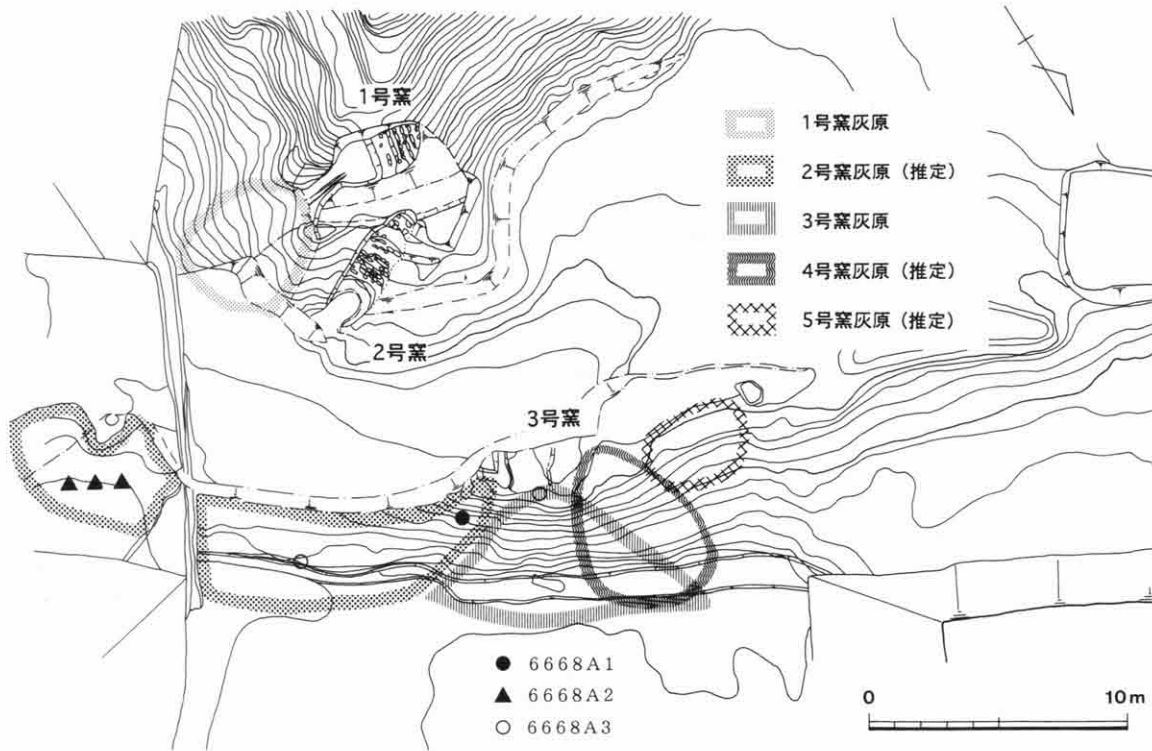


第8図 6284Ea範傷段階ごとの出土位置

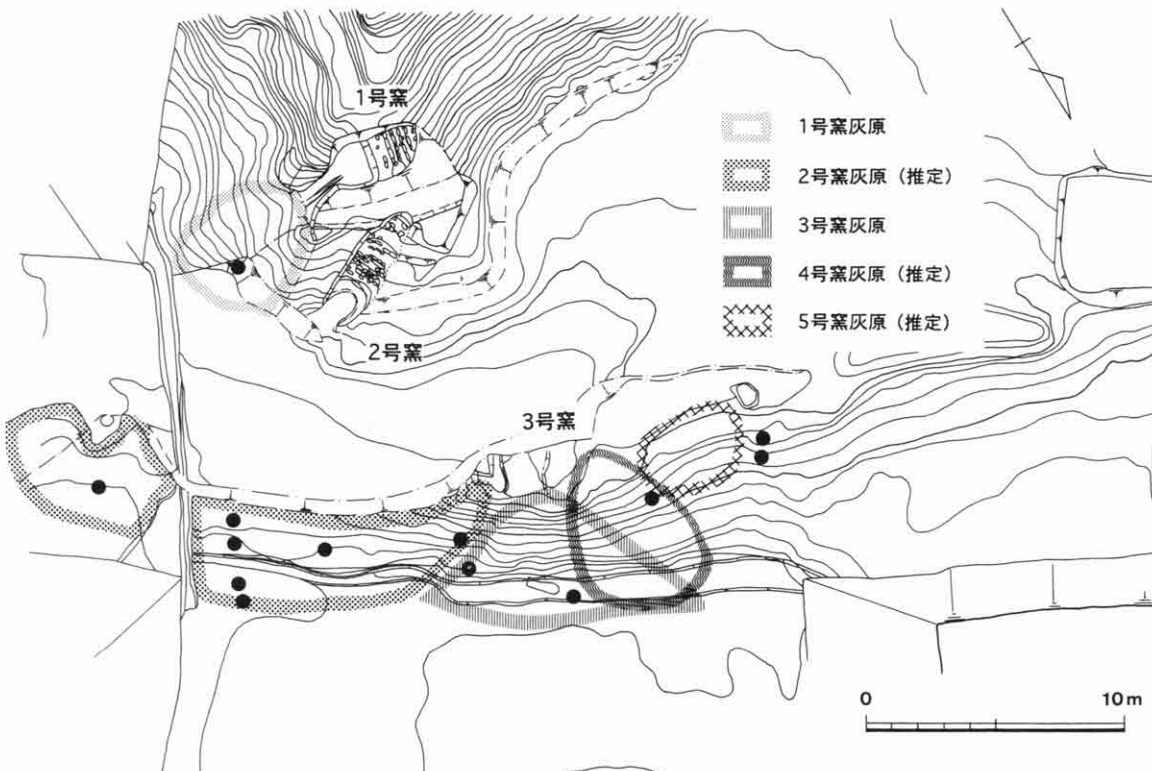


第9図 6284Ea瓦当部分の製作手法ごとの出土位置

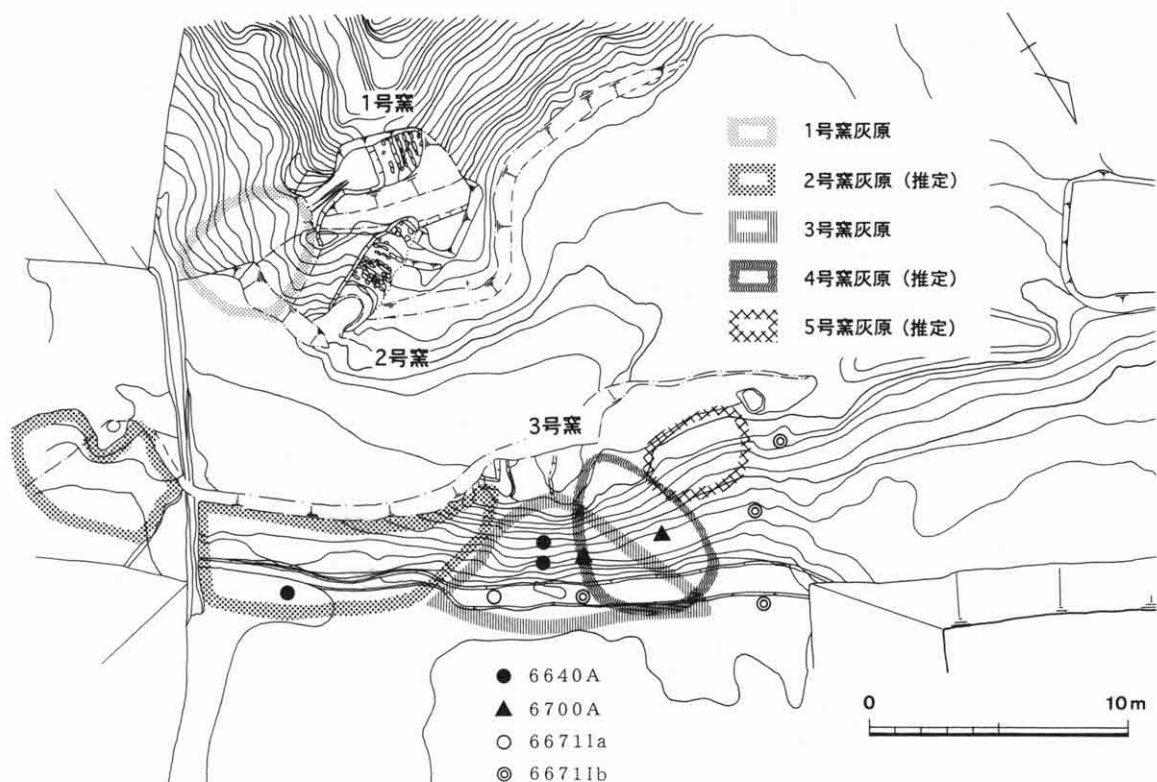
える。第10図が示すとおり、2号窯灰原ではA1からA3の全ての段階のものが出土している。しかし、3号窯灰原では1点ではあるがA3段階のものが出土している。このことから、2号窯での6668Aの生産はA1からA3の期間に行っていたが、A3のある時期に生産主体は3号窯に移っ



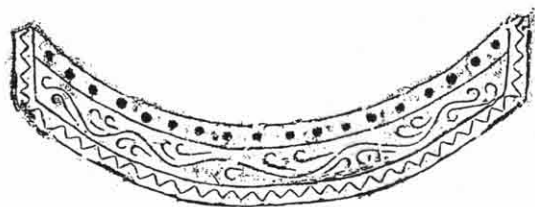
第10図 6668A 範割れごとの出土位置



第11図 6664 I の出土位置



第12図 その他の軒瓦の出土位置



第13図 6640A



6671 I a



6671 I b

第14図 6671 I a・6671 I b

たとえることができる。6668Aの範割れを確認できるものは量的には少ないが、この軒瓦の出土位置についても6284Eaの出土位置の検討によって得た瓦窯の操業順序と同じ結果を示す。

(3)6664 I の出土位置

第11図が6664 I の出土位置である。前項で触れたように6664 I は範傷の進行具合が確認できるものがないため瓦窯ごとの変遷を確認することはできない。しかし6664は平城宮・京での組み合わせから6284と組み合わせるため図示した。この図から6664 I はほぼ6284 Eaと同時期に生産されていたことがわかる。

(4)その他複数点出土の軒瓦(6640A、6671 I a・b、6700A)

第12図を見てわかるように各型式ごとの出土点数は少ないが、4型式の中で2号窯灰原での出土が確認できるものは、6640A(第13図)のみである。したがって6640Aは6284 Ea・6664 I

の組み合わせが生産されていた時期とほぼ併行して生産されていたと考えられる。そして3号窯に生産主体が移ってから、6671 I a・b(第14図)、6700 Aの軒平瓦が生産され始めたと考えられる。

以上のことから、当初は2号窯で6284 E a、6664 I、6668 A、6640 Aの4型式の軒瓦が生産され、6284 E aの範傷がⅡ段階になってからのある時期に2号窯では生産を終了し、3号窯以下の瓦窯での生産を開始したと考えられる。そして軒瓦の型式種類も当初2号窯では4型式のみであったものが、3号窯以降ではそれに6298 A、6316、6671 I a・I b、6700 A、6679 Aの6型式が加わる。さらに推定4・5号窯灰原からは土製塔片も100点以上出土している。このように、瀬後谷瓦窯の瓦生産は3号窯での操業時期に入ると一変して多様化の様相を呈するわけである。これは前述の3号窯操業時に6284 E aで瓦当部分の製作において複数工人の存在が考えられることと何らかの関わりを持っていると考えられる。

4. 平城宮出土軒瓦との比較

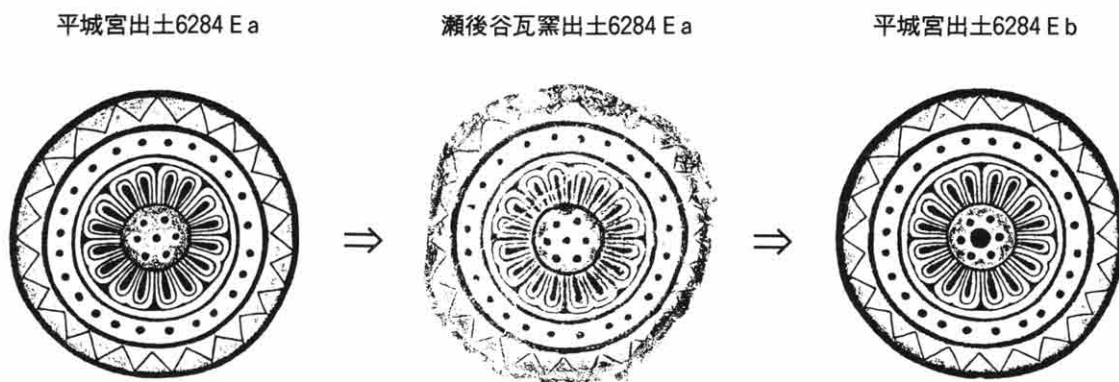
瀬後谷瓦窯出土軒瓦に関しては、数型式の軒瓦が、平城京三条二坊での出土瓦と同じ範傷を持つ関係にあることなどから、京内に供給先があったことはわかっている。では、宮内では一体どうであったのだろうか。その疑問を念頭に起きつつ、平城宮出土の同型式軒瓦を観察した。以下、その対比を型式ごとに行う。

(1) 6284 E a

6284 E aは平城宮では第一次大極殿の遺構から出土している^(注16)。その中での、主たる出土位置は南門地区や築地跡である。ただ、6284の中でE aは他の型式と比べ出土量が少ない。まず範傷であるが、瀬後谷瓦窯で確認できた範傷については平城宮出土瓦の中には見い出すことができず、全て範傷のないものであった。もちろん範は同じであるため、範傷の進行からいっても平城宮第一次大極殿で使用された6284 E aは、瀬後谷瓦窯出土のものより遡ることが言える。また、平城宮出土の6284 E aと瀬後谷瓦窯出土のそれとは、明らかな外見上の違いが認められる。それは両者の6284 E aを比べた場合、平城宮出土の方が、丸瓦部が厚く、瓦当面と丸瓦の接合用粘土の量が多く、瓦当部分が厚い、というように一見して全体的に重厚な印象を与えるからである。また瓦当裏面においても、平城宮ではなで調整を施している^(注17)のに対し、瀬後谷瓦窯ではけずり調整を施している。そして前項で述べた瀬後谷瓦窯でみられる瓦当部分製作のB手法も平城宮では管見のおよぶ限りみられない。

(2) 6284 E b

6284 E bは以前は6282 Faとされていたのだが、6284 E aの中央蓮子を大きく彫り加えたものであるということが分かり、6284 Eの中に組み込まれている^(注18)。またE bの平城宮での出度量はE aよりもはるかに多い。そこで、瀬後谷瓦窯ではE bの出土は無いが、平城宮出土のE aに瀬後谷瓦窯同様の範傷が認められなかったため、E bでの範傷の照合を行った。その結果、実見した6284 E bの全てにおいて瀬後谷瓦窯におけるⅡ段階以降の範傷を確認することができ、かつⅡ段階以前のものとは認められなかった。またE bは前述した平城宮のE aと瀬後谷瓦窯産との違いと同様、各部に



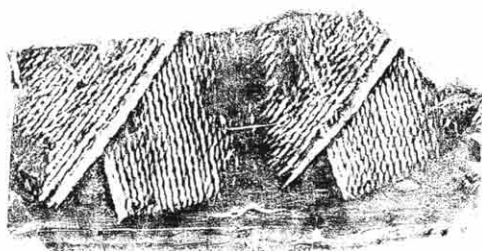
第15図 6284 E aにおける瓦当範の移り変わり
(平城宮出土のものは注3-3文献より引用)

わたり違いが認められ瀬後谷瓦窯のものより重厚な印象を与える。

以上のことから、次のようなことが考えられる(第15図参照)。6284 E aは当初、瀬後谷瓦窯以外の某瓦窯で生産され、平城宮第一次大極殿へと供給されていた。しかし、範傷が殆ど生じない段階で、瓦当範は瀬後谷瓦窯へと移動する。瀬後谷瓦窯では範傷がⅡ段階になるまで生産されるが、ここで生産された6284 E aは平城宮へは供給されず京内の某所へ供給された。そして次の段階に6284 Eを宮内所用瓦として生産するため範はまた別の瓦窯へ^(注19)とわざわざ移動している。この段階に6284 E aの範は中央蓮子が大きく彫り加えられ、6284 E bへと変わっている。

(3) 6668 A・6664 I

この2型式の軒平瓦に関しても6284 E aと同様、平城宮出土瓦の中から瀬後谷瓦窯と同じ範傷を持つものは、確認できなかった。ただ、第16図に示すような、瀬後谷瓦窯出土6668 A 1にみられる斜交する縄たたき痕をもつものは、数点見受けられた。しかし、平城宮出土の6668 Aに見られる斜交する縄たたき痕は成形過程中的のものと考えられるが、瀬後谷瓦窯では縄たたきを斜交させることが形骸化した結果のものであるように思われる。したがって両者とも特有な縄たたき痕を見せるが本質的には異なっており、この点からも瀬後谷瓦窯の軒平瓦が平城宮出土同型式軒瓦とは全く違った様相を見せていることがわかる。また瀬後谷瓦窯で見られた粘土紐桶巻き作りの痕跡は平城宮出土のものの中には確認できなかった。^(注20)



第16図 瀬後谷瓦窯出土6668 A 1にみられる斜行縄たたき痕

5. 瀬後谷瓦窯の性格(考察にかえて)

瀬後谷瓦窯出土の軒瓦の検討を通じて得られたことを列挙すると以下のようになる。

- ①軒瓦の範傷から得た窯の操業順序は、灰原の層位から得た操業順序の結果と矛盾しない。
- ②瀬後谷瓦窯出土の軒瓦は、範傷や調整方法などの面を考えると、平城宮へ供給されたものではない。
- ③宮内へ供給していた某瓦窯から、京内への供給の

ため瀬後谷瓦窯へ移動してきた6284 E aの範は、宮内へ供給するために再びどこかの瓦窯へ運ばれ、範は中央蓮子を大きく彫り加えられ6284 E bへと姿を変えた。

上記の②と③から、結論を先に示すならば、瀬後谷瓦窯は平城京内への供給を目的として操業された官主導の瓦窯であると考えられる。そのことは6284 Eの範傷からわかる範の移動を明確に示しており、さらに前章で述べたように瀬後谷瓦窯出土の6284 E aと平城宮出土の6284 E a・bとの細部における違いによってもわかる。平城京では、軒瓦を出土する地域が二類型に分かれることはすでに指摘されている。^(注21) ひとつは各時期にわたって平城宮所用瓦の同範品が使用され、平城宮と異なる軒瓦が殆ど出土しない地域(類型Ⅰ)。もうひとつは平城宮内で未出かあまり出土しない軒瓦が主体を占める地域(類型Ⅱ)^(注22)である。京内の瓦の出土地域の様相がこのように分かれるように、生産体制も、宮所用瓦の瓦窯と、京内所用瓦の瓦窯との分化がなされていた可能性を瀬後谷瓦窯の事例は示している。神亀元年(724年、第Ⅱ期初頭に相当)に、朝廷は瓦葺き建物の建造を奨励することを太政官奏の形で発してはいるものの、^(注23) 現段階の調査では、京内所用軒瓦の確立はⅢ期以降であるとされている。^(注24) たとえ当時の高級官僚とはいえ、個人で瓦の生産体制を確保するのは並大抵のことではなかったであろう。とすると遷都当時の京内所用瓦の生産は官主導であったと考えられる。6284 Eの範の移動は、遷都当時官の主導で京内所用瓦が生産され、その一貫として瀬後谷瓦窯が操業されていたと考えさせる要素となる。さらに推論を進めることになるが、これに関連することで、森郁夫氏は遷都当時の瓦生産体制において太政官の介入の可能性を指摘している。^(注25) これを念頭に置くと、6284 Eの一見面倒に見える範の移動には、太政官の権力、すなわち造営官司の上部機構の介入を想起させる。

供給先については、すでに明らかなように6668 A・6700 Aに関しては長屋王邸出土のものとの同範関係は認められている。そして、瀬後谷瓦窯の6284 E aが京内の未発掘の某所へ供給された^(注26)とすると、供給先は数カ所であったことが予想される。

以上のように瀬後谷瓦窯出土の軒瓦に関して論述してきたわけだが、いくつか推論の域を出ない箇所があるのは一重に筆者の力量不足である。瀬後谷瓦窯に関しては窯の構造、丸・平瓦の粘土紐桶巻き作りの系譜、土製塔など、検討しなければならぬ問題点が多い。それは藤原京から平城京へ遷都される間隙の時期の瓦生産の解明の一端を担うものであり、今後もさらに出土遺物の検討を続ける必要性を痛感している。

最後に小稿を草するにあたり、瓦についてまだ浅学の筆者に対して以下の機関および諸氏より多大なる御教示、御助力を得た。文末に記して感謝の意としたい(敬称略)。

京都府埋蔵文化財調査研究センター、奈良国立文化財研究所、有井広幸、石井清司、森郁夫、山崎信二

(おくむら・しげき=帝塚山大学大学院生)

注1 1. 戸原和人「木津地区所在遺跡 昭和62年度発掘調査概要(3)瀬後谷遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第32冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1989

2. 石井清司「木津地区所在遺跡 昭和63年度発掘調査概要(5)瀬後谷遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第35冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1989
 3. 伊賀高弘「木津地区所在遺跡 平成元年度発掘調査概要(3)瀬後谷遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第40冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1990
 4. 石井清司「木津地区所在遺跡 平成2年度発掘調査概要(3)瀬後谷遺跡(第4次調査)」(『京都府遺跡調査概報』第46冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1989
 5. 石井清司「木津地区所在遺跡 平成3年度発掘調査概要(1)瀬後谷遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第51冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1992
- 注2 瀬後谷瓦窯出土の土製塔に関しては下記の論文に詳しい。
石井清司「瀬後谷瓦窯出土の土製塔」(『京都府埋蔵文化財論集』第3集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1996
- 注3 1. 『平城宮出土軒瓦型式一覧』 奈良国立文化財研究所 1978
2. 『平城宮出土軒瓦型式一覧(補遺編)』 奈良国立文化財研究所 1984
3. 『藤原京・平城京出土軒瓦型式一覧』 奈良国立文化財研究所 1996
- 注4 本文中の図版は特記するもの以外全て注1-5文献から引用した。
- 注5 奈良県北葛城郡平群町所在「瓦清」を1996年6月に訪れた際に鈴木啓之氏より御教示を得た。
- 注6 岡本東三「考察 屋瓦」(『平城宮発掘調査報告X I』 奈良国立文化財研究所) 1982
- 注7 毛利光俊彦「考察 屋瓦」(『平城宮発掘調査報告X III』 奈良国立文化財研究所) 1991
- 注8 注1-5文献による。以降6668Aの筈に関しては概報の記述をそのまま使用する。
- 注9 岸本直文「遺物 瓦磚類」(『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告(長屋王邸・藤原麻呂邸の調査)』 奈良県教育委員会) 1995
- 注10 注9文献
- 注11 山崎信二「桶巻き作り軒平瓦の製作工程」『考古論集(潮見浩先生退官記念論文集)』 1993
- 注12 検討対象は同一個体の可能性のないものを対象とし、明らかに同一個体と認められるものは総じて一点とした。
- 注13 注1-5文献
- 注14 注1-4文献
- 注15 灰原の切りあいの境界上に出土するためどちらの灰原に属するのか不明確なものは検討対象から省く。以下全てこれを適用する。
- 注16 狩野久・鬼頭清明「遺物 瓦磚」(『平城宮発掘調査報告X I』 奈良国立文化財研究所) 1982
- 注17 毛利光俊彦「考察 屋瓦」(『平城宮発掘調査報告X III』 奈良国立文化財研究所) 1994
- 注18 佐川正敏「平城宮の軒丸瓦6284Eと6282Fa」(『奈良国立文化財研究所年報』 奈良国立文化財研究所) 1992
- 注19 平城宮出土の6284EaとEbは、製作技法および法量に共通点が見られるので、この2型式の瓦を生産した瓦窯は同一である可能性も考えられる。しかし、当該瓦窯が不明の現在では単なる推論にすぎない。
- 注20 平城宮出土のこの2型式はもし仮に粘土紐桶巻き作りのものがあつたとしても平瓦部を丹念になで消しているため痕跡が確認できなかった。
- 注21 1. 森郁夫・岡本東三「考察 羅城門跡付近の瓦について」(『平城京羅城門跡発掘調査報告』 大和郡山市教育委員会) 1972

2. 加藤優・稲田孝司・金子裕之・山本忠尚「遺物 奈良平安時代の遺物 瓦磚類」(『平城京三条二坊』 奈良国立文化財研究所) 1975
3. 岩永省三「遺物 瓦磚類」(『平城京二条二坊十三坪の発掘調査』 奈良国立文化財研究所) 1984
4. 杉山洋「遺物 瓦磚類」(『平城京三条二坊六坪発掘調査報告』 奈良国立文化財研究所) 1986

注22 注21-3文献

注23 『続日本紀』神亀元年十一月甲子条

注24 注21-2文献

注25 森郁夫「平城京における宮の瓦と寺の瓦」(『古代研究』八 (財)元興寺文化財研究所) 1976

注26 本論中で詳細を述べられなかったが、羅城門跡出土の軒丸瓦6316の一群と同系統と思われる6316系の軒丸瓦が、瀬後谷瓦窯推定5号用灰原より出土している(注21-1文献)。羅城門跡出土のものに関しては、未だ実見を行なっていないため、今後確認を急ぎたい。

共同研究

改築された横穴式石室

— 京都府中丹地域例を中心に —

松井忠春・小池 寛

1. はじめに

横穴式石室は、追葬を可能とする石室構造であることから、追葬段階に石室の一部が改築される事例が、徐々に増加している。しかし、墳丘内に築造された狭小な空間であるため、礫床や棺台の一部の改築が一般的であり、側壁や天井石などの基本的な構造を大規模に改築する事例は、墳丘及び石室の一部崩壊などの要因以外では知られていない。^(注1)

近年、京都府中丹地域周辺において古墳時代後期後半の横穴式石室墳の調査例が増加し、追葬時に改築を行った事例が、知られるようになった。

本稿では、当該地域周辺の改築された古墳を中心に検討し、改築される時期と部位について整理し、改築に表出された歴史的意義について検討することを目的とする。また、いわゆる終末期古墳が、各地域に採用される前段階の動態についても検討したい。

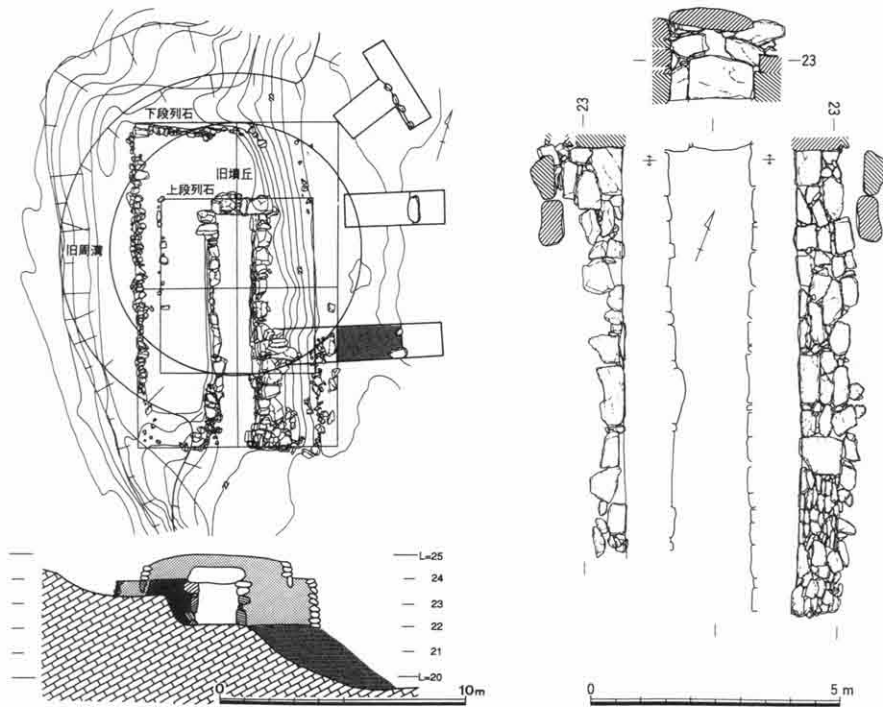
2. 改築された横穴式石室墳の概観

京都府の中央部に位置する福知山市・綾部市域は、一般に中丹地域と称されており、近年の大規模な開発に伴う発掘調査によって、新たに横穴式石室墳が確認される事例が増加している。確認された石室の多くは、基底石のみの残存ではあるが、追葬時に改築された状況を比較的明瞭に把握できる。以下、中丹地域を中心に各古墳について墳丘・石室・築造時期を概観し、第3・4章で、改築部分についての検討を行うこととする。

竹野郡丹後町・上野2号墳(第1図)

上野2号墳は、京都府竹野郡丹後町三宅小字上野に所在する後期古墳^(注2)である。発掘調査の結果、築造当初は、直径10mの円墳で、埋葬主体部は、全長約6mの無袖式の横穴式石室と推定されている。築造時期は、出土遺物がないものの石室の構造から7世紀前半に比定されている。

一方、本古墳は、7世紀前半に当初の円墳を列石が2段にめぐる方墳に改築したと報告している。その列石は、上段が7m×7m、下段が13m×8mの規模を有しており、西側列石に約3m間隔で基準になる人頭大の礫を配し、石垣状に列石を配置する。また、その基準となる南端の礫と築造当初の羨門部の礫が、石室主軸に直交するラインで一致する。特に、羨門部より南側の羨



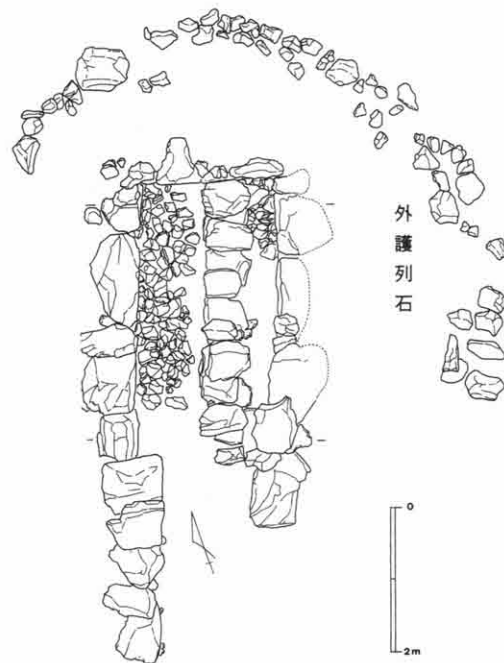
第1図 丹後町上野2号墳(注2転載)

道は、築造当初の石材が人頭大であるのに対して、比較的小さい石材を使用しており、また、石材の積み方が異なっていることから、改築時に羨道部を継ぎ足したことが推定されている。

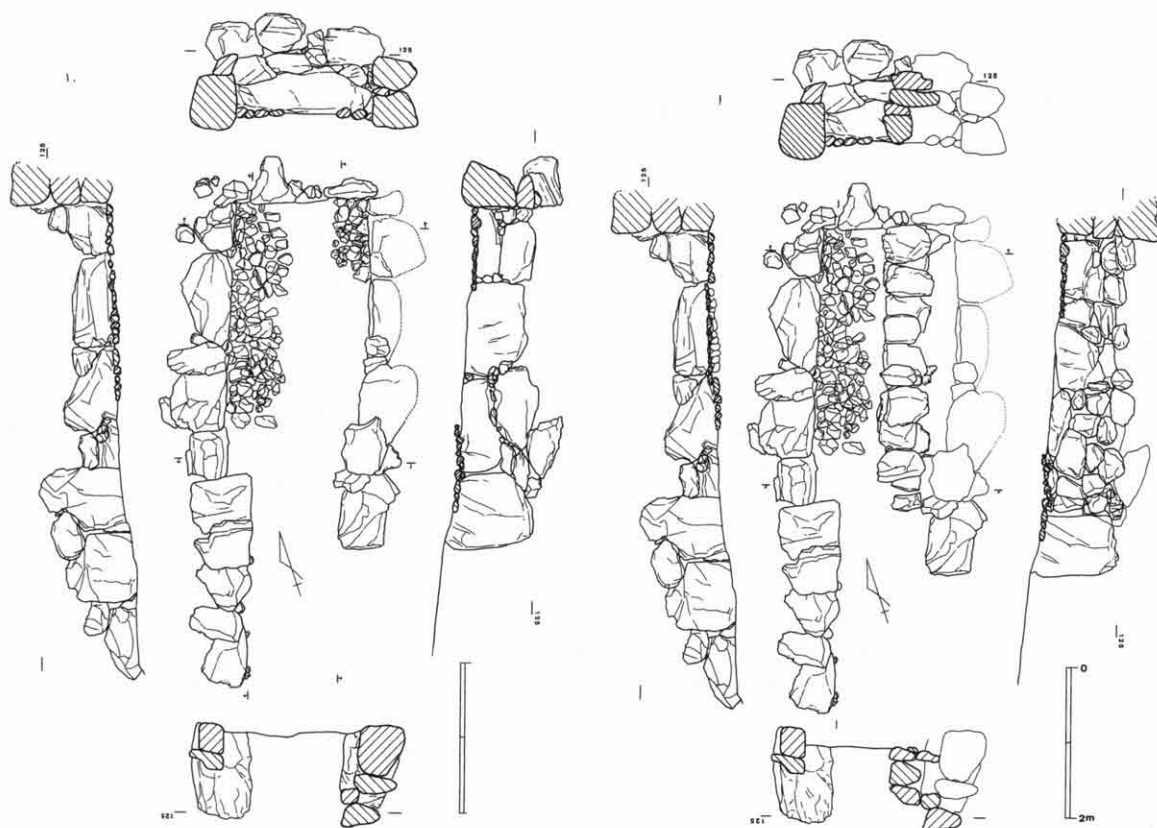
このように、本古墳は、墳形の改築に伴い石室の羨道部を付け加えて構築している事例として認識できる。『報告』では、「三宅」の地名が隣接地に存在することから、漠然とではあるが、「屯倉」との関連を想定している。

綾部市・神宮谷3号墳

神宮谷3号墳は、綾部市別所町大字神宮谷に所在する直径13mの円墳である。墳丘裾部には、石室主軸線を中心に径6mの外護列石をめぐらせている(第2図)。築造時の埋葬主体部(第3図)は、残存長6.4m、幅1.8mの両袖式の横穴式石室であり、玄室長は3.6mである。石室内からは、須恵器、土師器、武器農工具、馬具、耳環、飾り金具などが出土している。特に、鏝を装着した鉄刀や鉄斧・鉄鎌・轡・壺鐙などの鉄製品は、当該地周辺一帯に点在する後期古墳の中にあっても多様な



第2図 綾部市神宮谷3号墳(注3再トレース)



第3図 神宮谷3号墳(第1次床面)

第4図 神宮谷3号墳(第2次床面)

副葬品をもった古墳である。

玄室東壁は、追葬時に石室中央に第2次東壁(第4図)を構築している。その東壁は、奥壁部から玄門部までは、石室主軸線に並行して直線的に構築されており、玄門部から第1次東壁の袖石中央部にかけては、湾曲するように構築している。第2次構築石室の規模は、全長3.6m・幅0.8mであり、玄門部の最大幅は、基底石で計測すれば、0.8mである。第2次東壁は、築造当初の両側壁と同じ残存高であることから、天井石付近まで構築されていた可能性も指摘できる。第2次の石室床面には、築造当初の礫床を修復して、ほぼ全面に礫を敷いている。

なお、築造時期については、出土土器の点数がわずかであり、また、土器による型式差も見出せないが、概ねTK43～TK209併行期に比定できる。

綾部市・細谷1号墳(第5図)

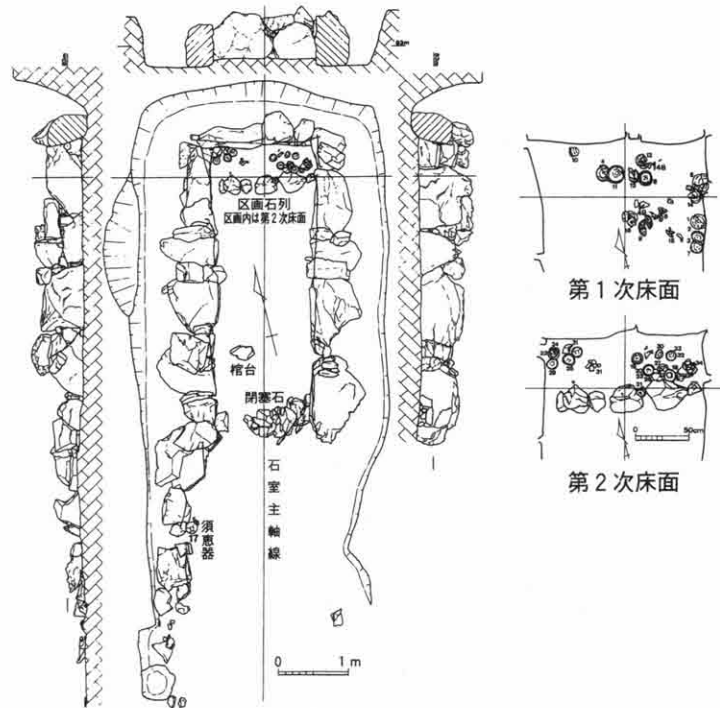
細谷1号墳は、綾部市位田町大字細谷に所在する^(注4)。墳丘の規模は、後世の削平のため不明であるが、墳形は、古墳群を形成する他の古墳が円墳であることから、同じように円墳であったと考えられる。

玄室長は、奥壁から玄門部に集積する閉塞石群までが3.8mであり、羨門部周辺をやや広く構築している。床面は、TK209の型式的特徴を持つ須恵器群が出土した第1次床面と、追葬時に奥壁から約0.5mに人頭大の礫を並べ小区画部を構築した第2次床面を検出している。小区画部からはTK217併行期の須恵器群が出土しており、杯蓋に宝珠つまみが見られないことから、T

K217型式でも、古相として把握できる。なお、小区画石列は先述した神宮谷3号墳とは異なり、天井部付近にまでは達していなかったと推定できる。

綾部市・細谷4号墳(第6図)

前述した細谷1号墳から約420mの北方丘陵の先端部に位置する古墳である。墳丘は、後世の削平を受け、正確には把握できないが、周溝状の落ち込みから直径18m前後と推定できる。石室は、玄室長4m・幅2mの両袖式の横穴式石室で、羨門部分までの残存長は、10.6mである。羨道は、玄門部から羨門部にかけて徐々に広がるように構築しており、羨門部での幅は、1.3mである。玄室床面には、拳大の礫を主体とする礫床が敷かれており、蓋杯・有蓋高杯・無蓋高杯・甕・台付壺・横瓶などの須恵器、土師器の椀、石製紡錘車・管玉などの石製品、鉄鏃・轡・鏡・鞍金具・辻金具・鉸具・鉄斧・鎌などの鉄製品が出土している。



玄室左奥壁には、追葬時に内法全長1.2m、内法幅0.6m、高0.5mの区画を設けている。『報告』では、「石組み区画」ないし「玄室内区」と呼称しているが、金環1点と管玉6点が出土している。

なお、出土した須恵器からTK209の型式的特徴を持つ一群とTK217型式の一群に分類でき、築造時期と追葬時期を推定する上での根拠としている。

		須恵器・蓋杯		須恵器・高杯・提瓶・平瓶・土師器	
第 一 次 床 面	陶器				
	T K				
	2 0				
	9				
第 二 次 床 面	陶器				
	T K				
	2 1				
	7 古相				

第5図 綾部市細谷1号墳(注4 転載)

福知山市・下山1号墳(第7図)

下山1号墳は、福知山市字和久寺小字下山に所在する約100基からなる下山古墳群の中の唯一の方墳である。墳丘は、南北6m・東西5.4mの規模を有し、墳丘高は、1.6mである。また、人頭大の外護列石がめぐっている。石室開口部から墳丘南西隅の墳丘は、後世の攪乱によって大きく崩落しており、特に、石室開口部の状況は推定不可能である。墳丘裾は、外護列石によって区

画されており、崩落は見られるものの、現状においても方形を保っている。開口部の裾部に、外護列石がめぐっていた痕跡は、認められない。なお、石室主軸線と墳丘主軸線は11°前後ずれており、その誤差の原因としては、石室築造と墳丘築造の工程上の要因が考えられる。

石室は、全長2.4m・奥壁幅0.9mを測り、床面には、砂利から拳大の礫による礫床が見られる。現状では、羨道は認定できない。石室開口部には、石室床面を区画する石列が直線的に配置され

ており、その石列よりも羨道部側に側壁が構築されていることから、短かい羨道が構築されていた可能性がある。

石室内からの出土遺物はなんら確認されていないが、築造時期を7世紀前半に比定している。

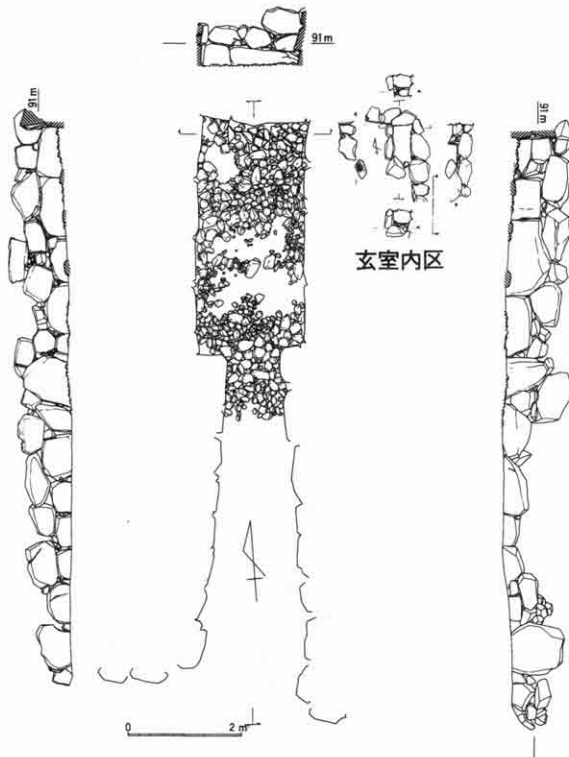
福知山市・下山96号墳(第8図)

墳丘は、後世の削平のため規模は不明であるが、円形と^(注7)考えられる。

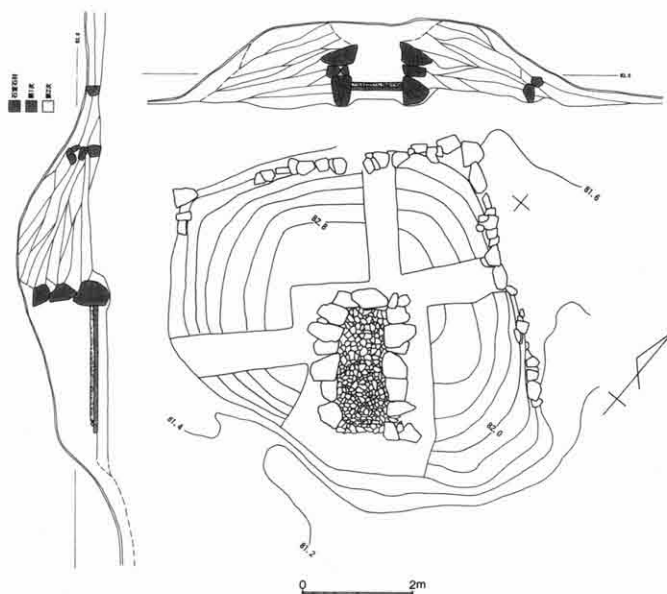
石室は、全長6m・奥壁幅0.9mを測る。床面には、比較的平らな礫によって礫床を設けており、玄室全面に拡がっている。羨道は、基底石が一部残存するのみであり、右側壁は、溝状の掘形を残すに過ぎない。

本古墳は、追葬時に玄室の北半を仕切るように人頭大の礫を立て、砂利を充填することによって2次床面を構築している。築造時期は7世紀前半であるが、2次的に床面を構築し、石室を再利用する時期については不明である。

なお、本稿で取り上げた1・96号墳以外にも小型の横穴式石室が多く報告されている。下山古墳群の築造は、後期に始まるが、奈良時代においても石室の再利用が確認されている。また、同古墳群内には、先述した方墳である1号墳が築造されており、中丹地域において、後期古墳から終末期古墳の



第6図 綾部市細谷4号墳(注5転載)



第7図 福知山市下山1号墳(注6転載)

推移を窺い知る上で良好な資料で
ある。^(注8)

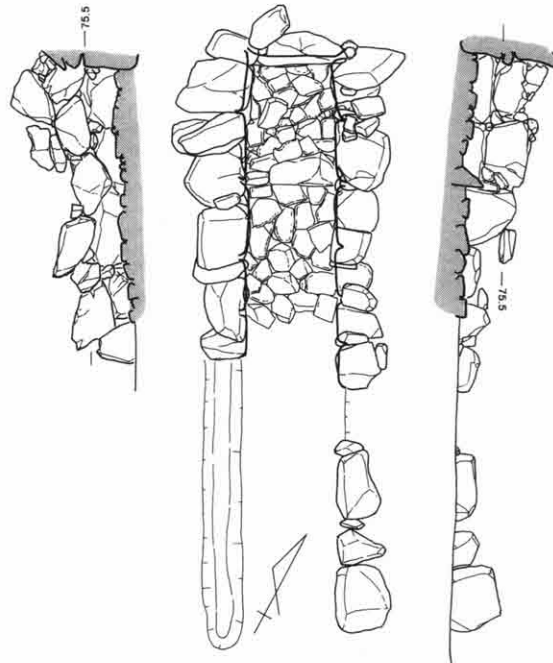
京北町・のぼりお古墳

北桑田郡京北町は、中丹地域より約30km南東に所在しており、厳密には地域外である。しかし、調査されたのぼりお古墳は、石室改築例として重要であることから、取り上げておきたい。

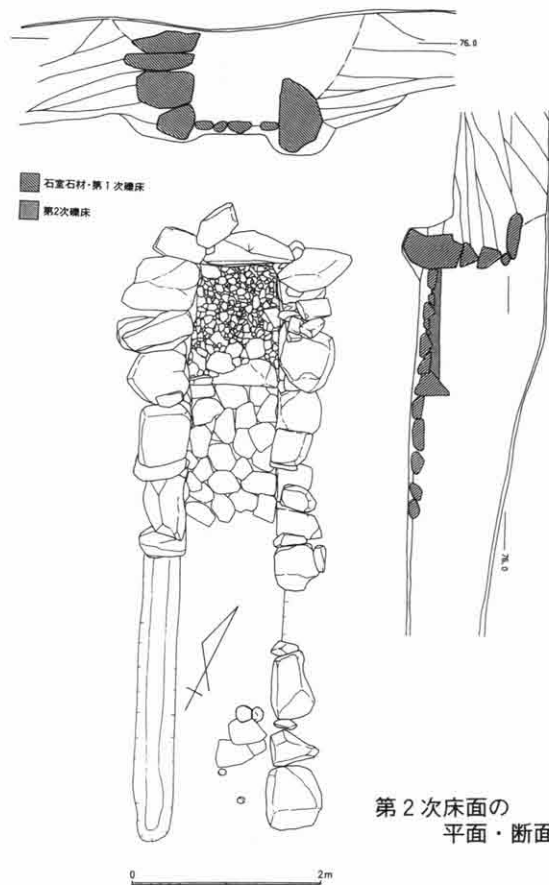
のぼりお古墳は、京北町大字鳥居小字昇尾に所在する直径13mの^(注9)円墳である。北側にはわずかながら周溝が残存しており、墳丘残存高は、3.5mである。地山には、全長7m・幅3m・深さ0.7mの石室掘形を穿っている。

埋葬施設は、全長5.7m、奥壁部幅1.04mの無袖式の横穴式石室で、奥壁部から4mの両側壁に袖石を配している(第9図)。石室内からは、須恵器21点、土師器3点、鉄刀2点などが出土している。須恵器からTK209併行期に築造されたことが把握できる。なお、出土した須恵器・蓋杯には、型式差はなく、追葬に伴う土器については、不明である。

袖石部には、初葬時の副葬品と考えられる須恵器片を埋め込むように黒褐色土を充填し、角柱状の礫を両側壁と床に配している(第10図)。この部位について報告者は、閉塞施設との見解を提示しているが、袖石部に配された礫の状況は、柱石と框石を想起すべき構造であり、本稿では、意図的に改築された事例として検討

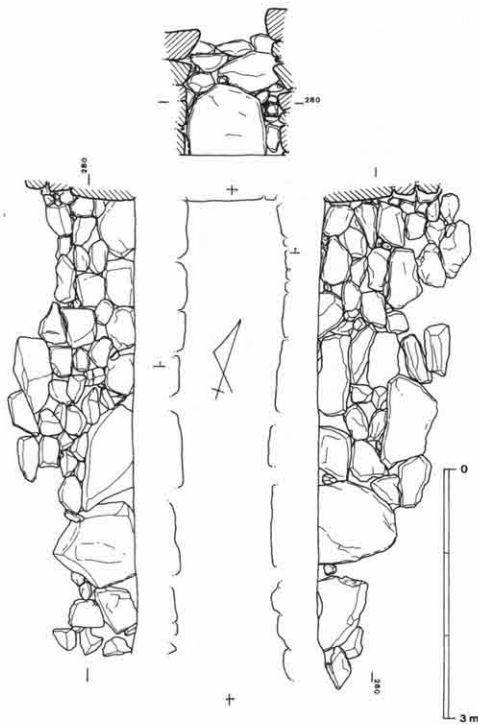


第1次床面の平面・側面

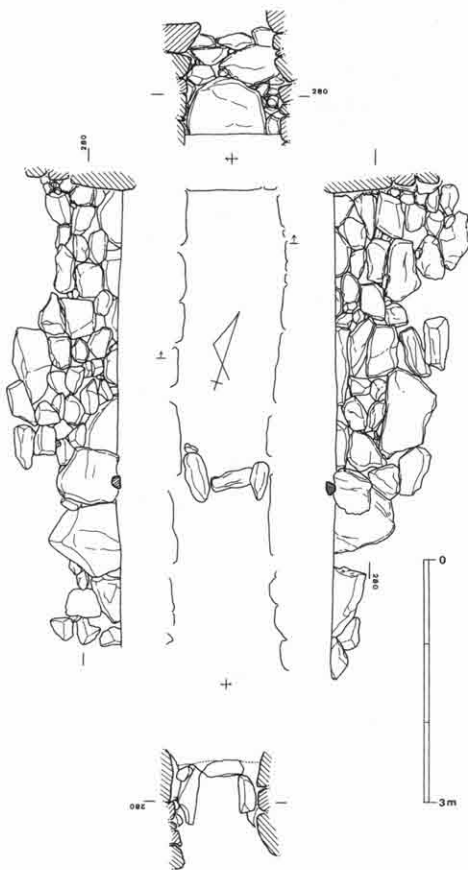


第2次床面の
平面・断面

第8図 福知山市下山96号墳(注6 転載)



第9図 京北町のほりお古墳
(第1次床面：注9再トレース)



第10図 京北町のほりお古墳(第2次床面)

資料の対象とした。

以上が、改築の状況が比較的把握できる類例であるが、以下に地域及び改築例としては、やや性格が異なる類例について概観しておきたい。

綾部市・山尾古墳(第11図)

山尾古墳は、石室を追葬時に改築した例ではないが、中丹地域において初出の終末期古墳である。

山尾古墳は、綾部市坊口町山尾に所在し、ほぼ完存する無袖の横穴式石室を埋葬主体部とする方墳である。墳丘には、石室の羨門部立石に取り付く墳丘最上段に東西7.6mの第四列石を配している。第四列石の南東隅から北方に2.7m、南西隅から北方に6.3mの列石が残存しており、築造時は、墳丘背面にまではめぐっていないものの、東西側面には、列石が存在した可能性が指摘されている。

また、墳丘裾部には、開口部に取り付くように、東西約9mの第三列石を配しており、第三列石の南東隅から北方に0.9m、南西隅から北方に1.7mの列石が残存している。墳丘規模は、第三列石の東西長約9mを墳丘東西の一辺として認識することができる。一方、南北は、第三列石の残存状況が不良であるため、列石の規模のみで規定することはできない。そこで、墳丘後背部のカット面に墳丘裾部を認識すれば、概ね10m前後となる。

墳丘の南斜面には、東西13.8mの第二列石が配され、第二列石の南東隅から北方に2m、南西隅から北方に4.7mの列石が残存している。南東隅の列石屈曲角度は、78°、南西隅の列石屈曲角度は、84°であり、直角ではない。更に、第二列石の南斜面には、東西21.4mの第一列石が配されており、南西隅の列石屈曲角度は、71°である。

埋葬主体部は、全長約6.3mの無袖式の横穴式

石室であり、玄室長約5.4m・奥壁幅約0.9m・羨道幅0.8mである。天井石が完存しており、石室高は約1.2mである。床面には、奥壁から3.4mの範囲に礫床が敷設されている。

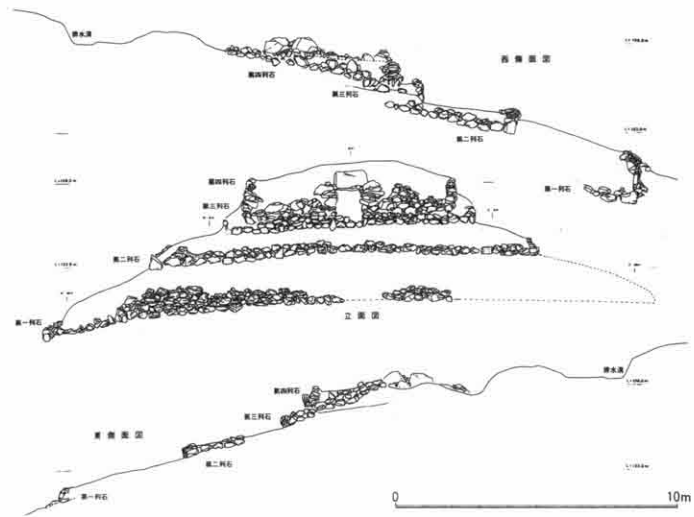
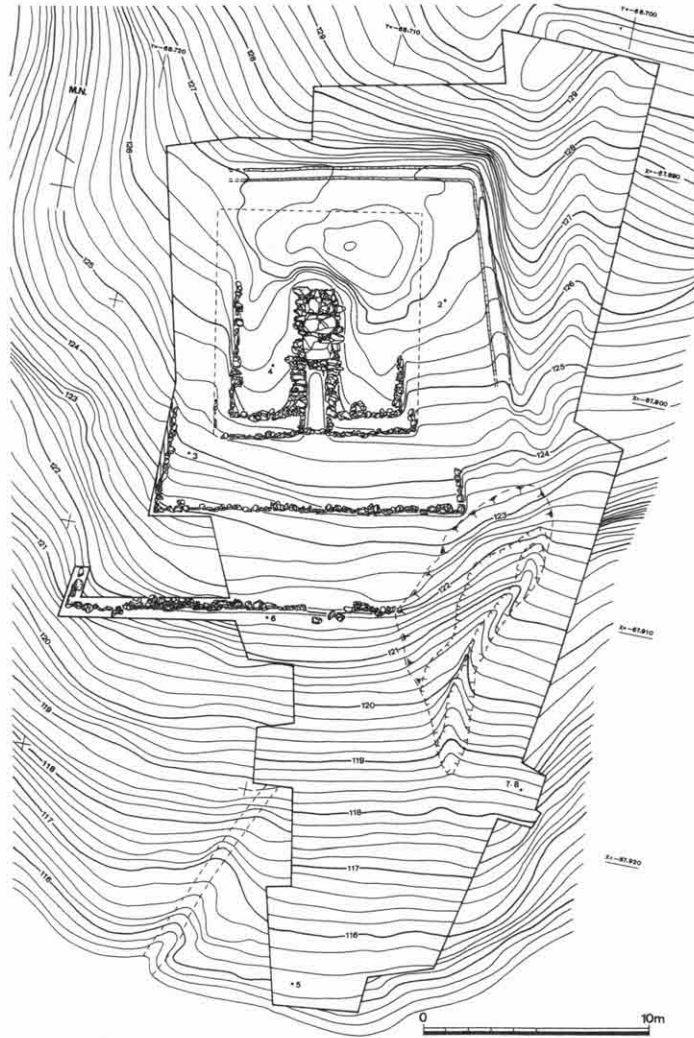
古墳の築造時期については、礫床直上から出土した高杯が飛鳥Ⅲ型式前後に比定できる。概ね、7世紀後半であろう。

このように、本古墳は、墳丘部の外護列石を含めると、4列の列石が配されており、当該地周辺では、類を見ない構造的特徴を有している。これらの墳丘外部の諸施設は、いわゆる、終末期古墳に見られる特徴であり、他の類例との比較検討がまたれるところである。

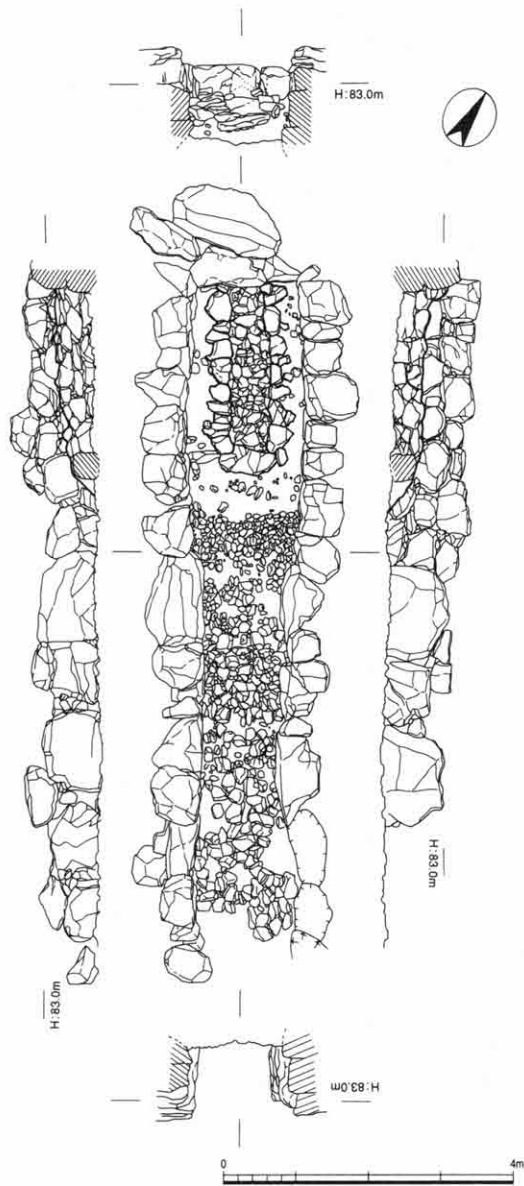
京都市・下西代2号墳(第12図)

下西代2号墳は、中丹地域とは離れた京都市域で検出された後期古墳^(注11)であるが、玄室中央部に新たに小石室を築造した例として挙げる。

下西代2号墳は、京都市西京区大原野南春日町に所在する直径20mの円墳であり、全長13mの両袖式の横穴式石室を埋葬主体部とする。石室は、玄室長3.8m・玄室幅1.8m・羨道長8.2m以上、羨道幅1~1.2mの規模を有し、追葬段階に玄室中央床面に全長2.6m・幅0.5mの



第11図 綾部市山尾古墳(注10転載)



第12図 京都市下西代2号墳(注11転載)

次東壁を石室の主軸線で再構築し、幅0.9mの第2次玄室に改築している。また、床面には、第1次床面の礫床を再利用し、礫床を設けている。この改築は、石室の東壁が崩落するなどの偶発的な要因によって施工されたとは考え難く、意図的に石室の狭小化を目的に改築されたと理解できる。出土した土器から改築された時期を7世紀前半に比定できる。

一方、下西代2号墳は、築造時の玄室床面中央に新たに全長2.6m・幅0.5mの小石室を構築している。これは、追葬段階に玄室床面に粘土によって固めながら構築した小石室で、追葬後、小石室開口部を粘土によって閉塞している。本例は、狭小な施設を意図的に玄室内に構築しており、追葬段階において、なんらかの意識の変革が想定できる。また、下山96号墳は、築造時点では、通有の横穴式石室であったが、玄室北半には人頭大の礫で区画し、砂利を充填して第2次床面を構築することで特異な構造となる。複数回の追葬が想定され、埋葬空間の狭小化を意図していた

小石室を構築している。この小石室は、奥壁を共有し、築造当初の床面を小礫混じりの粘土で固めながら構築したもので、玄門部分が、小石室の開口部となっている。構築時期は、隣接する下西代1号墳が、6世紀末に築造され、7世紀前半から中葉にかけて複数回の追葬が行われていることから、ほぼ、同時期と考えられる。

3. 各横穴式石室における改築部分の検討

以上が、各古墳の概要であるが、本章では、追葬時の改築部分を中心に検討を加えたい。なお、現時点では資料的な制約があり、類型化できるまでには至っていない。

(1) 玄室の改築

追葬段階において玄室部分を改築する横穴式石室墳としては、神宮谷3号墳、細谷1・4号墳、下山96号墳、下西代2号墳などがある。玄室の改築は、玄室自体の規模を著しく狭小化する神宮谷3号墳・下山96号墳・下西代2号墳や奥壁周辺部分に新たに小区画を設定する細谷1・4号墳の2種類に分類することができる。

まず、玄室を著しく狭小化する例である神宮谷3号墳は、幅1.8mの第1次玄室に第2

ことが推定できる。

一般的に追葬時には、床面の遺物群を埋葬に必要な空間を確保するための整理作業をするが、その行為自体は、凡日本的に共通に見られる。しかし、上述した3例のように追葬段階に極端に玄室を狭小化する行為は、新たな意識の変革が背景にあったことを示唆している。その祖型となるべき石棺式石室や石槨を明確には提示し得ないが、改築時には、何らかの影響を受けたとしても不思議ではない。

一方、細谷1・4号墳のように玄室の一部に小区画を構築する諸例は、小区画自体が埋葬を意図して構築される場合と供献土器等を埋納するために構築される場合とが考えられる。細谷1号墳では、人頭大の礫によって構築された区画内からは、須恵器・土師器が散乱した状態で出土している。その出土状況から最終埋葬に伴う供献土器群と考えられる。この点から、区画は、埋葬施設としての機能ではなく、副葬品を埋納する空間として認識できる。一方、細谷4号墳では、内法全長1.2m・内法幅0.6m・高0.5mの区画から金環1点と管玉6点が出土している。これらの出土遺物は、区画自体が埋葬の空間として利用されたことを示している。しかし、下西代2号墳のように大規模な改築ではなく、同じ古墳群を形成する細谷1号墳でもこのような施設が確認されていることから、当該古墳群に共通に見られる伝統的な墓制と考えておきたい。

(2) 玄門部の改築

玄門部を改築する例は、現時点ではのほりお古墳のみである。同古墳の玄門部には角柱状の礫を両側壁と床に配しており、柱石と框石を想起すべき構造である。これは、単に閉塞を目的に構築した施設ではなく、意図的に玄門部を狭小化した可能性も指摘できる。本古墳では、追葬された時期を正確に把握できないが、仮に、TK217併行期以降の副葬品が激減する時期に改築されたとすれば、明確な祖型を提示できないものの、石棺式石室ないし石槨の影響も否定できない。

(3) 羨道部の改築

上野2号墳は、『報告』によれば、築造当初、直径10mの円墳として築造されたが、7世紀前半に列石が2段にめぐる方墳に改築されたとしている。羨道部の改築は、主に羨道部を継ぎ足すことが一般的であるが、本古墳の場合は、墳丘改築に伴う石室の改築であり、特異である。

4. 過渡的要素としての改築

以上のように横穴式石室の追葬段階での改築は、玄室・玄門・羨道の各所に及ぶことが、わずかな事例ではあるが把握できた。玄室の改築は、石室自体の狭小化を目的としており、換言すれば、全国的に見られる横穴式石室の小型化と何らかの関連が想定できる。元来、畿内中心地域では、築造当初から計画的に小型の横穴式石室が構築された。しかし、中丹地域を含めた畿内周辺地域では、小型の横穴式石室の築造が一般的には広く採用されず、それにかわって追葬段階に玄室を中心に改築を行ったと推測できる。その最大の要因は、畿内中心地域のように、政治的な変動を直接的に受ける環境になかったことがあげられる。が、何よりも、厳格な中央集権的な体制は確立しておらず、地域色を温存しながらのゆるやかな規制の中で、造墓活動が行われたことを

示唆している。畿内周辺地域の造墓集団は、既存の横穴式石室を極端な狭小化を目的に改築するが、そのことこそが、小型の横穴式石室の築造に匹敵する行為であり、新たな意識の変革を表出しているのである。全国的に見られる横穴式石室の小型化の背景には、何らかの政治的な要因が機能した結果である^(注12)。

後期群集墳の横穴式石室は、玄室内に副葬品を埋納するスペースを確保することが一般的であるが、小型化を意図して築造された横穴式石室は、遺骸の埋葬空間としての機能が優先され、副葬品を埋納することは、当初から考慮されなかったと考えられる。また、そこには薄葬の傾向が徐々に浸透して行く過程を見ることができる。

一般的に後期群集墳は、追葬を前提する空間を有していることから家族墓的色彩が強いと解釈され、反面、小型の横穴式石室は、被葬者個人の埋葬を前提としていると考えられている。この家族墓的な墳墓の築造から単葬墓への移り変わりの延長線上に、いわゆる石棺式石室や横口式石槨の盛行がある。

これらの観点から当該地の改築された古墳を見た場合、小型の横穴式石室の築造には至らないものの、改築による玄室の極端な狭小化こそが、単葬墓への移り変わりを反映していると考えられる。なお、現時点において、明らかに小型の横穴式石室が確認されているのは、先述した福知山市下山古墳群のみである。

以上のように、改築による横穴式石室の極端な狭小化を単葬(個人)墓の成立、すなわち、氏族の同盟による支配体制からその後に到来する律令的な支配体制への過渡期と捉えた場合、その後の周辺に所在する終末期古墳の存在が当該地域の独自性を考える場合、貴重な根拠となってくる。

一般的に終末期古墳は、前方後円墳が凡日本的に消滅し、古墳すら築造されなくなるまでの間に築造される古墳であり、前方後円墳体制の崩壊を意味している。そこには、政治的な変動が背景にある。また、7世紀中葉の薄葬令が実施された後に横口式石槨墳が出現すると考えられている。が、終末期古墳の埋葬主体部として横口式石槨が採用されるのは河内や大和といった畿内中心部であり、周辺地域では、石槨の影響により、小型化が進んでいることがわかる。その観点で山尾古墳を見た場合、7世紀後半に築造された方墳であり、前庭部に列石がめぐる終末期古墳と認識できる。本古墳の出現の契機は、さらなる検討を要するが、畿内周辺地域への中央の政治的な変動の伝播を現わしている。畿内で見られる横口式石槨は、律令的な支配体制の強化と密接な関連があり、個別の人身支配の再編として捉えることが可能であるが、山尾古墳は、典型例である。

一方、下山1号墳は、群集墳内に築造された方墳であるが、古墳が築造された丘陵裾部には奈良時代の創建である和久寺跡^(注13)が所在している。終末期古墳と古代寺院の関連について指摘されて久しいが、下山1号墳と和久寺跡が所在する事実は、その関連で把握できるのであり、今後、個別の人身支配の再編とともに、寺院造営と在地首長との他面的背景をもって新たな石室築造を行ったと推定できよう。

改築された横穴式石室の存在は、まさに、古代における国家の地域支配体制の過渡期を示唆するものであり、自ずと「大王」から「天皇」への変遷をも物語るものとして注目すべきであろう。

なお、本稿は小池が稿を草し、松井がこれを補記した。

本稿は、平成4・5年度に実施した共同研究「京都府における後期古墳の総合的研究」の成果の一部を成文化したものである。また、今までの研究成果の一部を、既刊の『京都府埋蔵文化財情報』に掲載した。

(まつい・ただはる=当センター調査第1課資料係主任調査員)

(こいけ・ひろし=当センター調査第2課調査第2係調査員)

- 注1 奈良県橿原市に所在する見瀬丸山古墳の羨道部が、改築時に付け加えられた可能性が指摘されている(陵墓調査室「畝傍陵墓参考地石室内現況調査報告」(『書陵部紀要』第45号) 1994)。
- 注2 河野一隆「上野古墳群・滝谷遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第66冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995
- 注3 岸岡貴英「神宮谷古墳群発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第56冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1994
- 注4 小池 寛「細谷古墳群発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第49冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1992
- 注5 森下 衛・森 正「府営農業基盤整備事業関係遺跡平成4年度発掘調査概要 細谷古墳群」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1993)』 京都府教育委員会) 1993
- 注6 崎山正人「下山古墳群Ⅲ」(『福知山市文化財調査報告書』第25集 福知山市教育委員会) 1994
- 注7 注6と同じ
- 注8 現在、下山古墳群の報告書は、福知山市教育委員会から3冊刊行されている。本共同研究の一環として現地見学を実施した際、崎山正人氏に御教示を受けた。
- 注9 人魯 亨「のほりお古墳発掘調査概報」(『京都府京北町埋蔵文化財発掘調査報告書』第3集 京都府京北町教育委員会) 1992
- 注10 野々口陽子・野島 永「京都縦貫自動車道関係遺跡平成6年度発掘調査概要 (1)山尾古墳」(『京都府遺跡調査概報』第67冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995
- 注11 加納敬二・永田宗秀・小檜山一良「南春日町遺跡第20・21次調査 第20次調査(下西代古墳群)」(『平成2年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 (財)京都市埋蔵文化財研究所) 1994
- 注12 網干善教「終末期古墳の諸問題」(『シンポジウム青銅器の生産、終末期古墳の諸問題』 日本考古学協会編) 1989
- 注13 大槻眞純「和久寺跡第2次発掘調査概報」(『福知山市文化財調査報告書』第6集 福知山市教育委員会) 1984

謝辞 本稿を作成するにあたり以下の方々から有益なご教示を得た。記して感謝の意を表したい(順不同・敬称略)。

高橋美久二、竹谷俊夫、土生田純之、崎山正人、人魯 亨、津々池惣一、野島 永、乾 哲也、河野一隆、日野 宏、森下 衛、峰 巍、白石耕治、森 正、岸岡貴英、駒井正明、野々口陽子、伊賀高弘、近藤義行、吉村正親、小泉裕司

平成8年度発掘調査略報

5. 松ヶ崎遺跡

所在地 竹野郡網野町大字木津小字松ヶ崎

調査期間 平成8年5月8日～同年8月9日

調査面積 約280m²

はじめに 今回の調査は、国道178号丹後リゾート等関連道路改良工事に先立ち、京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。

松ヶ崎遺跡は、浜詰海岸に流れ込む木津川の南側にある沖積地に位置している。この遺跡は、過去3度の調査が実施され、沼地部分が確認されている。そこからは、弥生時代前期の土器や木材などが出土している。

調査概要 今回、調査を実施するにあたり、まず道路幅拡張部分となる調査対象区内に試掘トレンチを設定し、これをもとに拡張を行い、4か所の調査トレンチを設定した。

今回の調査では、主に第3・4トレンチで、遺構・遺物が確認できた。各トレンチの状況は、次のとおりである。

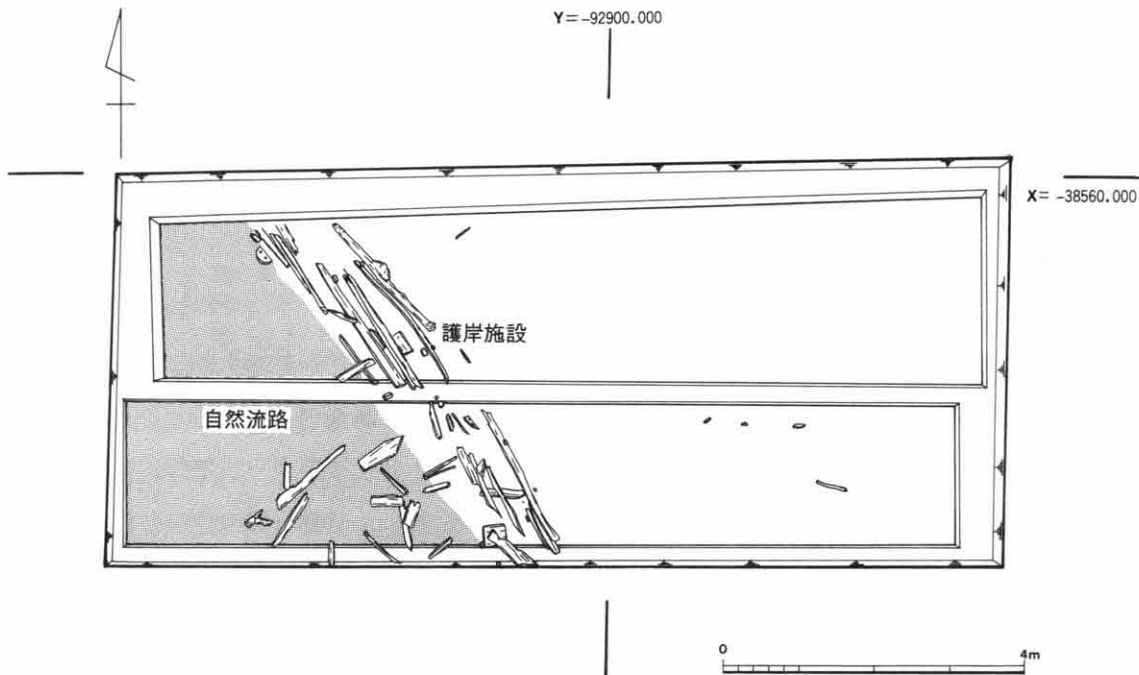
第1・2トレンチ 少量の弥生土器片は出土したが、堆積土が泥状であったため、遺構の確認はできなかった。過去に検出された沼地と同じであると思われる。

第3トレンチ 地表面から約0.8mの深さで、奈良時代後期の遺物包含層を検出した。この層



第1図 調査地位置図(1/25,000)

からは、須恵器の杯や祭祀などに用いられる人形ひとがたの上半身部分が1点出土した。さらに、奈良時代後期の遺物包含層の下層で、弥生時代前期～中期の遺物を含む包含層と、トレンチの西側で同時期の南側から流れてくる自然流路を検出した。その自然流路の東側に、細長い板と杭などの加工された木材で護岸したと思われる施設を検出した。護岸施設は、流れによって破壊されて、木材が周囲に散乱しているが、護岸となる板列と杭は南北方向に3列確認できた。また、護岸施設の東側は、沼地ではなく粘土質の堆積で、



第2図 第3トレンチ遺構図(1/100)

第1・2トレンチとは異なっていた。この層からは、弥生時代前期～中期の弥生土器と護岸に使われたと思われる木材・杭・田下駄などの木製品や、石鏃などの石器類、果実の種子などが出土した。

第4トレンチ 地表面から約0.7mの深さで、弥生時代前期～中期の大量の遺物を含む包含層を確認した。遺物は、西側に集中して出土した。そのやや上層の奈良時代後期と思われる層から農具と思われる大型の木製品が出土した。

また、第3トレンチで検出した自然流路の西側の岸部分は、このトレンチ内では検出することはできなかった。

まとめ 今回の調査の成果として、調査地の東側で沼地を確認し、遺跡の東側の広がりを確認できた。また、西側部分では、弥生時代前期～中期の自然流路とそれに伴う護岸施設を検出した。護岸した板列と杭は、南北方向に3列確認した。ほとんどの遺物は、西側から集中して出土しており、この遺跡の居住区は西側に存在すると考えられる。さらに、今回の調査で、奈良時代後期の人形や土器が出土したことから、この周辺に奈良時代の遺跡が存在する可能性がでてきたことも重要な成果である。

今回の調査でも、住居などの生活をうかがえる遺構は検出できなかったが、今後、さらにこの周辺での調査によって、松ヶ崎遺跡の広がりや別の時期の遺構が確認されることに期待したい。

(村田和弘)

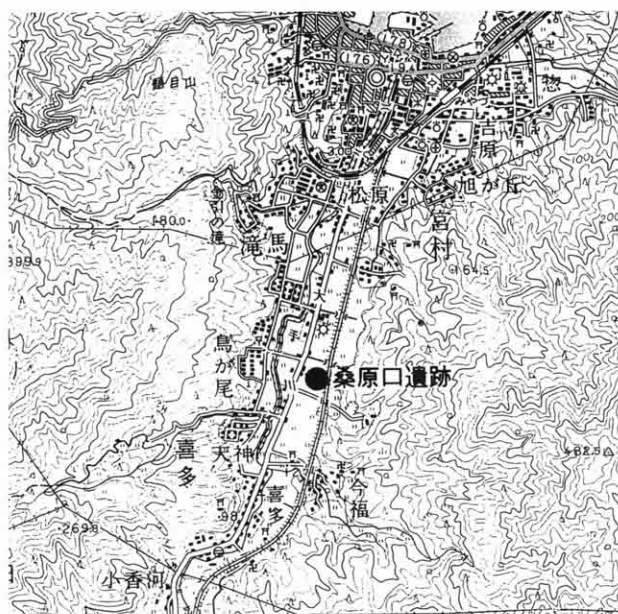
6. 桑原口遺跡第3次

所在地 宮津市今福小字桑原口
 調査期間 平成8年4月25日～同年9月25日
 調査面積 約450m²

はじめに 桑原口遺跡は、宮津谷の東岸の扇状地上に位置する集落遺跡である。桑原口遺跡は、1969(昭和44)年の宮守線建設(現北近畿タンゴ鉄道)に先立つ分布調査で遺跡であることが確認され、翌1970(昭和45)年の京都府教育委員会の発掘調査で、弥生時代後期から古墳時代前期を中心とする集落遺跡であることが明らかになった。今回の発掘調査は、京都縦貫道建設に伴い、京都府道路公社から依頼を受けて、遺跡の内容と性格を解明するとともに、記録保存することを目的として実施した。

調査概要 桑原口遺跡は、昨年度、線路から東側の地区(B地区)を調査し、あわせて、今年度調査地区(A地区)の試掘調査を行った。昨年度に実施したB地区の調査では、弥生時代末から古墳時代前期の竪穴式住居跡4基などが見つかっている。A地区は、試掘の結果、緩傾斜地に立地し、青灰色砂層のベース上に複雑な土層の堆積があることがわかった。今回の調査は、試掘成果に基づいて、まず、表土を重機で除去した後、4mごとにグリッドを設定し、人力掘削をした。その後、精査し遺構の検出につとめた。

調査の結果、一部で、柱穴、土坑などの遺構を検出したが、全体として遺構の分布は希薄であった。SX08と名付けた土器溜まりでは、弥生時代後期の多量の土器を検出し、調査地区西端で



第1図 調査地位置図(1/50,000)

検出した溝2(SD02)からも数多くの土器が良好な状態で出土するなど、多くの成果を収めることができた。主な成果は、次のとおりである。

土器溜まり(SX08) 調査地の東端で検出した土器溜まりである。東西5m・南北15m前後の広い範囲にわたって土器が分布していた。完形に復原できる資料は少ないが、弥生時代後期のさまざまな器種と形態の土器や銅鏃が出土した。

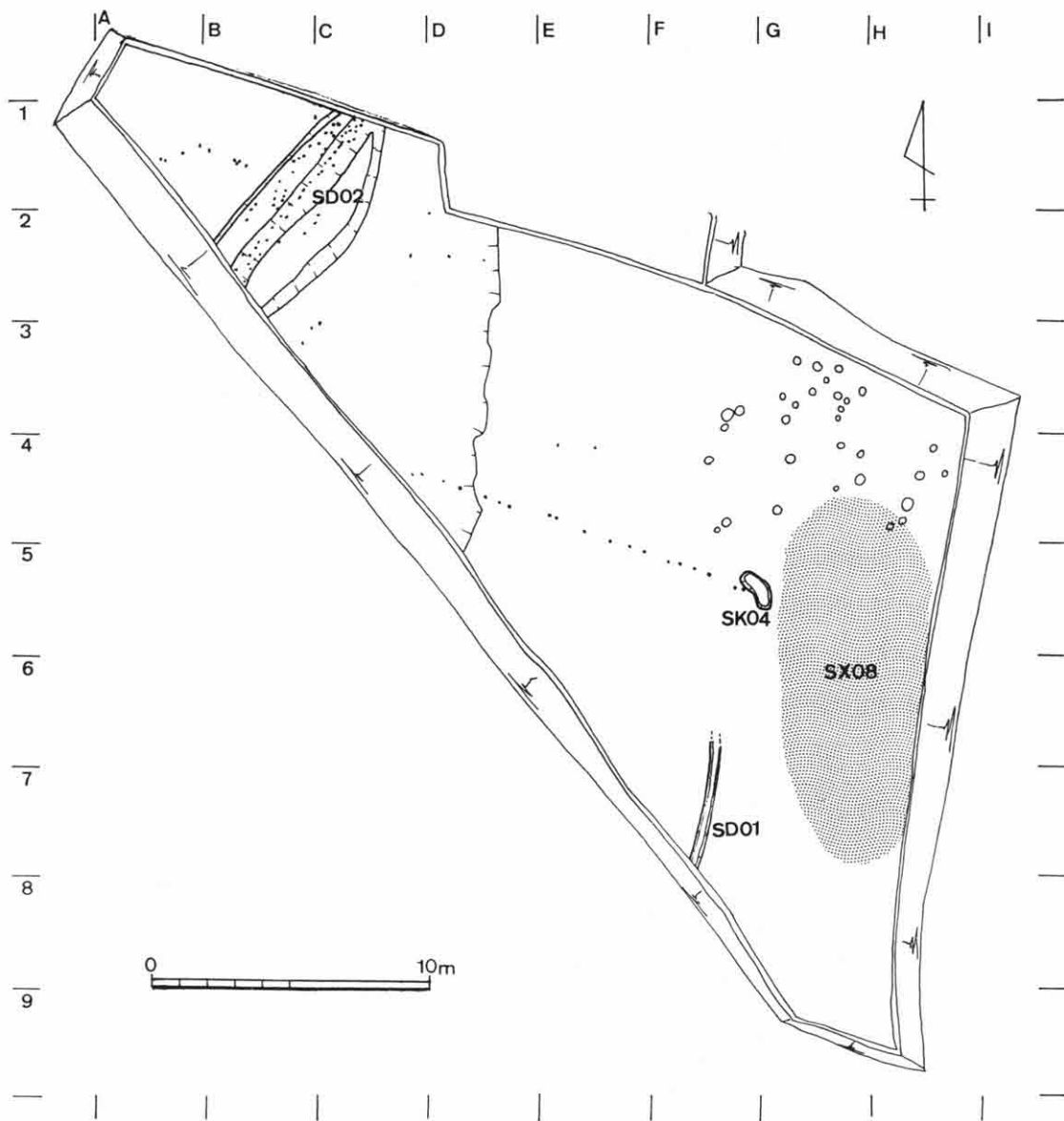
溝2(SD02) 幅約1.5mで、長さ約8m分を検出した。弥生時代後期の溝である。近代の溝と重なっているため、検

出できたのは部分的ではあったが、下層から完形品を含む数多くの土器が出土した。土器は、黄色砂土とともに溝に流れ込んだもののようなものである。

まとめ A地区では、土器溜まりと溝を検出し、多量の土器が出土した。A地区は、桑原口遺跡の南西地点にあたり、集落本体からはやや離れた地点に位置することがわかった。これによって、住居跡は北近畿タンゴ鉄道を西限とし、これよりも東側に集落の中心が形成されていたことがほぼ確定的となった。

A地区は集落の下方に位置し、水路が設けられたり土器が廃棄されたりする湿地化した環境であったことがわかった。この周辺には、水田などの耕作地が広がっていたと予想される。

廃棄された土器のなかには、地元で作られた土器に混じって、大阪の生駒山西麓産とみられるものや、石川県や鳥取県方面から運ばれたとみられるものがあり、弥生時代後期の桑原口遺跡の人々が広く周辺地域と交流を行っていたようすが明らかとなった。 (田代 弘)



第2図 桑原口遺跡遺構配置図

7. 今福北城跡

所在地 宮津市今福
 調査期間 平成8年7月3日～同年9月25日
 調査面積 約160m²

はじめに 当調査研究センターでは、平成7・8年度の2か年にわたり、京都府道路公社の依頼により、宮津市内において京都縦貫道路工事に伴う発掘調査を実施した。経費は、京都府が全額負担した。

本年度は、盛林寺裏山古墳・今福北城跡・桑原口遺跡の3件の発掘調査を実施した。ここでは、今福北城跡の調査成果の概要を報告する。

調査概要 今福北城跡と呼称された調査地点は、大手川流域の狭長な沖積地の東岸の丘陵上に位置し、大手川中流域に対する展望に優れている。

今回の調査地点は、調査に先立って京都府教育委員会が行った路線内の分布調査で確認されたものである。分布調査時に城跡と断定することはできなかったものの、曲輪と見られる階段状の地形が尾根稜線上に点在することや立地などから、城跡である可能性が指摘され、試掘調査によって遺構の有無を確認する必要があると判断された。

調査は、尾根稜線上に認められる平坦面が城に関する遺構であるかどうかを確かめるために、各平坦面に試掘トレンチを設けて当たった。計5か所のトレンチを設け、人力で掘削を行った。掘削の結果、いずれも約20cmの表土の直下で地山である花崗岩風化土壌を検出した。遺構の有無を確認するために地山面で精査したが、いずれのトレンチでも遺構・遺物は確認できなかった。表土中にはコンクリート破片や肥料袋の残片などが含まれており、平坦地が近代に畑作地として一時利用されていたことが確認されたのみであった。遺物が出土していないので、階段状の平坦地がいつ造成されたかはわからない。掘削の結果からは、今回の調査地点を城跡とする結論には至っていない。



調査地位置図(1/25,000)

おわりに 今回の調査では、対象地を城跡とする証拠は得られなかった。しかし、丘陵の先端方向にはテラス状の加工面や古墳状隆起が散在している。将来、丘陵先端側でも開発が予定されており、こうした地形的特徴を有する部分については、今回同様、試掘を行って遺構の有無を確認する必要がある。

(田代 弘)

8. 盛林寺裏山古墳

所在地 宮津市字今福小字梶谷
 調査期間 平成8年6月19日～同年7月2日
 調査面積 約50m²

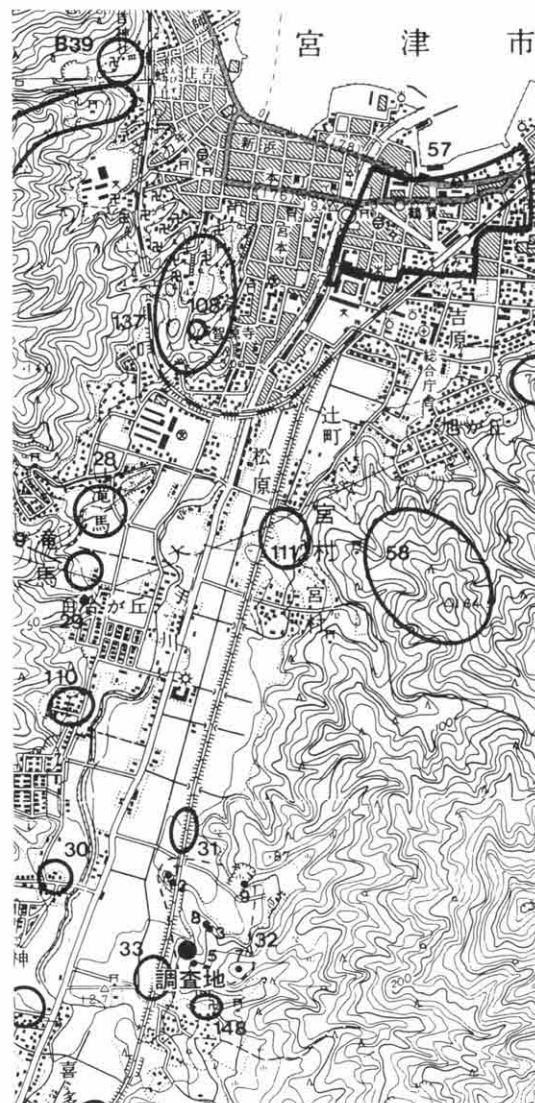
はじめに 盛林寺裏山古墳の発掘調査は、京都府道路公社が施工する京都縦貫自動車道建設に伴う事前調査として、同局の依頼を受けて実施した。平成8年度に同建設に伴い発掘調査を実施した遺跡としては、桑原口遺跡・今福北城跡と当該遺跡の3遺跡である。中でも、桑原口遺跡では、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての多量の土器を含む流路状の遺構を検出しており、今まで実施された同遺跡の縁辺部の状況を把握できた。

調査概要 盛林寺裏山古墳は、京都縦貫自動車道建設に伴う分布調査によって古墳状隆起として認識された遺跡であり、築造された年代や群構成などについては不明な部分が多く、実態を把握できる調査として注目された。

当該遺跡の発掘調査は、基本的に古墳状隆起と認定できる部分に合計5か所のトレンチを設定し実施した。まず、開発対象地内の丘陵部で最も高所に位置する古墳状隆起と、その地点から北方にのびる尾根上に位置する古墳状隆起に各々トレンチを設定し、次いで、最高所から西方にのびる尾根の先端部分と鞍部に各々トレンチを設定した。

調査の結果、遺構・遺物は検出できず、古墳状に隆起した自然地形であることが判明した。この地域周辺では、標高50～70mに多くの古墳が築造されており、当該地は、標高100mを測ることから、古墳を築造する条件には適していなかったと考えられる。今後、古墳の分布を考える上で、一定の基準を明確にできた意義は大きい。

(小池 寛)



調査地位置図(1/25,000)

9. 興戸古墳

所在地 綴喜郡田辺町大字田辺小字丸山
調査期間 平成8年7月5日～同年7月12日
調査面積 約25m²

はじめに この調査は、府道八幡木津線(通称山手幹線道路)の建設工事に伴い、京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。今年度のこの事業による田辺町内の調査対象地は、周知の遺跡として国道304号線南側の田辺城跡と興戸古墳群が含まれる。

今回、試掘調査を実施したものは、興戸古墳群の中の10号墳である。前方後円墳とされている1号墳がある丘陵から、谷筋をへだてた西方の南北に細長い丘陵・尾根筋の北端付近に所在する。この古墳の現状は、2か所の高まりがみとめられ、前方後円墳に似た形状をしている。ちなみに、この周辺はすべて竹林で、東側はよく手入れされている。

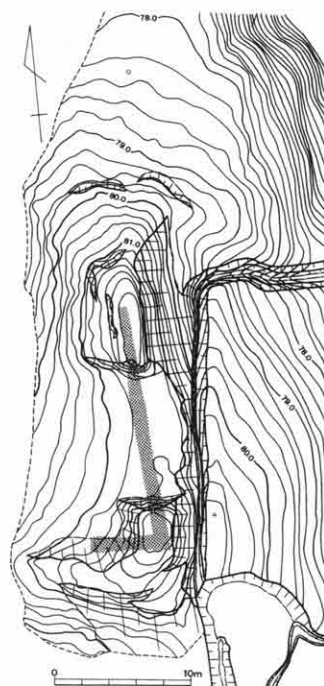
調査概要 調査は、2つの高まりを結んだ直線と、直角に折れる逆「L」字形の試掘トレンチを設定して人力で掘削した。その結果、表面の腐植土を取り除くと粘土層と砂礫層が堆積していた。さらに掘削すると、やや傾斜する互層となり、いわゆる大阪層群と推定されるものと判断した。

地形測量図では一見前方後円墳に似た形状に残存しているが、2つの高まりの中央部が竹林造成の土取りで削られ、現状のようになったと推定される。

(石尾政信)



第1図 調査地位置図(1/25,000)



第2図 地形測量図

随 想

十九年目の西安再見の記

川 上 貢

19年前の1977年8月に日中建築技術交流会主催の友好訪中の旅に参加して北京、大同、太原を経由して西安を訪れた。そのときは西安空港に正午前につき、午後市内を見学、2日目は西安西郊の乾陵、永泰公主墓、3日目は市内の大雁塔、小雁塔そして東郊の華清池を訪ねたあと夜の汽車で洛陽へ向かった。正味2日半の西安滞在であった。今回は5月末の週休を利用しての3泊4日の西安のみの小旅行で、前後の2日は京都・西安間の往復にかかり、市内外の見学に2日間をあてる日程であった。中国国際旅行社西安によって用意されている一定の日程にもとづいた遺跡、名所めぐりである。予定に入っていなかったがガイドブックにも紹介されている市内の清真寺(イスラーム寺院)の見学を希望したが、バスの駐車場が寺付近にないとのことで、実現しなかったのは残念であった。

西安市内の近代化 さて、名古屋から西安へ中国西北航空の直行便があり、途中入国手続きのため上海で降りて乗り直すため、名古屋空港から西安まで5時間半かかる。西安空港は以前は市の西郊に位置していたが、最近に新国際空港が西安市の隣の咸陽市にできており、専用の高速道路が空港と西安市のあいだをバスで1時間でむすんでいる。空港を出て高速道路を東へ、漢の景帝(B.C. 141死)の陽陵と皇后陵の二陵がならびたっている付近で南へ折れ、渭水を渡ると西安市の旧城北門まで真っすぐに南下し城内へ入る。

西安市の市域は明代に四周を城壁で囲んで成立した旧市域と近代になって城外に広がった新市域からなる。旧市域の四至のうち南辺と西辺の位置はかつての都長安の皇城のそれを受ついで皇城よりも東西、南北ともにすこしひろげた範囲内に城壁で囲っている。四周の城壁と濠は今もお完全に保存されていて、その上に現代の都市の機能の更新と整備のため、旧城の外回りに接して環状大街が新設され、東部地区の大街に沿った新開地では高層のアパート群が新築されていて、城内の老朽したアパート群とは対照的な景観がみられる。

城内のあちこちでも古い建物をこわして建て替えが進められており、町中に土埃が立ちこめていて、太陽がかすんでみえるのは風土的な黄塵のせいばかりではなさそうである。南の城門外にたつホテルの窓から近くの工事現場がみえ、地表から深く掘り下げられているが、土質が黄土のためか切り立った地肌をそのままにしている。同様なことは市外の畑地で建築用材の煉瓦の材料に黄土を採掘した跡が崖になったまま放置されているのがバスの窓から見られる。

市内の交通はトロリーバスと普通のバスが走り、トラックやバイクに交じって自転車の数の多いのは中国のどこでもみられる光景であろう。以前と違っているのはタクシーが目立って増えたことである。このタクシーで変わっているのは、運転席と脇の席のあいだに衝立て様の仕切りがつくられていることである。タクシーは乗り合い客を多く乗せるため、運転者の脇席も補助席ではなくて客席として固定した使い方がされているためである。

旧城の南門と西門 城内の中心に近い位置に明代の鐘楼が高い台基上に建ち上がっていて、市中のどこからも見えるシンボルになっている。鐘楼の西に鼓楼が所在していて、両者をつないで広場をつくる工事が進められていて、鐘楼のまわりのロータリーの景観に変化がみられる。とくに鐘楼の南の通りは大きく広げられ、新しいビルが目につく。最近のビルは派手なデザインが採用されていて、特に数が増えた高層ホテルでは外観を目立たせて競い合っている。南門に近いところに所在するANA系の合弁ホテルは数年前に創業していて、新築の建築はRC造り、9階建て、伝統的な木造様式を外観にとりいれている。その9階の室の窓から南城門が目の下に見え全体の構成がよくわかる。

四面に所在する主な城門のうち南門の構えは他の三門よりも整っており、南門自体の城壁に入母屋造、三重檐の城楼が聳え建ち、その外方に中庭を囲んでコの字形に城壁を築いた内瓮城をそなえる。さらにその南外側に小規模の箭楼をそなえた外瓮城をかまえ、その前面の濠がほられていて跳ね橋が架かっている。つまり、ここでは南門に付属して内外二重につくられた瓮城や濠がつくられていて、防御のための厳重なそなえの形式をよく残している。

城門のうち西門だけが公開されていて城壁にのぼり城楼や箭楼に入ることができる。この西門では瓮城は一重で城楼に対峙して規模の大きい箭楼が残されている。城楼は二階建て、桁行7間、



写真1 西安旧城南門の城楼



写真2 西門の瓮城と箭楼

入母屋造り、三重檐で、そのうちの二重目の檐は上階の裳階の屋根である。箭楼も構造形式は城楼と同じであるが、桁行11間、城楼に面した東側のみ三重檐につくり、他の三面では下階の屋根と上階の裳階屋根が無くして主屋の軒まで煉瓦積みの壁面を露わに見せ4層に積み上げた矢窓が各層に12ヶづつ開けるだけのシンプルな立面につくる。この箭楼は昔は警護の兵士の宿舎に使われていたが、現在は二階を観光客向きの売店に使っている。なお、外に向かって開いた窓は攻め寄せた敵に矢を射るためのもので日本で言う矢狭間に該当し、箭楼の名称もここに由来している。この箭楼は地上高さ12mの城壁のうえにさらに4階建てのビルを立ちあげているので巨大な衝壁を立てたようで、強い威圧感を生んでいる。

西安城の城壁は濠に直接してなくて濠との間に

幅の広い犬走りの空地が設けられている。これらの城壁と犬走りを保存しあわせて公園として活用するための整備工事がすすめられている。

陝西歴史博物館 城内の南門に近くに有名な西安碑林があり、かつての文廟を活用して前回に見学したときは陝西省博物館と一体になっていた。陝西歴史博物館は西安碑林とは全く別の新設博物館であり、所在地は碑林よりも南へ遠く離れた城外の小寨東路



写真3 陝西歴史博物館

(外環状路)に面したところで、大雁塔が近くに所在している。この陝西歴史博物館は早くに国家の重点建設項目の一つに挙げられていて、1986年より新築工事に着手し、1991年6月に竣工、開館されている。新博物館の規模は一日の予想入場観客を4,000人と見込み設計されていて、建築面積は45,800㎡で中国でも有数の大規模博物館である。

主館を中心に左右に別館、背面に管理棟と文化財実験所を配置する。主館はRC造り3階建て、屋根寄棟造り、瓦葺き、桁行9間の主屋の周囲に1間通り柱間吹き放しの裳階をめぐらした古代殿堂風の外観をもち、内部は主展示室と収蔵室からなる。主館の左右に2階建ての南北棟別館(特別展示室)が南へのび、その先端を別棟の宝形造りの2階楼とし東を貴賓室、講堂、西を商店、食堂にあてる。そして主館正面の前庭は東西楼で左右を囲み、残る南面中央に門屋を置き廊で東西の楼とむすぶ。ここにみる建築配置は中国の伝統的手法を踏襲していて南北の主軸に対して左右対称形式を隅々まで徹底し、さらに四合院形式の基本を組合せている。設計は西安の代表的建築家張錦秋女史である。

なお、常設展示は先史時代から明、清時代までの陝西の地の永い歴史のなかで創られた豊かな出土遺物によって展示され、とくに明、清代以前の時代に重点を置いた展示になっている。日本の博物館の展示の大半が宗教美術の作品で占められているのと大きく違っている。

大雁塔 唐代の古塔大雁塔のある慈恩寺は唐長安京においては左街の南寄り晋昌坊に所在していた。現状は城外から遠く市域の南端になるところで、今は門前に家屋が立ち並んでいるが、以前は寺の門前からすぐ南は畑地がひろがっていた。かつてはこの地点まで京域が伸びていたことからその規模の大を推測できる。

寺の表門を入ると正面に大雄宝殿、法堂が前後にならび、その奥に一段と高く大雁塔が聳え立っているのがみえる。この塔は煉瓦造からなり、はじめは5層、8世紀初めに10層に高められ、その後下7層に変えられて、現状は高さ64m、初層は辺長25mで、四方に門戸をそなえ、そのうち西門のまぐさ上の石壁に線彫りされた仏堂図が著名である。前面に鉄柵の扉が装置されていて間近にみるのがむつかしくなり、また注意しないと見落としてしまう。唐代には科挙に合格した人たちが合格記念にこの塔に昇るのが慣例になってい



写真4 大雁塔

たという。最上階まで木造の階段で各層へ昇降でき、各層とも中央に階段室があり十字に廊が交差していて、その先端の開口だけが採光、換気の口になり眺望の窓になる。

大雁塔とならんで同じく唐代の古塔である小雁塔は有名であるが、家並み越しに塔の上部をバスの窓からみるだけに終わった。現在は廃寺になり旧境内は公園になっているということで、清真寺と同様に案内しにくい事情があるのだろう。

青竜寺遺址 日本の真言宗開祖空海が唐に留学し、真言の奥儀を長安京の青竜寺に住む恵果から学んだことはよく知られている。この青竜寺は大雁塔から東北にあたる京内左街東端南中程の新昌坊に所在していたが、北宋以後に荒廃したためその詳細は不明になっていた。寺の旧境内は城外の東方南郊に位置する鉄炉廟村集落の北崖上の畑地であると推定され、1973年に行なわれた発掘調査によって旧寺域の西に寄ったところに、南北の軸線上に南から三門跡、塔跡、北大殿跡そしてこれらを取り巻く回廊跡、塔跡の東方に殿堂跡(T4)そして北門跡など7か所の遺跡が確認された。

この青竜寺遺跡は西安市が管理しているがあまり重視されていなかった。日中の文化交流における空海の業績が評価され、記念するための事業が日中両国の協力で実施されることになり、1980年に第1期の事業として青竜寺旧境内の東寄りに空海記念塔が日本の四国4県の醸金をもとに日本人建築家が設計して建設され、あわせてその南に接待所・陳列所の殿と回廊が上出の張錦秋氏の設計になり、そして前記の遺跡群が出土した西地区と新築の記念施設の建物群とのあいだの空地に記念庭園がつけられた。また、つぎの第2期の工事ではT4遺跡の北に、T4遺跡の下層仏堂に准じた規模の恵果・空海記念堂が建設されている。この建物は建築史家揚鴻勳氏の復元案にもとづいて堂内が内堂と外堂に境の間仕切りで区分され、内堂の東西に向かい合う壁をもつところの日本の真言宗寺院の灌頂堂を参考にした平面につくられるが、土間敷きで立面は隋、唐代の仏堂の様式に倣ったものに設計されている。この青竜寺遺跡は長安旧京内でも標高が比較的に高いところに位置しているため古くから見晴らしのよい名所として知られていて、今日でも北の近くに西安市街がひろがり、北東方向に秦始皇陵の輪郭を遠望できる。

華清池 西安市の東に隣接した臨潼県に華清池が所在していて古く驪山の北山麓に開かれた湯治場として知られている。唐代には皇帝の入湯滞在のための行宮華清宮が設けられ、とくに末期には玄宗皇帝が楊貴妃をともなって毎年訪れ入湯を楽しんだことでも有名である。



写真5 華清池海棠湯跡覆屋
(楊貴妃のための浴場)

1956年に唐時代の華清宮に倣って池畔に殿亭の建物群が造立され遊客の目を楽しませていた。先年この地を訪ねたときの状況と比較すると観光客の数が多くなっていて、門前のバス駐車場付近は土産物屋の屋台があり、品物を手にした売人が群がって喧騒な光景を呈していた。場内も遊覧地らしい賑やかさで、驪山を背景にして池畔に立ち並ぶ殿亭や樹々の群れに変化はないが、驪山登山のためのリフトが架設されていてロマ

ンの夢がこわされるような味気無い風景に変わっていた。

池の東南の山麓に温泉源があり温泉が湧き出ている、その北にある楊貴妃亭を1982年に修理したときに湯池遺跡が出土したため第1期の発掘調査がおこなわれた。つづいて翌年の8月から86年の6月にかけて第2期の調査が行なわれ、温泉源から北西へ45mのT1遺跡を中心とする半径30mの範囲内に7か所の湯池遺跡が出土していて、それぞれ浴槽のある浴殿と給湯、排水の設備からなることが明かにされている。それらは皇帝のための御湯である蓮華湯、楊貴妃のための芙蓉湯(海棠湯)、これらに付随していた太子湯や廷臣たちの尚食湯などに該当するものと推定されている。このあたりは以前は入湯客のための浴場施設があったところと思われるが、今はこれらの各湯池遺跡は発掘で出土した状態をそのままに保存するために、それぞれの規模に照応して厳密な復元とまではいかないが唐代の風に倣った覆屋建物群がたてられて以前と大きく変貌している。なお、入湯施設は入口近くに所在し新しい建物に建て替えられていた。

秦始皇陵兵馬俑坑博物館 華清池から東へ5km、街道の南に沿って秦始皇帝の陵墓が所在している。高さ47m、辺長500m前後のほぼ方形で角錐状の丘につくる。今は公開されていて見学者で賑わっている。この陵墓から1.5km東の農村の畑地で1974年に農民が井戸を掘ったところ後に著名になった第1号秦兵馬俑坑が発見された。その後つづいて第1号の北側東端で第2号、同じく北側西端で第3号の兵馬俑坑の存在が確認された。規模は第1号が南北長230m、東西の広さが62m、深さ5m、第2号は鍵形の平面で南北長96m、東西広さ84m、深さ5m、第3号は南北24.57m、東西広さ28.8m、深さ5.4mで、いずれも東面していて、多数の陶製の兵士と四頭立ての木製戦車からなる軍団の列を殉葬していた。

19年前には既にこの秦兵馬俑坑遺跡の発掘が進んでいたようだが、見学できなかったのはいまだ調査中で公開する用意が整っていなかったのだろう。現在は各号の兵馬俑坑が博物館として公開されており、各遺跡毎に覆屋を架けて保護した上で、未発掘部の発掘が進められ、同時に見学者が出土状況を見るため場内を一巡できる見学通路が用意されている。第1号の覆屋は巨大な鉄骨造アーチ形トラスを架けた格納庫風の建物であるが、第2、第3号の覆屋では外観や内装のデザインそして設備が良くなり、屋内の巡回通路を広くとり、陳列ケースを間配って主な武士や馬の俑像を陳列していて解りやすくなっている。

また、同じ敷地内の特別陳列室に始皇陵の陵園内から出土した二輛の銅製四頭立て馬車の現物が展示されていて、その精巧なつくりには驚かされる。

見学したのが日曜日であったせいか場内は多くの団体が入って雑踏しており、これらの見学者を対象とする売店が場内の一角に設けられていて、兵士や馬の俑像をいろいろな大きさに縮小した模造品や写真図録が売られている。場内では写真の撮影は禁止されていて専属の写真屋が記念写真の求めに応じていた。博物館の外では土産物や飲み物を売る屋台が多数出ており、



写真6 秦始皇陵第2号兵馬俑坑博物館



写真7 唐高宗乾陵と参道

小屋掛けの食堂や狐の毛皮を陳列した売店もみうけられ、出店で賑わう日本の縁日風景に似ている。

乾陵 西安市から西へ80kmの距離にある乾県までくると今までの平地の田園風景に替わって北の方に低い山の連なりがみえてくる。公路から乾陵への脇道を入ると登りの坂道になり左右に集落があり、ヤオトンと呼んでいる穴居住居がみられる。この地域の平野部の農村では古い形式の版築の土塀が残っており、門と

土塀の閉鎖的な表構えが連続して集落の家並みをつくっている。農村でも公道に面してたつ新築家屋では煉瓦造の2階建て、間口全体を開口とし建具が装置され店舗にも使える構えのものが多。バスの走る公道に沿って点在している集落の家並に注意するとガソリンスタンドが町のセンターのような役割を果たしているようで目立ってみえる。また、自動車の修理や部品をあつかう店が多くみうけられ、車に関連した商売が地方の市民の日々の暮らしを活気づけているように思われる。

さて、乾陵は唐の第三代皇帝高宗とその皇后の武則天の合葬墓で、山を利用して陵を営むという唐の帝王の葬制のうちでも乾陵は最も典型例であるといわれている。ひととき目立ってみえる梁山の三峰のうちの北の最も高い峰を陵とし、南の二峰の頂上に闕が築かれている。広大な陵園を画して方形に城壁を築き、墓前に祭享の殿が営まれたがすべて現存していない。殿跡の前方左右に置かれた石獅子の像にはじまり、南方の二峰の間にたっていた道門までの参道の左右に華表、動物や人物の石の彫像そして石碑などのつくる列に当初の偉容を偲ぶことができる。前回のときは参道は木や草が生え幅も狭くなった山道で荒れていたが、現在は華表のたつところから石獅子像までの参道の延長575m余は幅が11mの石で舗装された広く立派な道に改修され、道の両端には側溝と植樹帯がつけられその外に石人や石獣の列のたつ側道が設けられていて、かつての古い参道と比較すれば見違えるほどの大きい変わり様であった。しかし、参道奥の石の獅子像にだけ鉄柵で囲んでいるのは感心しない。

この参道の中にバス駐車場ができていて、参道を歩く距離と時間を半分に短縮できるのはありがたいようだが、華表付近からはじまる参道の全てを知ろうとするものにとっては見残しができて心残りになる。この駐車場の一隅に設けられている厠は有料であるのに屋根のない野天に壁で囲っただけの大小兼用のもので、プライバシーの配慮に欠けたひどいものである。そばを通る素晴らしい参道と比べると雲泥の差といえる。

乾陵の近くには陪葬墓が多く所在していて、そのうちの一つに武則天の孫娘永泰公主の墓があり、1960年より2年間発掘調査がおこなわれ、とくに墓室に安置された石郭に線刻の女人図があり、まわりの壁に描かれた壁画も色鮮やかに残っていたことなど著名である。壁画の原図は保存のために陝西歴史博物館に収蔵されており、模写の図に置き換えられている。この遺跡は前回に見学しているが再び訪ねてみると、管理所の施設が拡張中で古い建物を取り壊し建て替えられ、

乾陵博物館、売店、レストランができていた。前回に撮影した写真と比較すると、墓室へ通じる地下傾斜道の換気のための井戸を覆う形式に変化が見られる。以前は傾斜道の全長にわたり地上に煉瓦造の壁をたち上げ窓を開け、軒高の低い瓦葺き建物でもって換気井戸を覆っていた。現在は傾斜道の上方、全長に地表より少し高い位置に石で舗装し、宝形屋根のある煙抜き風の換気塔を一定間隔に設置している。

西安の西北の城門の外、西へ向かう大路の町の西出口にあたるところにラクダを含む彫像の群が置かれている。西安が遠く漢の武帝の時代にさかのぼる頃から西方のシルクロードへの起点として交通上の要地であったことを記念する彫像群である。この西安の位置は現在も敦煌や楼蘭などの観光名所への中継地になっていて北京や上海とむすんで観光コースが組まれている。これまで見逃していたが旅行社の旅案内の新聞広告に西安の名所が紹介され、今回見て回った名所のすべてが組み込まれていて、今日では日本から多くの人びとが気楽に西安を訪れていることを確認した。

19年ぶりに再会した西安のあちこちを見てまわった印象は以上のとおりであるが、この過ぎ去った年月の重みをあらためて痛感することになった。訪ねたところはすべてが歴史的遺跡であり、それ自体の保存措置のより一層の強化に努められる一方で観光名所としても整備に力を入れられていることがうかがえる。また、市内の外国人専用の友誼商店の他に観光客の集まる遺跡、名所そして博物館にも売店が開かれていて見学記念や土産用の商品が多種多様に用意されており、なかには日本の観光客をあてこんだ物品もみられ、官も民も商売に熱が入っている状況があちこちでみられるのも大きい変わり様である。

遺跡や名所の写真を主にした一般向き図録や絵はがきは種類が少なくどこの売店にも共通してあつまっている。兵馬俑坑博物館の売店で秦代の建築や美術の解説書をみかけたが、ここだけにしか売られいなかったので買いそびれてしまった。西安の地元の出版社から叢書の案内書が1990年に出ていて、目録に16冊をあげているなかで「咸陽訪古」の1冊しかみあたらなかった。

帰宅してから手持ちの資料や図書館で雑誌などを調べなおしてみた。遺跡の発掘調査報告については「文物」誌に関連記事が掲載されていてあらためて読み直したり、「考古」や「建築学報」にも関連記事をみつけることができ、遺跡の整備の状況や新築事情を確認することができた。

(かわかみ・みつぐ=当センター理事)

<参考文献>

陝西歴史博物館	建築学報	1991.9
唐青竜寺遺址発掘簡報	考古	1974.5
青竜寺倣唐建築設計札記 張錦秋	建築学報	1983.5
唐長安青竜寺真言密宗殿堂復原 揚鴻勳	建築学報	1983.7
唐華清宮湯池遺址第一期発掘簡報	文物	1990.5
同 上 第二期発掘簡報	文物	1991.9
臨潼県秦俑試掘第一号簡報	文物	1975.11
秦始皇陵東側第二兵馬俑坑鑽探試掘簡報	文物	1978.5
同 上 第三号兵馬俑坑清理簡報	文物	1979.12
古都西安 王崇人 陝西人民美術出版社		1981.7
咸陽訪古 張旭 陝西人民出版社		1990.7
中国 都市と建築の歴史 張在元編	鹿島出版会	1994.10

府内遺跡紹介

74. 奉安塚古墳

古墳の概要 京都府北部の最大の河川、由良川は丹波山系に降った雨を集めて日本海へと北流する。その中流域に広がる肥沃な綾部・福知山盆地は、北近畿の商業・交通の要衝として発展が著しいが、その郊外に至れば、丹波の山里の風景が展開する。この奉安塚古墳も、緑豊かな高龍寺山東麓に現存し、古墳からは相長川を挟んで私市の沖積地を展望することができる。

この古墳は、1949年4月30日に福知山高校社会部によって発見され、翌5月から発掘が開始された。その経緯は、同校社会部考古学班発行の『奉安塚発掘の記』に詳しいが、それを読むと、放課後・日曜・祝日を使って発掘作業に費やした高校生の情熱が伝わってくる。1949年当時、科学的な調査方法が未熟な中であって、遺構・遺物を記録しながら、慎重に発掘が進められたことは驚くべきことである。同年9月には、京都大学考古学教室の岡崎敬氏が実地指導を行い、その時に「奉安塚」と命名された。その由来は、終戦によって取り壊された小学校の奉安殿の脇に石室用材が露出していたからだという。

この古墳は、奉安殿の建造によって墳丘の大半を失っているが、一辺20m前後の方墳であったと考えられる。内部主体は、南に開口する横穴式石室で、長さ4.2m・幅1.8mを測る。奥壁には基底石を立て、側壁は横目地を通す通有の後期後半の横穴式石室であるが、開口部は調査時点ですでに破壊されていた。したがって、袖の有無は不明だが、無袖式石室の可能性が高い。出土

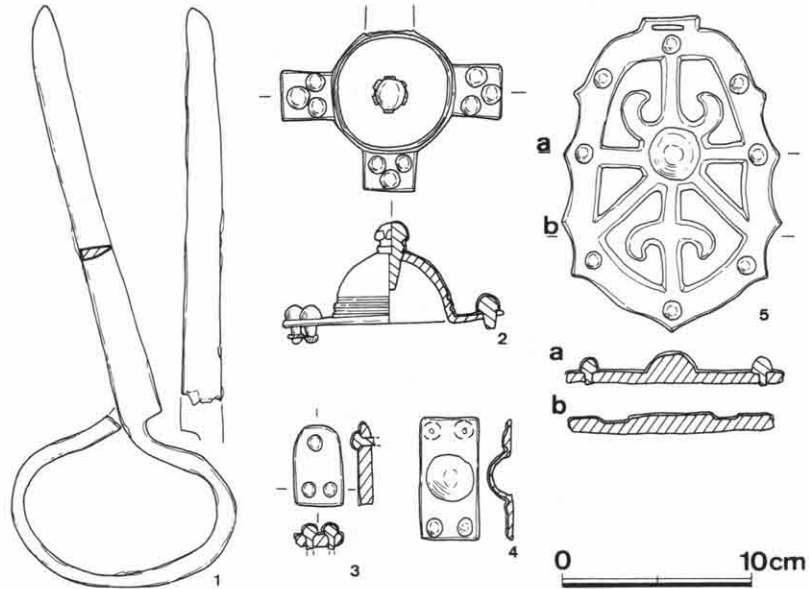


第1図 遺跡所在地(1/25,000)

状況図を見ると、遺物は奥壁に向かって右側に集中し、盗掘は受けていなかったようだ。出土遺物は、記録を取った上で取り上げられ、一部が京都大学文学部に寄贈されたほかは、福知山高校の資料室に保管された。出土遺物は、乳文鏡、ガラス勾玉、金環、鋏、刀・刀子、鉄鏃、馬具、砥石、鉄釘、土器(土師器・須恵器)である。なお、1986年に金属製品の保存処理が行われ、鉄地金銅張の馬具は往時の輝きを取り戻した。

奉安塚古墳は、1966年に発行された『世界考古学大系』(日本3)や『武器・

装身具』（日本原始美術大系5）に、馬具の写真が公表されていたが、報告は『奉安塚発掘の記』しかなく、これがサークル誌という性格上、現在の入手は極めて困難となっており、発掘当時の情報は長らく不明なままであった。ところが、1989年に『福知山高校資料室収蔵品目録（考古資料編）』が発刊されて、

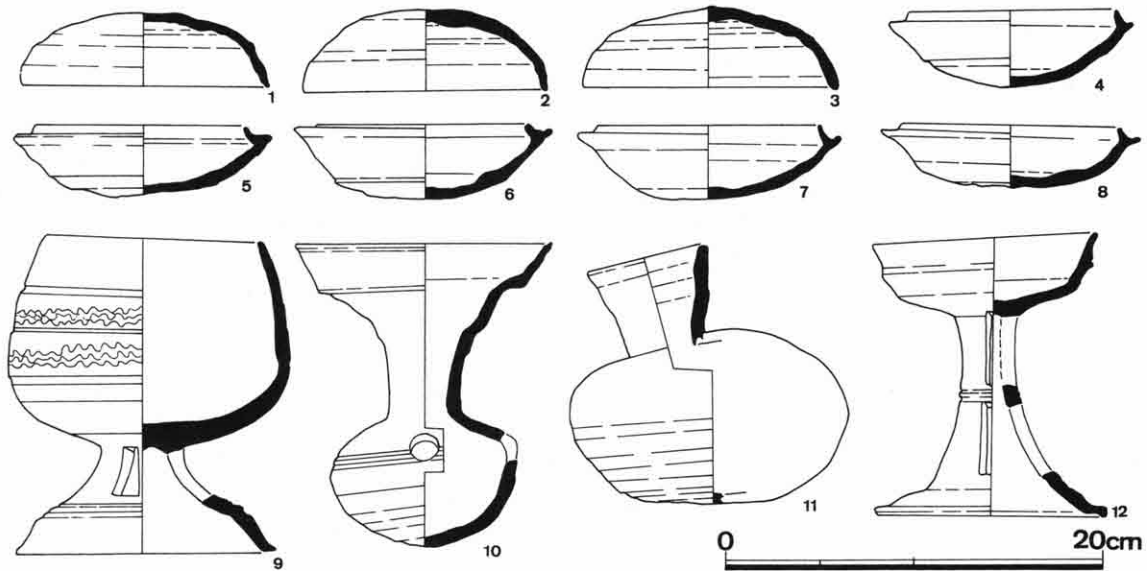


第2図 奉安塚古墳出土鉄製品実測図
1. 劔 2. 辻金具 3・4. 革金具 5. 杏葉
(1は参考文献1、2～5は参考文献3を再トレースした)

遺物写真のほとんどが公表された上に、先の『奉安塚発掘の記』も載録され、古墳の状況がかなり明確にわかるようになった。また、最近、福知山市教育委員会によって奉安塚古墳の出土遺物が実測され、『下山古墳群』Ⅲの中に図面だけが公表された。このように断片的な公表資料が多いものの、福知山盆地を代表する後期古墳の一つであることは言うまでもない。古墳の年代は570年をさかのぼらない。

古墳の意義 奉安塚古墳の出土遺物は、後期の横穴式石室墳の中では破格の内容である。中でも、類例の少ない劔と金銅装の馬具は注目される。馬具には、鏡板・杏葉・雲珠・鞍金具・革金具があり、1組の馬装とみられる。鏡板と杏葉は三葉文を透かし彫りした刺葉形の鉄地板に縁金を載せた後、両者を金銅板で覆うつくりである。すでに指摘されているように、6世紀後半の馬具は鏡板と杏葉が同じ形状を呈する点が特徴であり、馬具の製作が組織的に行われるようになったようだ。このような刺葉形の意匠の馬具は、奈良県藤ノ木古墳など6世紀後半に盛行するもので、その祖型は大阪府南塚古墳で見えるような鐘形鏡板・杏葉であろう。この鐘形意匠の馬具は、それ以前のわが国では見られなかったもので、北朝からの伝来を指摘する見解がある。

ところで、中丹地域の馬具の導入についてみると、5世紀後半の綾部市沢3号墳では小型の鉄製f字形鏡板が、5世紀末の綾部市荒神塚古墳では轡は不明であるが、鉄製心葉形杏葉がある。また、6世紀初頭では綾部市安国寺平山古墳で古式の素環鏡板付轡があり、馬具の普及が遅れた地域とは言えない。ところが、6世紀中葉以降では、金銅装の鏡板・杏葉を持つ古墳は奉安塚古墳と福知山市牧正一古墳を挙げるに留まる。隣接する丹後地域でも、大宮町西垣古墳で心葉形杏葉を見るにすぎない。この時期の馬装は、製作過程のみならず、普及過程においてもそれ以前とは異なっていた可能性がある。5世紀末～6世紀中葉では鉄製楕円形鏡板付轡が南山城(田辺町トヅカ古墳)・北山城(京都市穀塚古墳)・南丹(今林2号墳)・中丹(綾部市荒神塚古墳)・丹後(峰



第3図 奉安塚古墳出土須恵器実測図(1/4) 参考文献3を再トレース

山町大耳尾2号墳)に見られ、この型式の馬具が乗馬の風習の普及に大きな役割を果たしたことが想定される。6世紀中葉以後は金銅装の飾る馬具と鉄製素環鏡板付轡による実用馬具とが機能的に分化し、丹波以北では後者の馬具があまり入手されなくなったようだ。それを補完する位置にある威信財として双龍環頭大刀が下賜されたのではなかろうか。滋賀県鴨稻荷山古墳に金銅装馬具と古式の双龍環頭大刀が見られるのも示唆的であるし、いずれにせよ継体朝以後の政治的動乱を馬具の分布は物語っているのかもしれない。

古墳の案内 JR福知山駅より京都交通バス「山野口」方面行きで、「佐賀小学校前」で下車。便数が少ないので車が便利。校庭横に古墳の看板あり。石室は開口しているため見学可能。

(河野一隆)

<参考文献>

1. 大槻昭末・永井 実ほか『奉安塚発掘の記』 京都府立福知山高等学校社会部考古学班 1949(参考文献2に復刻所収)
2. 杉原和雄・田代 弘ほか『福知山高校資料室収蔵品目録』考古資料編 京都府立福知山高等学校 1989
3. 崎山正人『下山古墳群』Ⅲ 福知山市教育委員会 1994

75. 梶塚古墳

梶塚古墳は、現住所が城陽市平川で、前方後円墳として著名な久津川車塚古墳とは約60mしか離れていない。位置的には、この車塚古墳と北側の芭蕉塚古墳という二大前方後円墳の中間に、ほぼ連なるような形で存在している。この梶塚古墳も、久津川古墳群の一つとして、古くから大変著名な古墳である。全体的に、この地域にある古墳は、比較的古くから知られているが、この梶塚古墳も大正時代から何らかの形で調査がなされてきている。

この大正時代の調査であるが、梅原末治氏はその結果を『久津川古墳研究』として刊行され、その本の中で青塚古墳や車塚古墳などとともに久津川七ツ塚の一つとして知られていたことが述べられている。当時の測量調査によれば、一辺が115尺・高さ6尺の方形状であったことが指摘されている。しかし、その後の太平洋戦争中の食糧事情の悪化に伴って、古墳の全面が開墾されて畑になったようである。

その後、1960年代に破壊が進んだため、一部が発掘調査されるに至った。その結果、梶塚古墳の墳丘西裾には南北方向に旧奈良街道が走るものの、方墳としての旧状はよく留めていたことが判明した。それによれば、墳丘の大きさは、一辺が32mで、南北軸は18°東に振っているようで、墳丘の高さも現状の3.6mよりも高く、ほぼ二段築成で5m程度はあったと推定された。また、墳頂部には、家・蓋・盾・鞆などの形象埴輪が立て並べられていたことが確かめられた。

一方、主体部は、すでに墳丘が破壊されていたこともあり、大部分が失われていたが、残存していた石組みの状況から竪穴式石室であることが確認されている。この竪穴式石室は、墓壇を掘って築かれており、石材も千枚岩質頁岩が用いられていた。また、石室の床面には、水銀朱が残存していたが、床面には粘土や礫などの施設がなく、周囲に四壁を築いただけの簡単な構造であったことがわかった。

その後、1960年代から70年代にかけての宅地開発のため、現時点では、墳丘を含めた約3/4がすでに住宅や道路になっており、全面的な調査は不可能な状況に達している。そのため、1983年以降、城陽市教育委員会が主体となって、宅地化されていない部分を中心に断続的に発掘調査が進められ、1964年の調査時点ではわからなかったことも次第に明らかになってきた。その結果は、次のとおりである。



遺跡所在地(1/25,000)

まず、墳丘であるが、形態は方形で、一辺が49.7m(墳丘の基底辺で計測、墳丘の東西長については、33.3mであることが確定している。)もあり、高さは5.5mあったことが確認された。墳丘の周囲には、幅約11.8m(上縁部分で計測)・深さ1.4mの周濠がめぐっており、周濠部を含めると、全長66.1mにも達する大きな方墳とすることができる。墳丘は、かなりの削平を受けていたものの、立面形は三段築成で、一段目以外は盛り土で造られていた。また、二段目の傾斜部分や周濠の斜面部には葺石が施されていた。埴輪列が存在したのは、一段目の平坦面と、外堤上である。埴輪の種類も多く、円筒埴輪・朝顔形埴輪・家形埴輪・蓋形埴輪・盾形埴輪・靱形埴輪・馬形埴輪・盒子形埴輪などがある。主体部の竪穴式石室は、墳丘の中心部にあつて、主軸が南北方向である。石室内からは、石製模造品や鉄製農具などが出土した。

その後、遺物、中でも埴輪の検討が行われ、梶塚古墳の年代がおおよそではあるがわかるようになってきた。それによれば、技法や形態は、同じ久津川古墳群の中の車塚古墳や丸塚古墳で見つかったものと同じようである。ただ、梶塚古墳出土の埴輪は、規模が大きく、黒班のものが多く、ほとんどが土師質であることが特徴となっている。梶塚古墳のすぐ北にある芭蕉塚古墳からは須恵質の埴輪が出土しているのに対して、この古墳からはほとんど出土していないのである。このような埴輪の特色から、久津川古墳群の中でも、梶塚古墳は車塚古墳よりも新しく、芭蕉塚古墳や赤塚古墳よりも古い時代に築かれたことが推定されている。

以上のような発掘調査の結果を受けて、梶塚古墳の被葬者像が推定されている。まず、位置的に、梶塚古墳の西辺が車塚古墳の西側の周濠外縁線の延長線と平行しており、車塚古墳と計画的に位置が決められていることが指摘されている。しかも、時期的には車塚の方が古いことから、梶塚古墳の方位が車塚古墳によって規制を受けていることになり、車塚古墳の被葬者の元にあつて重要な役割を果たした人物という想像がなされている。確かに、主墳と陪塚のようにも見える位置にあり、その可能性は充分にある。今後、これらの推定の当否も含めて、調査・研究の進展が待たれる。

(土橋 誠)

<参考文献>

梅原末治『久津川古墳研究』 1920

同志社大学考古学研究会古墳研究サークル「山城久津川古墳群の研究(1)・(2)」『同志社考古』 1・2 1962

西谷真治「梶塚古墳発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1965)』 京都府教育委員会) 1965

奥村清一郎「梶塚古墳発掘調査概報」(『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第3集 城陽市教育委員会) 1975

近藤義行・伊賀高弘「久津川遺跡群発掘調査概報」(『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第13集 城陽市教育委員会) 1984

近藤義行・伊賀高弘「久津川遺跡群発掘調査概報」(『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第15集 城陽市教育委員会) 1986

近藤義行・小泉裕司「久津川遺跡群発掘調査概報」(『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第18集 城陽市教育委員会) 1988

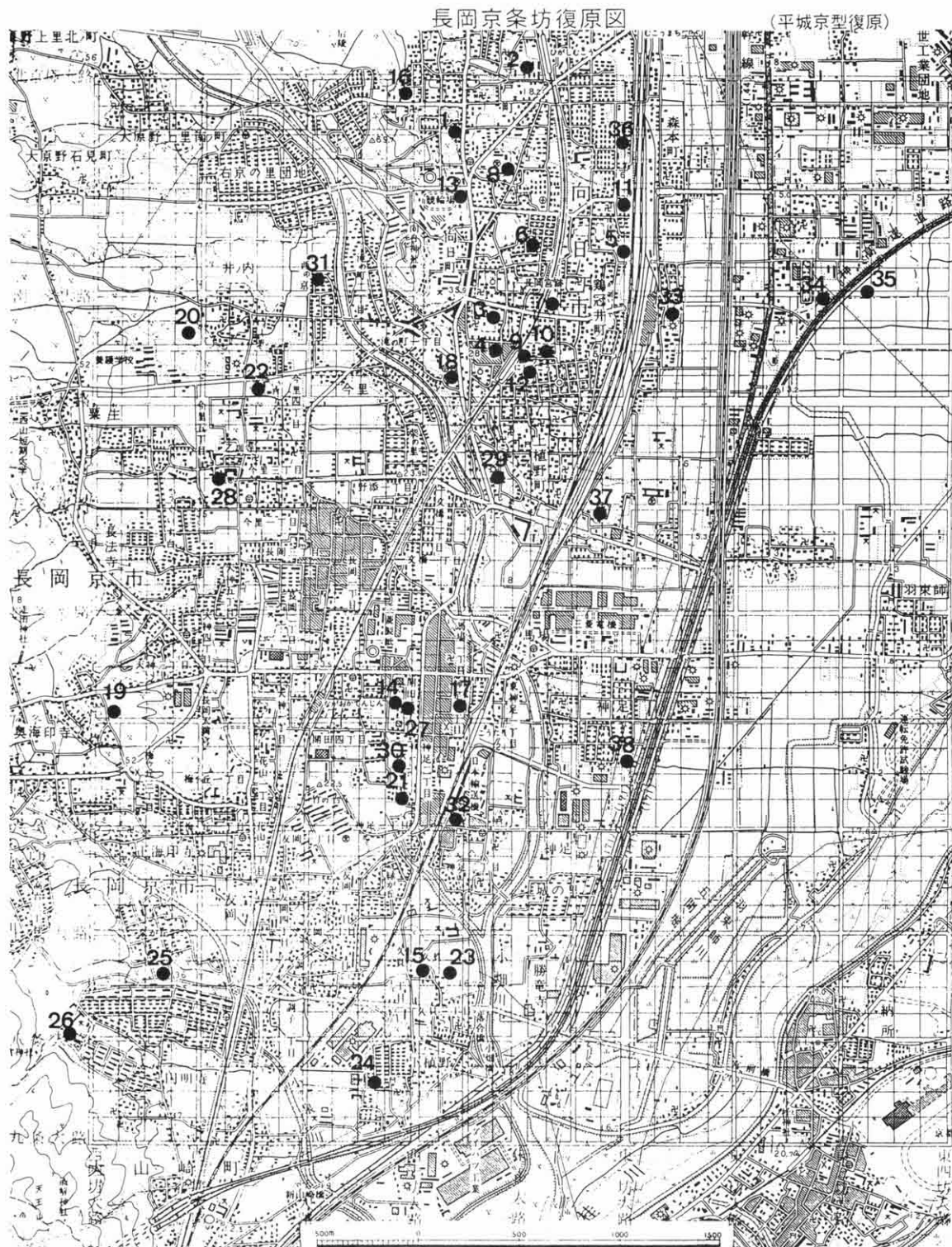
長岡京跡調査だより・59

前回「たより」以降の長岡京連絡協議会は、平成8年8月29日、9月25日、10月23日に開催された。報告のあった京内の発掘調査は、宮内13件、右京域19件、左京域6件であった。京外の6件を併せると44件となる(調査地一覧表と位置図を参照)。この内、宮内第329次の調査成果を簡単に紹介する。

調査地一覧表

(1996年10月末現在)

番号	調査次数	地区名	調査地	調査機関	調査期間
1	宮内第295次	7ANBMC-3	向日市寺戸町南垣内8-2他	(財)向日市埋文	95.3/2~5/30 96.4/1~8/9
2	宮内第316次(第2調査区)	7ANBKD	向日市寺戸町小佃	(財)向日市埋文	7/26~8/10
	宮内第316次(第3調査区)	7ANBKD	向日市寺戸町小佃	(財)向日市埋文	3/4~9/6
	宮内第316次(第4調査区)	7ANBKD	向日市寺戸町小佃	(財)向日市埋文	8/1~10/31
3	宮内第326次	7ANEYT-2	向日市鶏冠井町山畑地内・楓畑24	(財)向日市埋文	5/15~8/14
4	宮内第328次	7ANFOC-6	向日市上植野町御塔道	(財)向日市埋文	7/22~8/2
5	宮内第329次	7ANEKI-3	向日市鶏冠井町北井戸1-2	(財)向日市埋文	8/19~9/27
6	宮内第330次	7ANEAC-4	向日市鶏冠井町荒内35-50	(財)向日市埋文	8/20~8/22
7	宮内第331次	7ANEHJ-2	向日市鶏冠井町祇所21-1	(財)向日市埋文	9/2~11/末
8	宮内第332次	7ANBNB	向日市寺戸町西野辺	(財)向日市埋文	9/2~10/31
9	宮内第333次	7ANFMK-10	向日市上植野町南開45-7	(財)向日市埋文	9/2~9/10
10	宮内第334次	7ANFMK-11	向日市上植野町南開40-1他	(財)向日市埋文	9/18~11/中
11	宮内第335次	7ANDMD-4	向日市森本町前田2-19	(財)向日市埋文	9/24~10/7
12	宮内第336次	7ANFMK-12	向日市上植野町南開24-5	(財)向日市埋文	10/11~10/16
13	宮内第337次	7ANBND	向日市寺戸町西野辺11-1	(財)向日市埋文	10/16~10/30
14	右京第529次	7ANKTR-6	長岡京市開田二丁目125-1	(財)長岡京市埋文	6/17~8/6
15	右京第530次	7ANQNK-4	長岡京市久貝二丁目315-1・316-4	(財)長岡京市埋文	6/20~7/29
16	右京第531次	7ANBNI-2	向日市寺戸町西垣内15-97	(財)向日市埋文	6/17~7/26
17	右京第532次	7ANMMZ-1	長岡京市神足一丁目16-10	(財)長岡京市埋文	7/1~9/13
18	右京第533次	7ANFUT-2	向日市上植野町馬立17	(財)向日市埋文	7/2~8/30
19	右京第535次	7ANKTM-4	長岡京市天神二丁目地内	(財)長岡京市埋文	7/22~8/1
20	右京第536次	7ANGKS-4	長岡京市井ノ内小西40	長岡京市教委	7/15~9/17
21	右京第537次	7ANKKI-3	長岡京市神足三丁目317-1	(財)長岡京市埋文	8/1~8/23
22	右京第538次	7ANIAE-10	長岡京市今里四丁目222他	(財)長岡京市埋文	8/5~
23	右京第539次	7ANQKA-1	長岡京市久貝二丁目609-2	(財)長岡京市埋文	8/26~9/24
24	右京第540次	7ANTMK-6	大山崎町下植野宮脇1-62	大山崎町教委	8/19~9/上
25	右京第541次	7ANSTE-18	大山崎町円明寺鳥居前52-2、3、4	(財)京都府埋文	9/20~11/下
26	右京第542次	7ANTMK-6	大山崎町円明寺小倉口1-14他	大山崎町教委	9/10~9/末
27	右京第543次	7ANKST-7	長岡京市開田2丁目225	(財)長岡京市埋文	9/26~10/17
28	右京第544次	7ANINC-4	長岡京市今里西ノ口15-2他、今里五丁目315-4他	(財)長岡京市埋文	10/1~97.1/上
29	右京第545次	7ANFSR-4	向日市上植野町下川原1	(財)向日市埋文	10/2~12/下
30	右京第546次	7ANKKI-4	長岡京市神足三丁目312-2	(財)長岡京市埋文	10/21~11/上
31	右京第547次	7ANGTE-3	長岡京市井ノ内	(財)京都府埋文	10/27~97.2
32	右京第548次	7ANMKI-4	長岡京市東神足二丁目36-1他	(財)京都府埋文	10/24~12/中
33	左京第381次	7ANEMD-2	向日市鶏冠井町門戸2他	(財)向日市埋文	7/15~11/中
34	左京第384次(A-5)	7ANVKN-9	京都市南区久世東土川町金井田	(財)京都府埋文	4/8~9/28



▽番号は一覧表・本文 () 内と対応

調査地位置図

35	左京第385次(B-5b・B-8)	7ANVKN-10、VST-6	京都市南区久世東土川町金井田、正登	(財)京都府埋文	6/3～
36	左京第388次	7ANDMD-3	向日市森本町前田4-3-5-3	(財)向日市埋文	6/5～7/31
37	左京第389次	7ANFIR-4、FDN-3	向日市上植野町池ノ尻・大門	(財)京都府埋文	7/29～12/末
38	左京第390次	7ANMOR-3	長岡京市神足大張9・10	(財)長岡京市埋文	9/24～12/上
39	北ノ口遺跡第2次	*ZK2次4ZKAKC-2	向日市物集女町北ノ口55-2	(財)向日市埋文	7/16～7/31
40	長野丙古墳群第1次	PH1次*:4PHANN	向日市物集女町長野19・20	(財)向日市埋文	6/14～9/27
41	長野丙古墳群第2次	PH2次*:4PHANN-2	向日市物集女町長野4-182	(財)向日市埋文	8/19～9/19
42	山城国府跡第40次	7XYS' FH-10	大山崎町大山崎藤井畑23	大山崎町教委	8/19～8/30
43	山城国府跡第41次	7XYS' EG-2	大山崎町大山崎永福寺12-1	大山崎町教委	10/16～10/23
44	中海道遺跡立会調査第96135次	3NNAGB	向日市物集町5ノ坪21-1、21	(財)向日市埋文	10/15・16

長岡宮跡第329次

(財)向日市埋蔵文化財センター

(5)

調査地は、長岡宮東辺官衙に位置し、東一坊大路に接する。周辺では、北隣接地で宮内第210次調査が行われている。宮内第210次調査では、東一坊大路東西両側溝と、宮東面築地が確認されている。今回の調査では宮内第210次調査の成果をふまえ、東一坊大路西側溝と東面築地の検出を目的として調査が行われた。

調査は10月2日で終了しており、東一坊大路西側側溝、宮内整地層、古墳時代と思われる南北溝が検出されている。特に、東一坊大路西側溝の溝内から出土した大量の土師器・須恵器・木簡・木片は、貴重な資料と思われる。遺物は、ある部分に集中することなく、溝全面にわたって土器片・木片が投棄されていた。しかし、木片については、南側半分に多くみられ、北側ではほとんど出土しなかった。現在、南半の溝埋土の水洗いが行われており、木簡約100点(削り屑を含む)、墨書土器、墨書人面土器、土師器、須恵器、黒色土器、木製品(鳥形、斎串、杓子形木器など)、ガラス玉などがみつまっている。土器について、土師器と須恵器の構成は8:2～9:1と、圧倒的に土師器が多い。形態別では、供膳形態がほぼ8割を占める。中でも、高杯が20点弱出土していることが特徴的である。

春宮坊の下部機関である「主工署」とかかれた墨書土器や、春宮坊での四等官「令史」とかかれた木簡など春宮坊に関係する文字資料や、「神官」と書かれた木簡など神祇官関係の文字資料が発見された。平安京では、この調査地のすぐ東に位置する左京二条一坊一・八町は東宮坊町、左京二条二坊二町は神祇官町と呼称されており、上記の資料は平安京の宮内宮司の位置が、長岡京にさかのぼる可能性を示す一例であろうと報告された。

(津村正樹)

センターの動向(96.8~10)

1. できごと

8. 1 足利健亮理事、長岡京跡左京第384次調査(京都市東土川町)、内里八丁遺跡(八幡市)現地視察
- 3 京都府立丹後郷土資料館講師：田代調査員「古代丹後の玉」
- 8 松ヶ崎遺跡(網野町)関係者説明会
- 9 松ヶ崎遺跡発掘調査終了(5.8~)
- 桑原口遺跡(宮津市)関係者説明会、発掘調査終了(4.25~)
- 17 第77回埋蔵文化財セミナー開催(別掲)
- 第14回小さな展覧会開催(~9.1)
- 17~18 埋蔵文化財研究会(於：高槻市)戸原主任調査員、河野・筒井調査員出席
- 19 都出比呂志理事、田辺城跡(田辺町)現地視察
- 柿添遺跡(精華町)発掘調査開始
- 21 堤 圭三郎理事、田辺城跡ほか現地視察
- 木村常務理事・事務局長、兵庫県震災関係発掘調査現地視察
- 22 町田 章奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部長、長岡京跡左京第384次調査現地指導
- 23 シミズ谷城跡(弥栄町)現地説明会、発掘調査終了(5.7~)
- 24 京都府立丹後郷土資料館講師：増田主任調査員「古代丹後の鉄」
- 26 平遺跡(丹後町)発掘調査開始
- 28 理事協議会(於：当センター)樋口隆康理事長、中澤圭二副理事長、木村英男常務理事・事務局長、上田正昭、都出比呂志、井上満郎、堤 圭三郎、中谷雅治の各理事出席
- 29 長岡京連絡協議会
- 田辺城跡発掘調査終了(5.7~)
9. 2~ 3 全国埋蔵文化財法人連絡協議会臨時役員会(於：東京・ホテルフロラシオン青山)木村常務理事・事務局長、園山・安藤事務局次長、出席
- 2~3 堤 圭三郎理事、天王山古墳群(久美浜町)・浦入遺跡(舞鶴市)他現地視察
- 6 上原真人京都大学教授、五領池東窯跡(木津町)現地指導
- 内里八丁遺跡(八幡市)関係者説明会
- 9 長岡京跡右京第541次調査(大山崎町)発掘調査開始
- 12 森 郁夫帝塚山大学教授、五領池東窯跡現地指導
- 13 五領池東窯跡現地説明会
- 17 都出比呂志理事、長岡京跡左京第384次調査(京都市東土川町)現地視察
- 職員研修：石井主任調査員「古代・中世の流通機構」(於：当センター)
- 18 樋口隆康理事長、五領池東窯跡現地視察
- 20 文化庁岸本直文技官、奈良岡南古墳群現地視察
- 25 長岡京連絡協議会
- 交通安全講習会(於：乙訓総合庁舎)
- 安藤事務局次長、水谷課長補佐、杉江・今村主事出席

- 30 長岡京跡左京第384次発掘調査終了
(4.8～)
五領池東窯跡発掘調査終了(5.7～)
10. 3 堤 圭三郎理事、平遺跡現地視察
10. 3～4 全国埋蔵文化財法人連絡協議会
研修会(於：山形市)伊賀調査員、杉江・
西林主事出席
- 4 全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿
ブロック埋文研修会(於：向日市民会
館)中澤副理事長、木村常務理事・事務
局長、堤理事、園山・安藤事務局次長、
小山調査第1課長、安田・平良・奥
村・水谷課長補佐、辻本・伊野係長、
松井・竹原主任調査員、田中、小池、
森下、津村、野島調査員出席：中澤副
理事長講演「地質学と考古学」、伊野係
長発表「奈良岡北1号墳出土の陶質土
器」
- 8 長岡京右京第547次調査(長岡京市)発
掘調査開始
- 9 全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿
ブロックOA委員会(於：京都市)土橋
主任調査員出席
- 15 西ノ口遺跡(八幡市)発掘調査開始
- 17 天王山古墳群現地説明会
- 18 職員研修：板倉順子京都府教育庁指
導部保健体育課専門員「健康管理・食
事と栄養」(於：当センター)
- 22 都出比呂志理事、平遺跡他現地視察
- 23 堤 圭三郎理事、平遺跡他現地視察
長岡京連絡協議会
- 25 長岡京跡左京第385次調査(京都市東
土川町)現地説明会
- 28 堤 圭三郎理事、長岡京跡右京第541
次現地視察
全国埋蔵文化財法人連絡協議会海外
研修「韓国の文化財を訪ねて」平良課
長補佐参加(～11.2)
- 29 中海道遺跡(向日市)発掘調査開始
中澤圭二副理事長、平遺跡現地視察

2. 普及啓発事業

- 8.17 第77回埋蔵文化財セミナー開催(於：
向日市民会館)―平成7年度京都府内発
掘調査について―有井広幸「木津町・
釜ヶ谷遺跡の発掘調査について」、梅本
康広「向日市・中海道遺跡の発掘調査
について」、増田孝彦「弥栄町・奈良岡
遺跡の発掘調査について」
- 17～9.1 第14回小さな展覧会開催
(安藤信策)

府内報告書等刊行状況一覧 (95.11~96.10)

発掘調査報告書

- 『埋蔵文化財発掘調査概報』 1996 京都府教育委員会 1996.3
- 『京都市内遺跡試掘調査概報』 平成7年度 京都市文化市民局 1996.3
- 『京都市内遺跡立会調査概報』 平成7年度 同上 1996.3
- 『京都市内遺跡発掘調査概報』 平成7年度 同上 1996.3
- 『京都市埋蔵文化財研究所調査報告』 第13冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1995.5
- 『平成5年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 同上 1996.3
- 『向日市埋蔵文化財調査報告書』 第43集 (財)向日市埋蔵文化財センター・向日市教育委員会 1996.3
- 『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』 第7集 (財)長岡京市埋蔵文化財センター 1996.3
- 『京都府丹後町文化財調査報告』 第11集 丹後町教育委員会 1996.3
- 『京都府丹後町文化財調査報告』 第12集 同上 1996.3
- 『大宮町文化財調査報告』 第8集 大宮町教育委員会 1996.3
- 『京都府野田川町文化財調査報告』 第7集 野田川町教育委員会 1990.3
- 『京都府野田川町文化財調査報告』 第15集 同上 1994.3
- 『京都府野田川町文化財調査報告』 第16集 同上 1995.3
- 『京都府野田川町文化財調査報告』 第17集 同上 1996.3
- 『福知山市文化財報告書』 第31集 福知山市教育委員会 1996.3
- 『福知山市文化財報告書』 第32集 同上 1996.3
- 『綾部市文化財調査報告』 第19集 綾部市教育委員会 1993.3
- 『綾部市文化財調査報告』 第23集 同上 1996.3
- 『綾部市文化財調査報告』 第24集 同上 1996.3
- 『京都府京北町埋蔵文化財調査報告書』 第5集 京北町教育委員会 1995.3
- 『京都府京北町埋蔵文化財調査報告書』 第6集 同上 1996.3
- 『長岡京市文化財調査報告書』 第34冊 長岡京市教育委員会 1996.3
- 『長岡京市文化財調査報告書』 第35冊 同上 1996.3
- 『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』 第13集 大山崎町教育委員会 1996.2
- 『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』 第31集 宇治市教育委員会 1995.3
- 『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』 第34集 同上 1996.3
- 『城陽市埋蔵文化財調査報告書』 第30集 城陽市教育委員会 1996.3
- 『城陽市埋蔵文化財調査報告書』 第31集 同上 1996.3
- 『田辺町埋蔵文化財調査報告書』 第13集 田辺町教育委員会 1995.3
- 『田辺町埋蔵文化財調査報告書』 第19集 同上 1995.3
- 『加茂町文化財調査報告』 第13集 加茂町教育委員会 1996.3
- 『妙心寺旧塔頭実相院跡調査報告』 花園大学 1995.3
- 『智積院境内祥雲寺客殿の発掘調査』 真言宗智山派総本山智積院 1995.10

当調査研究センター現地説明会・中間報告資料

現地説明会

- 「内里八丁遺跡第8次」 (京埋セ現地説明会資料 No.95-11) 1995.11.16
- 「東土川遺跡」 (京埋セ現地説明会資料 No.96-01) 1996.2.15
- 「奈具岡遺跡・奈具岡北古墳群・奈具岡南古墳群」 (京埋セ現地説明会資料 No.96-02) 1996.7.10
- 「篠・マル山1号窯跡」 (京埋セ現地説明会資料 No.96-03) 1996.7.12
- 「田辺城跡」 (京埋セ現地説明会資料 No.96-04) 1996.7.8
- 「長岡京跡左京第384次」 (京埋セ現地説明会資料 No.96-05) 1996.7.26
- 「シミズ谷城跡」 (京埋セ現地説明会資料 No.96-06) 1996.8.23
- 「五領池東瓦窯跡」 (京埋セ現地説明会資料 No.96-07) 1996.9.13
- 「天王山古墳群」 (京埋セ現地説明会資料 No.96-08) 1996.10.17
- 「長岡京跡左京第385次」 (京埋セ現地説明会資料 No.96-09) 1996.10.25

中間報告

- 「桑原口遺跡」 (京埋セ中間報告資料 No.95-14) 1995.11.22
- 「柿添遺跡」 (京埋セ中間報告資料 No.95-15) 1995.11.21
- 「池下城支城・堀古墳」 (京埋セ中間報告資料 No.95-16) 1995.11.28
- 「嶋遺跡」 (京埋セ中間報告資料 No.95-17) 1995.12.13
- 「興戸宮ノ前遺跡」 (京埋セ中間報告資料 No.95-18) 1995.12.8
- 「上中太田遺跡」 (京埋セ中間報告資料 No.95-19) 1995.12.21
- 「引地城跡・南有路城跡」 (京埋セ中間報告資料 No.96-01) 1996.2.22
- 「内里八丁遺跡第8次」 (京埋セ中間報告資料 No.96-02) 1996.2.20
- 「石ヶ原古墳群」 (京埋セ中間報告資料 No.96-03) 1996.2.27
- 「椋ノ木遺跡」 (京埋セ中間報告資料 No.96-04) 1996.2.23
- 「長岡京跡右京第511次」 (京埋セ中間報告資料 No.96-05) 1996.2.27
- 「桑原口遺跡第3次」 (京埋セ中間報告資料 No.96-06) 1996.8.9
- 「松ヶ崎遺跡」 (京埋セ中間報告資料 No.96-07) 1996.8.8
- 「内里八丁遺跡第9次」 (京埋セ中間報告資料 No.96-08) 1996.9.6

府内現地説明会資料

- 「海印寺跡第3次・走田古墳群第1次調査」 長岡京市教育委員会 1995.12.9
- 「嶋間城発掘調査」 綾部市教育委員会 1996.2.3
- 「平成7年度 恭仁宮跡発掘調査」 京都府教育委員会 1996.2.11
- 「椿井大塚山」 山城町教育委員会 1996.3.3
- 「東寺領八条院町(平安京左京八条三坊十四町)発掘調査」 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1996.4.7
- 「平安宮跡発掘調査」 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1996.4.20
- 「長岡宮北苑跡」 (財)向日市埋蔵文化財センター 1996.5.25
- 「大田南6号墳発掘調査」 弥栄町教育委員会 1996.6.1
- 「平安京右京一条三坊二町発掘調査」 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1996.6.23
- 「上楽遺跡」 福知山市教育委員会 1996.8.31

「上ノ庄田瓦窯跡発掘調査」 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1996.9.7

「壺ノ谷窯址群発掘調査」 佛教大学校地(文化財等)調査委員会 1996.9.8

その他の雑誌・報告・論文等

『京都府埋蔵文化財情報』 第58号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1995.12

『京都府埋蔵文化財情報』 第59号 同上 1996.3

『京都府埋蔵文化財情報』 第60号 同上 1996.6

『京都府埋蔵文化財情報』 第61号 同上 1996.9

『京都府遺跡調査概報』 第67冊 同上 1995.12

『京都府遺跡調査概報』 第68冊 同上 1996.2

『京都府遺跡調査概報』 第69冊 同上 1996.3

『京都府遺跡調査概報』 第70冊 同上 1996.3

『京都府遺跡調査概報』 第71冊 同上 1996.3

『京都府遺跡調査概報』 第72冊 同上 1996.3

『京都府埋蔵文化財論集』 第3集 同上 1996.3

『京都府指定・登録文化財等目録』 京都府教育委員会 1995.1

『京都の文化財』 第13集 同上 1996.3

『文化財保護』 No.13 同上 1996.1

『京都の自然200選』 京都府企画環境部環境企画課

『京都市遺跡地図 台帳』 京都市文化市民局 1996.3

『京都市文化財だより』 第25・26号 同上 1996.6~1996.10

『京都市の文化財』 第13集 京都市文化市民局文化部文化財保護課 1996.2

『長岡京跡と水垂遺跡のようす』 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1995.11

『研究紀要』 第2号 同上 1996.2

『木村捷三郎収集瓦図録』 同上 1996.3

『平成6年度 京都国立博物館年報』 京都国立博物館

『資料館紀要』 第24号 京都府立総合資料館 1996.3

『第13回東寺百合文書展』 同上 1996.7

『京都府資料目録追録』 No.12 同上 1996.9

『総合資料館だより』 No.106~109 同上 1996.1~1996.10

『京都府文化博物館研究紀要 朱雀』 第7号 京都府京都文化博物館 1994.12

『京都府文化博物館研究紀要 朱雀』 第8号 同上 1995.12

『桃山の春・光悦展』 同上 1995.10

『平安の古瓦展』 京都市歴史資料館 1995.3

『京都市歴史資料館紀要』 第13号 同上 1996.3

『京都市の文化財』 第8回 同上 1996.5

『平成7年度 京都市歴史資料館年報』 同上

『八坂神社の古記録』 同上 1996.10

『泉屋博古館紀要』 第十二巻 泉屋博古館 1996.3

『佛教大学総合研究所紀要』 第3号 佛教大学総合研究所 1996.3

- 『佛教大学総合研究所紀要』 第3号別冊 同上 1996.3
- 『東アジアの村落と家族』 同上 1996.3
- 『佛教大学総合研究所報』 第9・10号 同上 1995.11～1996.5
- 『京都橘女子大学研究紀要』 第22号 京都橘女子大学研究紀要編集委員会 1995.12
- 『同志社大学キャンパスの遺跡 1994』 同志社大学校地学術調査委員会
- 『第46トレンチ』 京都大学考古学研究会 1995.11
- 『古代文化』 第47巻第11・12号、第48巻第1～10号 (財)古代学協会 1995.11～1996.10
- 『古代学研究所研究紀要』 第5輯 同上 1995.12
- 『土車』 第75～79号 同上 1995.7～1996.7
- 『文化財報』 No.91～94 (財)京都府文化財保護基金 1995.11～1996.8
- 『会報』 第80・81号 (財)京都古文化保存協会 1996.1～1996.10
- 『志くれてい』 第55～58号 (財)冷泉家時雨亭文庫 1996.1～1996.10
- 『史迹と美術』 第659～668号 史迹美術同致会 1995.11～1996.9
- 『修復』 第2号 (株)岡墨光堂 1995.11
- 『京都文化論』 京都府立嵯峨野高等学校
- 『網野町誌』 下巻 網野町役場 1996.5
- 『丹後町の古代遺跡発掘展』 丹後町古代の里資料館 1996.1
- 『村境の作り物』 京都府立丹後郷土資料館 1996.4
- 『丹後郷土資料館だより』 第31・32号 同上 1996.3～1996.9
- 『市史編さんだより』 第9～11号 宮津市教育委員会 1995.12～1996.10
- 『宮津市史 史料編』 第一巻 宮津市役所 1996.3
- 『平成7年度企画展』 三和町郷土資料館 1995.11
- 『三和町史』 下巻 三和町 1996.3
- 『口丹波史料 形原記』 卷三 口丹波史談会 1995.9
- 『丹波史談 平成6・7一特』 同上 1996.3
- 『史談ふくち山』 第508～531号 福知山史談会 1994.7～1996.6
- 『史跡私市岡古墳整備事業報告』 綾部市教育委員会 1994.3
- 『第4回特別展』 綾部市資料館 1996.3
- 『綾部市資料館研究紀要』 1 同上 1993.3
- 『綾部市資料館研究紀要』 2 同上 1996.3
- 『綾部市資料館報 平成6年度』 同上 1996.3
- 『綾部の文化財』 第42・43号 1996.4～1996.9
- 『安定社会の総合研究 第6回セミナー』 (財)京都ゼミナールハウス 1996.3
- 『安定社会の総合研究』 同上 1996.6
- 『会館10周年記念特別展』 亀岡市文化資料館 1995.11
- 『亀岡市文化資料館報』 第4号 同上 1995.1
- 『亀岡の水車』 同上 1996.3
- 『第21回企画展』 同上 1996.5
- 『第12回特別展』 同上 1996.10
- 『(財)向日市埋蔵文化財センター年報 都城7』 (財)向日市埋蔵文化財センター 1996.3

- 『向日市文化資料館館報』 第11号 向日市文化資料館 1996.3
『向日市古文書調査報告書』 第5集 同上 1996.3
『長岡京市埋蔵文化財センター年報 平成5年度』 (財)長岡京市埋蔵文化財センター 1995.8
『長岡京市埋蔵文化財センター年報 平成6年度』 同上 1996.3
『長岡京市市史編さんだより』 No. 9 長岡京市 1996.3
『長岡京市史 本文編』 一 長岡京市役所 1996.3
『第1回特別展・展示図録』 大山崎町歴史資料館 1995.11
『大山崎町歴史資料館 館報』 第2号 同上 1996.3
『大山崎町歴史資料館 館報』 第3号 同上 1996.9
『平成6年度 宇治市歴史資料館年報』 宇治市歴史資料館 1996.1
『宇治文庫7 発掘ものがたり宇治』 同上 1996.3
『平成7年度 宇治市歴史資料館年報』 同上 1996.9
『隠元渡来』 同上 1996.10
『文愛協会報』 第41号 (財)宇治市文化財愛護協会 1996.2
『城陽市文化財シンポジウム』 城陽市教育委員会 1995.12
『企画展 よみがえる冨山古墳群』 城陽市歴史民俗資料館 1996.2
『城陽市歴史民俗資料館 館報』 創刊号 同上 1996.3
『企画展 久津川古墳群を掘る』 同上 1996.7
『京都考古』 第79～82号 1995.10～1996.8
『企画展資料23』 京都府立山城郷土資料館 1996.9
『山城郷土資料館だより』 第24号 同上 1996.3
『山城郷土資料館友の会ニュース』 第22・23号 同上 1996.1～1996.7
『資料研究』 第2号 加茂町役場総務部総務課町史編さん室 1996.3
『紫陽花』 第22～24号 同上 1996.1～1996.8
『和束町史』 第1巻 和束町 1995.3
『精華町史』 本文篇 精華町 1996.3
『波布理曾能』 第13号 精華町の自然と文化を学ぶ会 1996.4

受贈図書一覧(8. 8~10)

(財)北海道埋蔵文化財センター	(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書第97集 中野B遺跡、同第98集 滝里4遺跡(2)、同第99集 西桔梗1遺跡、同第100集 ユカンボシC9遺跡、同第101集 美沢16遺跡、同第102集 美沢川流域の遺跡群XⅧ、同第103集 オサツ2遺跡(2)、同第104集 キウス5遺跡(2)B地区、同第105集 キウス7遺跡(3)、同第106集 高岡1遺跡(3)・高岡2遺跡、同第107集 東雲遺跡、調査年報8 平成7年度
苫小牧市埋蔵文化財調査センター	苫小牧市埋蔵文化財調査センター概要 No.12、第33回特別展 大昔の苫小牧
青森県埋蔵文化財調査センター	青森県埋蔵文化財調査報告書第179集 高野川(3)遺跡発掘調査報告書、同第180集 熊ヶ平遺跡発掘調査報告書、同第181集 板子塚遺跡発掘調査報告書、同第187集 畑内遺跡発掘調査報告書Ⅲ、同第188集 四ツ役遺跡発掘調査報告書、同第191集 佐野平館跡・上佐野遺跡発掘調査報告書、同第192集 戸沢川代遺跡・熊ヶ平遺跡発掘調査報告書、同第193集 平野遺跡発掘調査報告書、同第200集 十三湊遺跡Ⅰ、同第203集 猿沢(42)遺跡外試掘調査報告書、研究紀要 第1号
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第141集 上栗須寺前遺跡群、同第179集 善慶寺早道場遺跡、同第185集 上栗須寺前遺跡Ⅱ、同第201集 野中天神遺跡、研究紀要13、地域をつなぐ 未来へつなぐ
(財)東京都教育文化財団 東京都埋蔵文化財センター	資料目録8、研究論集XⅤ、平成8年度 東京都埋蔵文化財センター要覧、東京都埋蔵文化財センター調査報告第31集 多摩ニュータウン遺跡、東京都埋蔵文化財センター年報16
(財)長野県埋蔵文化財センター	(財)長野県埋蔵文化財センター研究論集Ⅰ、(財)長野県埋蔵文化財センター年報12、(財)長野県埋蔵文化財センター紀要4、(財)長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書20 大星山古墳群・北平1号墳、同21 長野県屋代遺跡群出土木簡
(財)富山県文化振興財団 埋蔵文化財調査事務所	富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告第7集 梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告、同第8集 梅原加賀坊遺跡・久戸遺跡・梅原安丸遺跡・田尻遺跡発掘調査報告Ⅱ、埋蔵文化財年報(7)、埋蔵文化財調査概要 平成7年度
(財)岐阜県文化財保護センター	'96岐阜県新発見考古速報、岐阜県文化財保護センター調査報告書第19集 岡本山横穴群、同第20集 岡前遺跡、同第22集 西乙原遺跡・勝更白山神社周辺遺跡、同第24集 下巾上遺跡
(財)土岐市埋蔵文化財センター 各務原市埋蔵文化財調査センター	元屋敷窯跡範囲確認調査概報 各務原市文化財調査報告書第19号 各務寒洞窯址群発掘調査報告書、同第20号 太田1号窯跡群発掘調査報告書
(財)枚方市文化財研究調査会 高槻市立埋蔵文化財調査センター 鳥取県埋蔵文化財センター	枚方市建造物調査報告Ⅲ 枚方市の社寺建築 高槻市文化財調査報告書第20冊 古曾部・芝谷遺跡 鳥取県教育文化財団調査報告書41 小町第1遺跡、同43 鶴田荒神ノ峯遺跡・鶴田堤ヶ谷遺跡・宇代横平遺跡・宇代寺中遺跡、同44 米子城跡6遺跡、同45 桂見遺跡、同46 西桂見遺跡・倉見古墳群、同47 陰田遺跡群、同48 宮内第1遺跡・宮内第4遺跡・宮内第5遺跡・宮内2・63~95号墳
(財)鳥取市教育福祉振興会 埋蔵文化財調査センター	秋里遺跡、秋里遺跡 マンション建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書、平成7年度 桂見遺跡群発掘調査概要報告書、平成7年度 面影山古墳群発掘調査報告書、山ヶ鼻遺跡Ⅱ
鳥根県埋蔵文化財調査センター	門遺跡、かんの流れ、塩津山1号墳が語る古代の出雲、タイムトリップひがしいずも、八雲立つ風土記の丘研究紀要Ⅲ
(財)広島県埋蔵文化財調査センター	広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第137集 城山、同第138集 下上戸遺跡、同第139集 熊ヶ迫第1~3号窯跡、同第140集 神峠遺跡、同第141集 本地丸山遺跡発掘調査報告書、同第142集 薬師城跡、年報11 平成6年度、研究輯録Ⅵ
(財)徳島県埋蔵文化財センター	徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第5集 日吉谷遺跡、同第6集 北原~大法寺遺跡・十楽寺遺跡・椎ヶ丸~芝生遺跡、同第7集 上喜来蛭子~中佐古遺跡、同第8集 古城遺跡、同第10集 柿谷遺跡・葛蒲谷西山B遺跡・山田古墳群

(財)北九州市教育文化事業団 埋蔵文化財調査室	北九州市埋蔵文化財調査報告書第181集 上曾根遺跡、同第182集 中繩手遺跡(1区～3区)、同第183集 園田遺跡・八反田遺跡、同第184集 金山遺跡Ⅵ区、同第185集 玉塚遺跡第3地点・上徳力遺跡第22地点、同第186集 玉塚遺跡第4地点・徳力遺跡第12・19地点・南方・上ヶ田遺跡第4(南)・第10・第12地点、同第187集 長野・早田遺跡(第2地点)、同第188集 貫川遺跡11、同第189集 脇田・丸山遺跡1、同第190集 片伊田遺跡Ⅱ地区、同第191集 長ムタ遺跡、同第193集 祇園町遺跡3 第3地点、同第194集 中繩手遺跡4区、埋蔵文化財調査室年報12 平成6年度、研究紀要 第10号
米沢市教育委員会	米沢市埋蔵文化財調査報告書第52集 遺跡詳細分布調査報告書第9集、同第53集 一ノ坂遺跡発掘調査報告書
栃木県教育委員会	栃木県埋蔵文化財調査報告第138集 成沢遺跡、同第168集 那須官衙関連遺跡、同第169集 下野国分寺跡Ⅱ、同第170集 向北原南遺跡、同第172集 安塚坂下古墳、同第173集 中道遺跡・吉原遺跡・実耕地遺跡・藤原遺跡・大塚古墳群・大木内遺跡発掘調査、同第176集 砂田東遺跡・上横田A遺跡、同第177集 小丸山古墳群・山苗代A・C遺跡、同第183集 栃木県埋蔵文化財保護行政年報18、同第185集 寺野東遺跡Ⅷ
高崎市教育委員会	高崎市文化財調査報告書第88集 岡久保遺跡、同第99集 山名原口Ⅰ遺跡、同第137集 下滝梅崎遺跡・山名土合遺跡・第12回埋蔵文化財展、同第139集 高崎市内遺跡埋蔵文化財緊急発掘調査報告書10、同第140集 三島塚古墳・旭町Ⅰ遺跡、同第141集 真町Ⅰ遺跡、同第142集 稲荷町Ⅱ遺跡、同第143集 寺尾東館Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡、同第144集 並榎北Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡、同第145集 下中居条里遺跡、同第146集 東町Ⅴ遺跡、高崎市遺跡調査会報告書第35集 上大類野地田遺跡、同第40集 倉賀野下天神遺跡、同第41集 井野・矢ノ上遺跡、同第42集 江木諏訪西遺跡、同第43集 栄町Ⅰ遺跡発掘調査報告書、同第44集 矢中村西Ⅰ遺跡、同第45集 倉賀野中里前遺跡、同第46集 上並榎 稲荷山古墳、同第47集 上中居平塚Ⅰ遺跡、同第48集 双葉町Ⅰ遺跡、同第49集 下小鳥町頭Ⅱ遺跡、同第50集 下之城村前Ⅱ遺跡、同第51集 中尾村前Ⅴ遺跡、同第53集 上中居平塚Ⅱ遺跡
群馬町教育委員会	群馬町埋蔵文化財調査報告書第42集 足門村西古墳群、同第43集 庚申遺跡、同第44集 町内遺跡Ⅳ
坂戸市教育委員会	坂戸市郷土歴史資料第3集 坂戸市関係新聞記事資料目録(一)、同第4集 坂戸市関係新聞記事資料目録(二)
志木市教育委員会	志木市の文化財第23集 志木市遺跡群Ⅶ
町田市教育委員会	なすな原遺跡 No. 2 地区調査
神奈川県埋蔵文化財調査報告38	
鎌倉市教育委員会	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書12 平成7年度発掘調査報告、鎌倉市二階堂 史跡永福寺跡、仮粧坂周辺詳細分布調査報告書、鎌倉の埋蔵文化財1 発掘調査選集 昭和54年～平成7年分
小田原市教育委員会	小田原市文化財調査報告書第55集 三の丸南堀第Ⅲ地点、同第56集 中宿町遺跡第Ⅰ地点、同第57集 二の丸中堀Ⅲ、同第59集 山角町遺跡第Ⅰ地点、同第60集 小峯御鐘ノ台大掘切
八代町教育委員会	八代町埋蔵文化財調査報告書第10集 和泉遺跡・長崎遺跡・見洗澤遺跡、同第11集 堀ノ内遺跡
岡谷市教育委員会	海戸・後田原・榎垣外・新井北遺跡発掘調査報告書、郷土の文化財19 花上寺遺跡
大山町教育委員会	東黒牧上野遺跡A地区
加賀市教育委員会	加賀市埋蔵文化財報告書第29集 加賀国熊坂城、同第31集 保賀C遺跡、同第32集 加賀国熊坂城跡
岐阜市教育委員会	岐阜市遺跡調査会報告書第3集 堀田・城之内
美濃市教育委員会	美濃市の文化財
磐田市教育委員会	匂坂中遺跡南区9期発掘調査報告書、匂坂中遺跡発掘調査報告書Ⅱ
新居町教育委員会	特別史跡 新居関跡調査報告書Ⅰ
今津町教育委員会	町内遺跡発掘調査概要報告書 妙見山古墳群6号墳の調査、日置前遺跡発掘調査概要報告書、弘川下野遺跡発掘調査概要報告書
日野町教育委員会	日野町埋蔵文化財発掘調査報告書 第10集

近江町教育委員会	近江町地域文化叢書第1集 息長古墳群、近江町文化財調査報告書第18集 近江町埋蔵文化財調査集報1、同第19集 近江町埋蔵文化財調査集報2
野洲町教育委員会	野洲町文化財資料集1994-1 平成5年度野洲町内遺跡発掘調査概要、同1995-1 平成6年度野洲町内遺跡発掘調査概要、同1996-1 平成7年度野洲町内遺跡発掘調査概要
能登川町教育委員会	能登川町埋蔵文化財調査報告書第38集 法堂寺遺跡(6・8次)、同第39集 斗西遺跡(7次)・佐生北遺跡、同第40集 正楽寺遺跡(5次)
貝塚市教育委員会	貝塚市埋蔵文化財調査報告第36集 加治・神前・畠中遺跡発掘調査概要、同第37集 東遺跡発掘調査概要I、同第38集 貝塚市遺跡群発掘調査概要18、同第39集 貝塚寺内町遺跡
泉佐野市教育委員会	泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要 平成6年度、泉佐野市埋蔵文化財発掘調査報告書42 上町東遺跡、同43 白水池遺跡、同44 三軒屋・諸日遺跡発掘調査概要
大阪狭山市教育委員会	日本最大の狭山池と天平の僧 行基
能勢町教育委員会	平成7年度 木野川流域遺跡群発掘調査事業報告書、平成7年度 能勢町埋蔵文化財調査概要 能勢町文化財調査報告書第6冊、平成7年度 大里遺跡発掘調査報告書II 同第7冊
伊丹市教育委員会	伊丹市埋蔵文化財調査報告書第18集 有岡城跡発掘調査報告書IX、同第20集 口酒井遺跡発掘調査報告書
川西市教育委員会	平成7年度 川西市発掘調査概要報告
氷上郡教育委員会	氷上郡埋蔵文化財発掘調査報告書第1集 平松片山古墳、同第2集 ブラ山・ボラ山、氷上郡埋蔵文化財分布調査報告書(2)、同(3)
竹野町教育委員会	竹野町文化財調査報告書第10集 見蔵岡遺跡
日高町教育委員会	日高町文化財調査報告書第11集 旧大岡寺庭園保存修理事業報告書
中町教育委員会	中町文化財報告11 曾我井・沢田遺跡 曾我井・山田遺跡
天理市教育委員会	天理市埋蔵文化財調査概報 平成4・5年度
大和高田市教育委員会	コンピラ山古墳 第4次発掘調査報告書、大和高田市文化財調査報告第5集
大和郡山市教育委員会	第2回こおりやま歴史フォーラム 豊臣秀長とその時代
島根県教育庁文化課	しまねの古代文化第3号、出雲国風土記論究 下巻、古代文化研究 第4号
三良坂町教育委員会	三良坂町文化財調査報告書第1集 大仙遺跡・御箱山1号古墳、同第2集 白ヶ迫製鉄遺跡
山口県教育委員会	山口県埋蔵文化財調査報告第179集 柳瀬遺跡・奇兵隊陣屋、同第180集 本郷遺跡、同第182集 平原遺跡、山口県教育財団埋蔵文化財調査報告第1集 吉政遺跡、同第2集 東禅寺・黒山遺跡I
高松市教育委員会	高松市埋蔵文化財調査報告第25集 空港跡地遺跡(亀の町地区I)、同第26集 井出東I遺跡、同第27集 井出東II遺跡、同第28集 空港跡地遺跡(亀の町地区II)、同第31集 松林遺跡、弘福寺領讃岐国山田郡田岡関係遺跡発掘調査概報I
福岡市教育委員会	福岡市埋蔵文化財調査報告書第368集 比恵遺跡13、同第372集 鴻臚館跡4、同第441集 井尻B遺跡4・南八幡遺跡4、同第442集 比恵遺跡群(19)、同第443集 博多49、同第444集 原遺跡8、同第445集 持田ヶ浦古墳群2、同第446集 蒲田部木原3次、同第447集 博多50、同第448集 博多51、同第449集 博多52、同第450集 博多53、同第451集 比恵遺跡群(20)、同第452集 比恵遺跡群(21)、同第453集 比恵遺跡群(22)、同第454集 那珂遺跡15、同第455集 那珂16、同第456集 下月隈天神森遺跡II、同第457集 下月隈天神森遺跡III、同第458集 井相田C遺跡第5次・高畑遺跡第14次、同第459集 箱崎4、同第460集 東那珂遺跡2、同第461集 吉武遺跡群VIII、同第462集 長峰遺跡2、同第463集 福岡城 赤坂門跡、同第464集 吉塚2、同第465集 立花寺3、同第466集 立花寺4、同第467集 福岡外環状道跡関係埋蔵文化財調査報告1、同第468集 次郎丸遺跡I、同第469集 カルメル修道院内遺跡III、同第470集 有田・小田部第23集、同第471集 有田・小田部第24集、同第472集 有田・小田部第25集、同第473集 有田・小田部第26集、同第474集 兜塚古墳、同第475集 堀ノ内遺跡1、同第476集 三苦永浦遺跡、同第477集 三苦永浦遺跡2、同第478集 姪浜遺跡2、同第479集 今宿五郎江遺跡III・徳永A遺跡III・丸隈山遺跡群I、同第480集 桑原遺跡群2、同第481集 大原D遺跡群1、同第482集 四箇周辺遺跡調査報告書(7)、同第483集 西新町遺跡4、同第484集 西新町遺跡5、同第485集 入部VI、同第486集 鴻臚館跡

北九州市教育委員会	6、同第487集 鴻臚館跡7、福岡市埋蔵文化財年報Vol. 9 北九州市文化財調査報告書第68集 祇園町遺跡第2地点、同第69集 相坂横穴群、同第70集 小倉城跡Ⅱ
甘木市教育委員会	下浦宮原遺跡Ⅰ 甘木市文化財調査報告書第33集、屋永西原遺跡 同第34集、平塚・中寒水 二又川遺跡 同第35集、同第36集 平塚山の上遺跡Ⅰ、同第37集 栗山遺跡Ⅲ・平塚垣添遺跡、同第38集 矢野竹遺跡、同第39集 三奈木大佛山遺跡Ⅲ、第二版 甘木市の文化財、水に浮かぶムラのはなし
大刀洗町教育委員会	大刀洗町文化財調査報告書第7集 甲条神社遺跡、同第8集 大刀洗町内遺跡詳細分布調査報告書、同第9集 本郷楯遺跡、同第10集 下高橋上野遺跡
水巻町教育委員会	宮尾遺跡A地点 水巻町文化財調査報告書第3集、鯉口遺跡 同第4集
熊本市教育委員会	つつじヶ丘横穴群発掘調査概報Ⅱ
人吉市教育委員会	人吉市文化財調査報告書第16集 史跡人吉城跡Ⅶ
菊水町教育委員会	諏訪原遺跡
宇佐市教育委員会	宇佐地区遺跡群発掘調査概報Ⅶ 虚空蔵寺9次調査・小部遺跡11次調査・別府遺跡9次調査・瓦塚遺跡2次調査・台ノ原遺跡5次調査、同Ⅷ 瓦塚遺跡3次調査・別府遺跡10次調査・台形ノ原遺跡6次調査・小部遺跡12次調査・虚空蔵寺10次調査、宇佐道路埋蔵文化財発掘調査報告書、宇佐別府道路埋蔵文化財発掘調査報告書、東屋敷遺跡・大園遺跡・西ノ股遺跡・石原貝塚2次調査
宮崎市教育委員会	平田遺跡、史跡生目古墳群周辺遺跡発掘調査報告書、猿野遺跡・萩崎第2遺跡
佐土原町教育委員会	佐土原町文化財調査報告書第10集 下村窯跡群報告書
栃木県立なす風土記の丘資料館	第14回企画展 弥生人のくらし
群馬県立歴史博物館	新発見考古速報展'96、大唐王朝の華一都・長安の女性たち
国立歴史民俗博物館	国立歴史民俗博物館研究報告 第63、66、68、69集、平成8年度 国立歴史民俗博物館要覧、データベースれきはく 検索の手引き
君津市立久留里城址資料館	君津市立久留里城址資料館年報(平成7年度)
足立区立郷土博物館	舍人遺跡
大田区立郷土博物館	大田区の船大工
出光美術館	出光美術館館報第95号、出光美術館研究紀要第2号
市立岡谷蚕糸博物館	岡谷蚕糸博物館紀要1号/1996
上田市立博物館	金箔瓦の城
氷見市立博物館	特別展 縄文人の祈り
石川県立歴史博物館	祝樽、波濤をこえて
福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館	都市遺跡調査の意義とその活用、一乗谷朝倉氏遺跡環境整備報告Ⅲ
三方町立郷土資料館	多由比神社をとりまく集落の歴史展
浜松市博物館	博物館資料集5 民具から見た台所の歴史、浜松市博物館第15回特別展 庶民の旅、浜松市博物館館報Ⅷ
名古屋市博物館	名古屋市博物館企画展 考古学のススメ、名古屋市博物館年報No. 19(平成7年度)
名古屋市見晴台考古資料館	幅下小学校遺跡、高蔵遺跡第10次調査の概要、高蔵遺跡第11次調査の概要、鳴海城跡発掘調査概要報告書、鳴海城跡第2次発掘調査概要報告書、平田城跡発掘調査報告書、見晴台遺跡第35次発掘調査概要報告書、西志賀遺跡、雷貝塚第2次発掘調査報告書、正木町遺跡第5次調査の概要、正木町遺跡第6次発掘調査概要報告書、見晴台遺跡第32次・第33次発掘調査の記録、名古屋城三の丸遺跡第6・7次発掘調査報告書、特別展 城下町 大発掘、名古屋市見晴台考古資料館年報13 1995(平成7)年度事業報告、味鏡B遺跡調査報告書
愛知県清洲貝殻山貝塚資料館	朝日遺跡Ⅲ
斎宮歴史博物館	平成7年度 斎宮歴史博物館年報、特別展 斎宮・国府・国分寺
滋賀県立安土城考古博物館	平成7年度年報、紀要第4号、平成8年度秋季特別展 元龜争乱
大阪府立近つ飛鳥博物館	平成8年度秋季特別展 金の大刀と銀の大刀
大阪府立弥生文化博物館	平成8年度秋季特別展 中国 仙人のふるさと、大阪府立弥生文化博物館要覧 平成7年度
吹田市立博物館	平成8年度特別展 鉄道沿線物語

- 柏原市立歴史資料館
 岸和田市立郷土資料館
 太子町立竹内街道歴史資料館
 兵庫県立歴史博物館
 神戸市立博物館
 西宮市立郷土資料館
 奈良県立民俗博物館
 奈良国立文化財研究所飛鳥資料館
 島根県立八雲立つ風土記の丘資料館
 広島県立歴史博物館
 土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム
 北九州市立考古博物館
 王塚装飾古墳館
 佐賀県立名護屋城博物館
 東北学院大学東北文化研究所
 早稲田大学文化財整理室
 名古屋大学年代測定資料研究センター
 天理大学附属天理参考館
 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
 九州大学大学院比較社会文化研究科
 嶺南大専校博物館
 山武考古学研究所
 袖ヶ浦市史編さん事務局
 国立国会図書館
 新宿区遺跡調査会
 (株)名者出版
 (株)講談社
 (株)新人物往来社
 至文堂
 中央公論社
 (財)日本城郭協会
 玉川文化財研究所
 厚木整理事務所
 国分尼寺北方遺跡調査団
 遺跡調査団
 高石古墳遺跡発掘調査団
 全国天領ゼミナール事務局
 (財)古代学協会
 古代を考える会
- 柏原市立歴史資料館 館報7、平成8年度企画展 高井田山古墳をめぐって
 秋季特別展 岸和田の仏教美術
 平成8年度企画展 聖徳太子伝、太子町立竹内街道歴史資料館 館報(第2号)、太子町立竹内街道歴史資料館調査報告第1集 竹内街道の道しるべ
 館報 1995
 神戸市立博物館館蔵品目録 美術の部11、12、同地図の部11、12、同考古・歴史の部11、12、神戸市立博物館年報No.11、研究紀要第11、12号
 西宮市立郷土資料館第11回特別展 発明とデザイン
 特別テーマ展 鬼の世界
 斉明紀
 '96特別展 黄金に魅せられた倭人たち
 安芸国楽音寺、海の道から中世をみるⅠ 中世の港町、第2回 新収蔵資料展
 山口県豊北町埋蔵文化財調査報告書第12集 土井ヶ浜遺跡、折尾横穴群内 普濟院跡
 研究紀要vol.3、北九州市立考古博物館年報 平成7年度、第14回特別展 縄文と弥生の神と祈り
 王塚古墳 桂川町文化財調査報告書第13集
 名護屋城博物館年報1995 No.5、研究紀要第2集
 東北文化研究所紀要 第28号
 下戸塚遺跡の調査 第1部旧石器時代から縄文時代
 名古屋大学加速器質量分析計業績報告書(Ⅶ)
 松野照武氏旧蔵資料目録1、天理参考館報 第9号
 岡山大学構内遺跡調査研究年報13 1995年度
 九州文化史研究所紀要 第四十号
 嶺南大専校博物館學術調査報告第19冊 慶山林堂地域古墳群Ⅱ、同第20冊 牙浦・咸晶間の文化遺蹟
 西毛の古代
 稲荷台遺跡・寒沢遺跡・西ノ谷下遺跡・根形台遺跡群
 日本全国書誌 第30号
 市谷本村町遺跡 尾張藩徳川家上屋敷跡
 歴史手帖 第24巻9~11号
 歴史発掘⑩ 須恵器の系譜
 歴史読本 12月号
 木工の鑑賞基礎知識
 日本の古代12 女性の力
 財団法人 日本城郭協会のあゆみ
 堅台遺跡発掘調査報告書、小田原城三の丸北堀第Ⅰ・Ⅱ地点発掘調査報告書、稲荷台地遺跡群発掘調査報告書、中村遺跡発掘調査報告書、戸室茅林遺跡第1・2地点発掘調査報告書
 海老名本郷(X-1~4)、海老名本郷(XI-1、2)
 国分尼寺北方遺跡、大町谷東遺跡B地点
 伊勢原上粕屋団地内遺跡
 高石経塚遺跡発掘調査報告書、久本横穴墓群発掘調査報告書
 第11回全国天領ゼミナール記録集
 古代文化 第48巻第8~10号
 古代を考える57 見瀬丸山古墳の検討

大阪・郵政考古学会
名神高速道路内遺跡調査会
河内長野市遺跡調査会

淡神文化財協会・(財)のじぎく文化財保護研究財団
妙見山麓遺跡調査会
奈良国立文化財研究所

朝鮮学会
(財)由良大和古代文化研究協会
庄内町立図書館

(財)京都市埋蔵文化財研究所
丹後町教育委員会
野田川町教育委員会

加茂町教育委員会
京都府立総合資料館
京都府立山城郷土資料館
京都府京都文化博物館
京都市歴史資料館

丹後町古代の里資料館
綾部市資料館

亀岡市文化資料館
向日市文化資料館

大山崎町歴史資料館
宇治市歴史資料館
城陽市歴史民俗資料館
同志社大学歴史資料館
佛教大学総合研究所
京都府立ゼミナールハウス

松井忠春
森川昌和
山本裕作

郵政考古紀要 通巻31冊
名神高速道路内遺跡調査報告書第1輯 水無瀬荘跡遺跡
河内長野市遺跡調査会報XⅡ 高向遺跡、同XⅢ ジョウノマエ遺跡・尾崎遺跡・尾崎北遺跡・菱子尻遺跡・市町東遺跡、同XⅣ 錦町北遺跡
淡河中村遺跡発掘調査報告書、(財)のじぎく文化財保護研究財団紀要 創刊号

楠・荒田町遺跡
平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧、平城宮発掘調査出土木簡概報(31)、飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報(12)、官営工房研究会会報2・3、奈良国立文化財研究所史料第40冊 山田寺出土建築部材集成、同第43冊 曾谷貝塚資料他、奈良国立文化財研究所年報1995、1995年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報、奈良国立文化財研究所学報第53冊 平城宮朱雀門の復原的研究

朝鮮学報 第159輯
由良哲次博士を偲ぶ、研究紀要第3集
庄内町の石塔

木村捷三郎収集瓦図録
竹野遺跡発掘調査概要 京都府丹後町文化財調査報告第11集
小森山2号墳発掘調査概報 京都府野田川町文化財調査報告第7集、雲岩寺跡(第1次)発掘調査概報 同第15集、雲岩寺跡(第2次)発掘調査概報 同第16集、香久山城跡・屋敷ノ内古墳群・雲岩寺跡(第3次)発掘調査概報 同第17集

加茂町文化財調査報告第13集 恭仁宮(京)跡発掘調査概要
京都府資料目録追録 No. 12
企画展資料23 発掘成果速報
京都文化博物館研究紀要 朱雀第7、8号
平安の古瓦展、京都市歴史資料館紀要第13号、平成7年度京都市歴史資料館年報、八坂神社の古記録

産土山古墳発掘調査概要 京都府丹後町文化財調査報告第12集
綾部市資料館報平成6年度、綾部市資料館研究紀要1 福井家文書調査報告、同2 興隆寺大般若経の研究、綾部市文化財調査報告第19集、同第23集、同第24集、史跡私市円山古墳整備事業報告
第12回特別展 近代丹波・亀岡のあけぼの
向日市文化資料館館報第11号平成6年度、向日市古文書調査報告書第5集 森本地区古文書調査報告書

大山崎町歴史資料館 館報第3号
平成7年度 宇治市歴史資料館年報、隠元渡来
企画展 久津川古墳群を掘る
同志社中学校体育館建設予定地発掘調査概要、同志社大学校キャンパスの遺跡1994
佛教大学総合研究所紀要第3号別冊 成熟都市の条件、東アジアの村落と家族
安定社会の総合研究

平成7年 正倉院展目録
「いろ」の研究
東播磨 第3号

編集後記

情報62号が完成しましたのでお届けします。

本号では、前号に続き、深澤芳樹氏の論考の後編をお送りします。また今年度に当調査研究センターが実施した調査のうち、特に成果のありました調査地についても、抄報を掲載いたしました。その他、共同研究事業の成果につきましても、前号に引き続いて載せておりますので、資料としてご活用いただければ幸いに存じます。

なお、本号では、特に当調査研究センターの川上理事から中国西安市を訪問されたときの紀行文をお寄せいただきましたので、併せて掲載いたしました。

(編集担当=土橋 誠)

京都府埋蔵文化財情報 第62号

平成8年12月26日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40番の3
Phone (075)933-3877 (代)

印刷 中西印刷株式会社

〒602 京都市上京区下立売通小川東入
Phone (075)441-3155 (代)



KYOTO
ARCHAEOLOGY CENTER